

ハンドレッド—とある  
転生者の奮闘記—

konvoi

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

《四宮アキラ》——彼は転生者である。これは気が付けばライトノベルの世界に転生していた彼が、原作知識を持って原作世界で奮闘する物語である。

# 目次

## プロローグ

転生と遭遇を果たしたら、美女達だった。 | 1

タフタフ☆サベージ | 21

覚醒。パートは一話の終わりになることが多い。 | 49

逃げる、避けるばかりは恥ではない。 | 79

勧誘された時はよく考えてから結論す

べし | 103

## 第一章

入学したての決闘宣言はラノベ特有の

## 恒例行事

一人につき武器は一つとは限らない | 133

165

武器は使い方次第で化ける | 192

原作と違う展開に向かったと思っ

た。原作撮りの展開に進んでいた。な、何

を言ってるのかわからねえと思う g (r

y | 220

幕間 如月ハヤト編 壱 | 239

人は面白い人間を見つけると、すぐ

でもちよっかいを掛けたくなる。

274

3 時のおやつのはアイスは別格也。

原作改変が激しいと地味に面倒くさく

なる。(byアキラ) ————— 304

やだ、俺つてば空気すぎ。 byアキ

ラ ————— 320

## プロローグ

転生と遭遇を果たしたら、美女達だった。

世界には『異世界転生』なるものが存在する。

それは神の悪戯か、はたまた何かの要因によるものか、答えは誰にもわからない。

強いて言えば大抵の場合、神の気紛れによるところが大きい点くらいだ。実に人騒がせなことこの上ない。

転生には大まかに分けて二種類ある。1つはある日突然目を覚ますと、転生前の肉体と記憶を保ったまま異世界に召喚されていたり。

また1つは一糸纏わぬ赤子の状態で、転生先に一個の命として生まれ落ちていたり、具体的な例を挙げるならば自ずとこの二種類が大半を占める。

人はその人たちの事を《転生者》と呼ぶ。

かくいう俺こと「四宮アキラ」もその後者に該当する。気が付けば前世の記憶を持つたまま、赤子の状態で生まれ落ちていたのだ。

生まれた当時の記憶は十数年が過ぎた現在でも残っている。見知らぬ天井（決してネタ的な意味ではなく）、日本語らしき言語、日本人らしき特有の黒髪黒目。生まれ落ちた

先がファンタジー感満載の異世界でなかったことに安堵していたのは内緒だ。

まあ色々と思うところはああるけど、俺は一個の命として新しい人生を謳歌していく事になったのだった。

生後数年が経過したある日の事だ。四つん這いからのよちよち歩きを覚え、幼稚園に入る頃には自由に動く事ができるようになり、勉強等で言語を学習する内に違和感を感じていた俺はある事実に気が付いた。

(あ……これ俺の知ってる日本じゃない)

生まれて初めて味わった驚愕の事実の瞬間だった(転生的な意味で)。

文字や文化は日本に似ていても、異なる部分が多々あった。文化のわずかな違いだったり、俺の知る地球の歴史と異なっていたりと色々だ。そりや違和感感じるのも当たり前だわ。

話しを戻そう。俺は子供らしく言語を学んでいくうち、『皇国ヤマト』なる日本の雰囲気漂う和の国に誕生した事を知る。むしろ何で日本じゃないことに今さら気づくんだらうね。馴れというやつだろうか。

さて。

もう『日本』じゃなくて、『ヤマト』なんて地名の時点で察してるあなた。正解です。この世界はあるライトノベルの一つ、前世で割と愛読していた《ハンドレッド》の世界なのでした。

俺自身としても最初こそ信じられなかったけれど、それが『今の』俺にとつての現実であることを確信したのは、ヤマト以外の国の名前を調べていったからだ。

アメリカ合衆国を彷彿とさせる『リベリア合衆国』や『フランソワ王国』等。もうこれだけで俺は「本当にラノベの世界に転生したんだ・・・」と実感した。

しかし・・・何故俺は知らないうちに転生できたのだろうか。そこら辺の記憶がすつぽり抜け落ちていて、はつきりと思いつき出す事ができない。これが所謂異世界転生というものののだとしたら俺は原作介入すべきなのか。それとも何もせずに生涯を全うすべきなのか。

おそらくはこれも見知らぬ神か何かの仕業なのだろうが、如何せんこういう事態には遭った事が無いのでどうすべきか悩む。

もういつそのこと原作主人公と絡みに行くか？ それともヒロイン勢の誰かと繋がりを持つか？ と、思ったけど原作キャラと接点を持たないのでどうする事も出来ない。まあ、そんなのは後からどうとでもなるし別にいいか。ともかくにも今は俺の今

世を謳歌しようではないか。これこそ臨機応変につてね。

——数年後。

俺が転生してさらに数年が経過——俺も今や中学三年。卒業式を控えた中学三学期目の季節。

卒業が近い中、転生先で俺を生んでくれた両親と共に、俺はヤマト国外へ旅行に出ている。

俺の中学卒業を記念しての旅行だと両親は言っていたが、少し性急過ぎではないだろうかと思わなくもない。それを2人に聞いたですと、

父さん曰く「家族水入らずと言うやつだ。ここは黙ってついてこい」。

母さん曰く「中々会う事が無いんだもの。これを機会に家族三人で思い出を作りましょ」とのことだ。

そもそもこの両親が共働き且つ職業柄忙しいせいで中々顔を合わせる事も出来ていなかったから、俺もその提案には賛成なのだが・・・まあ、特に部活に入っていることもなく、予定というものもなくて暇だったから、特に文句はないんだけどね。

・・・いや、でもやっぱり卒業前の学生を連れて旅行に行くってどうなんだ？ 土日



をフルに使った旅行だから特に問題もないけど。

で。肝心の旅行先はリベリア合衆国領内の南端。海と面した浜辺を横切る道路を、俺達家族が乗る車両が走る。

浜辺は遠めから見ても綺麗な白色に輝いていて、夜になれば月明かりに照らされて昼間よりも美しい光景になるともつぱらの噂で知られる。

後部座席から覗いてみても、確かに白く輝いていて綺麗だなと思わなくもない。が、そんな浜辺周辺を手を繋ぎ合つて歩くカップルの姿がちらほらと見える。チィッ！

彼女いない歴半還暦（前世含む）の俺に対する当てつけかっ！ おのれっ、呪つてやる……！

「あ、そうだわ。アキラ、ちよつと手を出して」

「ノロワレロノロワレロノロワレロ……え、なに？」

実に幸せそうなカップルたちに怨念めいたことを呟いていた俺に、前の助手席に座る母さんが手を出すよう促してきた。ちなみに運転は父さんがやっている。ちよつと今カップル共を呪うのに忙しいから後にしてほしいんだけど。ちなみに適当に言ってるだけだから効果なんて勿論ない。

「ちよつとだけ早い卒業祝いよ。ほら早く」

「そんなに急かささないでよ」

母さんが急かすので俺は仕方なく手を出す。すると、掌に何かが置かれた。

それは紅い布地に包まれた物体だった。布地の表面には「方位除守」とヤマト由来の言葉で刺繍され、肝心の中身は丸みを帯びているのか、ピンポン玉サイズの物が収まっているようだ。

「なにこれ？」

「お守りよ。『これから先アキラが事故とかに遭わないように』っていう願いを込めた、ね。」

「お前は色々と問題に巻き込まれる体質だからな。そんなお前が心配だから、母さんが作ったんだ」

父さんが言った通り、俺は何かと面倒事に巻き込まれやすい体質だ。転生してから初めて面倒事は小学校の時だ。クラス内で二つに分かれた5〜6人程度のグループ（両方も男子のみ）が何かで言い合いになって大喧嘩に発展した時、俺は両グループのどこにも属してなかったはずなのに、それでいて無関心を決め込んでいた俺に矛先が向いて「お前はどっちの味方だ!？」と理不尽な怒られ方をしたことがある。おまけにその喧嘩に巻き込まれたのだ。無論、仕掛けてきた奴は一人残らず俺が物理的に黙らせてやった。その後俺だけが担任の先生に怒られた。解せぬ。

喧嘩の原因は何なのか？ 知らん、そんな事は俺の管轄外だ。

それ以来、俺には関係ない面倒事に巻き込まれることが多くなつた。例えば野良犬に追つかけられるクラスメイトと一緒に追いかけられたり。大雨の日に通りかかった車によつて水溜りのシャワーを浴びたり。炭酸飲料の入つた缶を開けようとして手から滑らせ落とした拍子に中身が飛び出たり・・・etc。数えるのも面倒なくらいに。これつてある意味巻き込まれ系転生者の枠に入りませんか？

### 閑話休題。

それにしてもそうか。母さんが・・・父さんからは何もないんだ。

「あら。確かに包みは私が作ったものだけど、お守りの”中身”はあなたが作ったものじゃない」

”有り合わせの物”から錬成して形にしただけだ。それにこの程度でこいつの体質が改善されるとは思わないけどな」

バックミラーに映る俺の顔を見ながら父さんが貶してくる。しかし父さんや。俺は別に好き好んで巻き込まれている訳ではないのでそこんところ理解してね。というか中身は父さんが用意してくれていたのか・・・両親からの贈り物つて、気恥ずかしさとか嬉しい感が半端じゃないな。転生してからの親だけだ。

「でも本当にアキラってば、何かに憑かれてるんじゃないかってくらいに運がないわよね。この間なんか猫に引っ掻かれてたし」

「柵から飛び降りてきておいて、偶々近くを通りかかった俺がなんで引っ掻かれなきゃならんのか」

ちなみにその出来事は1週間前の出来事だ。おかげで未だに残る引っ掻き傷が目立つのなんの。まあ別に気にしてないけども。

しつかしまあ。今生での俺の運も大概なんだよなあ。前世は割と平均の人並みの運だったのに、転生してからは目に見えて運が悪くなったっていうか。巻き込まれ回数も年々上昇し続けているっていうか。

「ま、それは一応“保険”としての意味合いも兼ねている。何かあれば遠慮なく使え」「そうよ。だってそれは——」

母さんが何か言おうとした——その時だった。

俺達の乗る車の前に、突如として一隻のクルーザーが“落下”してきた。

進路方向上を走る車の目の前に突然落下してきた海上を進む為のクルーザーに驚いたのだろう。父さんはハンドルを左に切り、左側の反対車線をつつ切って電柱に激突。

その強い衝撃でエアクッションが作動して、シートベルトを締めながらも強い衝撃で体が前方に突き出した。両親は作動したそれに守られる。が、俺はその衝撃で眼前の座席シートの背面と熱いディープリキスを交わす事になってしまう。

「きやあつ!!」

「ぐうつ!!」

「ぶぼっ!!」

突然の事態で両親が悲鳴を上げ、俺は間抜けな声を上げてしまう。何で俺だけ。

「くっ・・・大丈夫か？」

「え、ええ。私は大丈夫よ。アキラは？」

「唇の裏側切った・・・」

「大丈夫そうだな」

「みたいね」

クッションに守られて奇跡的に無傷だった両親が言う。ちよつと。何で俺だけそんな軽いのよ。泣くよ？ 15の中坊が泣きわめいちゃうよ？

「しかし、いったい何が・・・ッ!!」

「? どうかしたの」

状況を把握しようと父さんが車外の様子を見渡した。そしてクルーザーのほうへ目

を向けた時だ。父さんが目を見開いて何かに驚いている。何か“化物”を見たような、そんな信じられないといった表情だった。

「父さん? ……!!」

俺も続いて後ろに振り返る。父さんが驚いたのはレーザー——ではなく、その『向こう側』だった。俺自身も目を疑う。そのはずだ。何せ目に映ったモノは、世界中の誰もが出遭いたくもないモノだったのだから。

路上に突き刺さった艦橋部がひしゃげ、逆立ちしたような体勢で路上にたたずむクルーザーの先——そこに居たのは、まさしく“怪物”だった。

全身を覆い尽くす、陽の光に照らされて艶を映す黒い皮膚。

その皮膚の表面から光る黄色い模様。

無数の脚で立ち、鋏らしき形状をした両腕。

そして顔らしき部位に浮かぶ、大きく開いた口に並ぶ無数の歯。その中央に、砲口を思わせる筒状の物体。

『異形の怪物』——そう形容するに相応しいモノが海岸側から、その全容を現していた。

人は、人類はその存在を総称してこう呼んだ。

「サベージッ……!」

——グオオオオオオオオツ!!!

俺がその存在の名を口にすると、異形の怪物——サベージは声高らかに咆哮した。

サベージ——十数年前、南極に飛来した隕石から現れた、地球外異種生命体。当時から人間を襲う危険な存在として世界中が認知し、以来度々地球に訪れる謎の怪物たち。

政府から『サベージ』と呼称されるようになった奴らは当時から現存するどの兵器でも傷をつける事が難しく、最初に飛来した時はありとあらゆる術を用いて撃退するに至った《ファースト・アタック第一次遭遇》、そして”ある兵器”の開発によって初めてサベージを撃破する事ができた《セカンド・アタック第二次遭遇》によってやっと人類が対抗できるようになった今もお、人類に牙をむく存在だ。

そんな存在が今、俺達の前に立っている。

サベージの数は3体。先頭に立つ1体の後ろから、2体のサベージが海中から海岸に上陸してくる。

「まずい！ すぐに車から降りろ、2人とも！」

「え、ええ！」

父さんが慌てた様子で促す。電柱に突っ込んだせいで車はボンネットの隙間から煙を吹きだしていた。どうやら壊れたようだ。実を言うと俺達が乗ったこの車、先月買い換えたばかりの新車なのだが、状況的に捨て去るしかない。

俺達家族は慌てて車を降り捨て、海岸沿いの車道を走り始める。ここから少しでも遠のくために選んだのだろう。俺達以外にもサベージに怯えて同じ方向へ逃げ惑う人々が数多くみられる。海岸側も同じ状況で逃げる人々がいたが、元から人は少なかったのであれならすぐに逃げ切れるだろう。

しかし、サベージがそれを見逃すはずもない。視界(?)の隅に映った人々に狙いを定め、銃を彷彿とさせる腕を伸ばして1人を捕らえる。

「うわあああああつ!! は、離せえつ!!」

捕まったのはどうやら男性のようだ。男性の叫びすら碌に聞かず、サベージは男性を口元に持つていき、そして――

「ツ……!!」

俺は慌てて目を逸らした。サベージに捕らわれた男性の声が聞こえなくなった。恐らくは……止そう。あんなの見たらトラウマどころか一種の恐怖症に陥る。俺は逃げ



る事に意識を集中させた。

「こ、こつちにもいるぞおっ!!」

逃げる方向から人の叫びが聞こえてくる。その通りに、進路方向上にもう一体のサベージが姿を現す。どうやら別の地点から上陸してきた個体が道路上に身を乗り出してきたようだ。よく見たら、先ほどの3体よりも一回り巨体で、明らかに別個体である事が解る。

「くそっ! こつちだ!」

「アキラ、行くわよ!」

悪態を付きながら父さんが向かって左方向——無数の建物が建ち並ぶ路地裏へと走り、母さんが俺の手を引いて精一杯走り出す。俺自身も慌てるのだろう、母さんに並ぶくらいの速さで走り出していた。路地裏に入ると、父さんが先導しながら抜け道を探っていた。

「.....っ、止まれ」

100m以上は進んだ路地裏の分かれ道。先頭を往く父さんが静止を促す。左右に分かれた一本道を壁沿いから覗いて抜け道の先を見渡す。

「.....よし、行くぞ」

安全が解つたのだろうか、向かって左側の道を歩き出す。右方向へ行けば、恐らく路地裏に入る直前に遭遇したサベージが見えてくるのだろう。反対に先の海岸沿いに入った3体のサベージとは距離もある。となれば必然的に走ってきた道の逆方向へ戻る様に進めば安全性も僅かにだが高い。

こんな状況でも冷静に分析している父さんは流石としか言いようがなかった。前世の父親では、こうはいかなかっただろう。

……こんな時にこう考えるのは不謹慎なのだが、前世の両親は元気にしているだろうか。月日を重ね、今となつては薄れつつあるこの感情。自分たちよりも先立つたであろう親不孝者に怒り狂っている前世の両親に対して残った、唯一の心残りと後悔。

自力で記憶し続けているだけの俺に何ができないでもないが……それでも、この今生での両親にだけは親孝行は絶対にしたい。いや……してやるんだ。絶対に。だからこんなところでくたばってたまるか！絶対に家族全員で生き延びてやる！

「……っ、待て！」

俺がそんな場違いな決意を固めていると、父さんが急な静止を呼びかける。抜け道の目の前で停止した父さんが顔を外の路上に覗かせる。俺も続き向こう側の様子を疑う。

向こう側にサベージがいた。そうだよな。よく考えたら3体もいるんだよな。分散して行動するのはサベージにはよくある動きと聞く。ソースは父さん。

「分散してきたか・・・何とか見つからないように行きたいものだが」

それは難しいな。サベージには頭部に触覚らしき器官がある。それで空気と振動を  
読んでいるのか、少しでも動いたらすぐに居場所がバレる可能性が高い。勿論父さんも  
それには気付いているはずなので、ここは慎重に慎重を重ねて移動したいものだ。

「・・・！ いや、待て。あれは・・・」

と、そこで父さんが何気なしにサベージの頭上に目を向けた時、何かに気付いたよう  
だ。角度からしてどうやら遥か上空からのようだが。俺と母さんも続いてサベージの  
頭上より高い位置にある方向へ目を向ける。

「あれは・・・人？」

そう、遥か上空に人間らしき影が落下してきているのだ。その数は見た限りでは三  
人。更に目を凝らしてよく見てみると、影よりもさらに高い位置にへりらしき物体が飛  
行をしていた。恐らくはあのへりから飛び降りてきたのだろう。

そして何故、影らしき人物はへりから飛び降りたのか——その謎は、この世で生きと  
し生きる者全てが知る答えなのですぐに解けた。答えは簡単——それは彼らが”  
スレイヤー  
武芸者”と呼ばれる、唯一サベージと戦える存在だからだ。

スレイヤー  
武芸者——彼らは専用のスーツを身に纏い、人が触れる事であらゆる形に姿を変える  
鉱石、《ヴァリアブルストーン》を用いて百武装とも呼ばれる《ハンドレッド》で武装し  
てサベージと戦う唯一の存在。

そしてヴァリアブルストーンが開発されて初めて運用された時期に当たるのが  
《第二次遭遇》。先に供述した”ある兵器”というのがヴァリアブルストーンという事  
だ。

スレイヤー  
この時期を境に武芸者の名が瞬く間に全世界に轟いたと同時に、怪物によつて脅かさ  
れていた地球侵略の危機に希望が見出されたのだった。そんな存在が人類にとつてど  
れほどの光明だったのか、想像には難くない。現に俺が通う中学の中でも、何十人かは  
スレイヤー  
武芸者を志している生徒がいるくらいだ。それくらいに彼らの存在は大きいものだ  
と  
言える。

「んっ！」

と、頭上から降りてくる（恐らくは）スレイヤー  
武芸者であろう人物たちに意識が向いていたせ  
いで、”俺達の存在に気付いたサベージ”が口を開けて中の砲口を向けている——つて  
！

「父さん!!」

「!! アキラ、母さん、逃げろ!!」

俺の呼びかけでサベージがこちらに口を向けている事を知った父さんが叫ぶ。が、時すでに遅しと言うやつで、俺達の目にはサベージが口から黄色に輝くエネルギーの渦が迫っているのが映った。

黄色の渦の奔流が迫る中、俺を庇うように両親が覆い被さる。しかし、それでも微かに空いた隙間から見える渦に目を離せず、俺達は黄色の渦に飲み込まれる――

「――え？」

――筈だった。

放たれた筈のエネルギーの奔流は俺達を吹き飛ばす事もなく、俺達家族の前に現れた”五つの赤い巨大な盾”によって遮られる。

突如として現れた巨大な盾によってエネルギーはあらゆる方向へ弾かれ、俺達に代わって周りの建物が吹き飛ばされていく。

やがて濁流の如く放たれていたエネルギーは収まりだし、放射が終わるとサベージはその口を閉じた。次いで、目の前にあった盾が五つに分散し、素早く頭上に舞い上がっ

ていく。

周りの風景も変わっていて、弾かれたエネルギーが建物を薙ぎ払い、クレーターや大きな穴が俺達の周りに出来上がっている。おまけに本格的にサベージの前に俺達家族の姿が晒されている状態。

このままではサベージに襲われる——そう思った矢先だった。

「お怪我はごさいませんか？」

そんな確認らしき言葉を掛けられ、俺と両親は声のした方へ顔を向ける。そこに居たのは、美女達だった——。

一人は黒を基調としたスーツを纏い、右手にスピアのような黒く長い得物を、左手に上半身を覆い隠せるようなサイズの盾を持ち、腰まで届く髪を後頭部で一纏めに結った褐色肌の美女。

もう一人は紫のスーツを着用し、右腕に巨大なガントレットのような防具を備えた、栗色のセミロングで赤い縁の眼鏡をかけた知的な印象を与える女性。こちらも褐色肌の人物と負けないくらいに美女だ。

そんな人目を引くような彼女らよりも一際輝く存在が、目の前にゆつくりと降り立つ

た。

長い金髪を両サイドにツーテイルで纏め、赤いスーツを着用した女性。その表情は凛としていて、何処か厳しくもツンとした印象が見受けられる。その女性の周りには、先ほどサベージの砲撃を防いでくれた赤い盾が浮遊している。どうやらあの盾が彼女の得物らしい。

「その様子から鑑みるに、どうやら無事であることは確かなようですね」

こちらに向いた金髪の美女が微笑を浮かべながらそう言う。俺はそんな彼女に見惚れていた。両親は何が起きたのか理解が追いついていないのか、呆気に取られている様子だ。

・・・というか、俺はやつと気が付いた。その美女達がどういった存在かを。具体的には生前からの知識で。

「まあ怪我が無くて何よりですわ。そしてご安心を。ここからは私たちにお任せを」  
”彼女”がサベージに向き直る。次いで傍の2人もサベージに振り返る。

「私、”クレア・ハーヴェイ”とリトルガーデンが誇る選抜隊セレクトシヨンスが、サベージを完膚なきまでに葬ってくれますわ」

原作ヒロインの一人、“クレア・ハーヴェイ”と、スレイヤー武芸者育成機関であるリトルガー  
デンの生徒会副会長である“リディ・スタインバーグ”と“エリカ・キャンドル”。  
リトルガーデン最精鋭の三人が、眼前のサベージと相對した。



# タフタフ☆サベージ

「それでは……行きますわよ」

クレア・ハーヴェイ——リトルガーデン艦長にして生徒会所属の生徒会長であり、  
セレクションズ  
 選抜隊のリーダー格を兼任する美女。

スレイヤー  
 武芸者の中でもトップクラスの實力と指揮能力を持ち、世界中にその名を轟かす『ワ  
 ルスラーン社』の社長令嬢でもある彼女が、今日の前に立っている。

そして俺にとっては転生してからも未だに記憶に深く根付いている存在。そんな彼  
 女が、俺達家族を襲わんとしたサベージに対して敵意を向けながらそう呟いた。

それは向こうも同じことで、砲撃を防がれたサベージは明確な敵意を持ってして、そ  
 の腕の鉄を振り上げる。

「——《アリステリオン気高き戦姫》!!」

彼女の言葉に反応するように、クレアのハンドレッドである周りの浮遊砲台——  
 《アリステリオン気高き戦姫》の内の三基が前に躍り出る。

三基の浮遊砲台は後部同士で接続して壁となり、サベージの剣を防ぐ。それだけにとどまらず、残った二基の浮遊砲台が眼前のサベージに向かって先端の砲口から緑色の光線——武芸者は自らの体内に循環する生命エネルギーを「センスエナジー」、通称エナジーと呼び、それを戦闘に用いる——それを放射する。

その巨体故に回避行動が取り辛いサベージは光線の直撃を食らい、たたらを踏みながらもその場にとどまった。その上、直撃を受けたのに皮膚の表面に煤が付いた程度で大きなダメージを与えられた様子がない。

「あら。他の個体と比べて堅いのですわね。でしたら、これはどうかしら？」

その言葉と同時に、壁となっていた三基の浮遊砲台も戦列に参加。全ての砲台が攻撃態勢に入る。しかも、その攻撃は先ほどのように光線を放射するのではなく、弾丸状に形成した光弾を連続で発射し始めるといふものだ。さながらビームガトリングガンである。あとユニーンガン○ムのシールドファ○ネルを思い出した。まさかIフィールドとか付いてないよなアレ。つうかあんな使い方があったのか。原作にはなかったよな。

先ほどの直撃を受けてなお踏みとどまったばかりでなく、今度は連続掃射による攻撃を受け始めたサベージは身を丸くして絶え凌いでいる。どうやら反撃の糸口すら見せないようだ。

すると五基の内、二基が掃射を停止してエナジーを収束し始める。僅か数秒でチャージを終えた一際大きなエナジーの弾丸が2発同時に発射され、その場に釘づけにされたサベージに襲い掛かる。

瞬間的に圧縮されたエナジーの塊がサベージの皮膚に触れると大きな爆発を起こし、その衝撃に耐えきれずにサベージは後方に吹き飛ばされる。

「すっげ・・・」

俺は思わずそう呟いた。実際の戦闘——いや、確か抗戦だったか。その光景を前にして素直にそう思った。

「あれが、クレア・ハーヴェイか・・・」

「噂には聞いていたけど、まさかここまでなんて」

父さんと母さんが落ち着きを取り戻したのか、感心するように静かに呟いた。・・・どうでもいいけど、俺はいつまで両親に覆い被されているんだろうか。いやほんと、両側から挟まれてちよつと息苦しい。はたから見たら完全に変な一族にしか見えないなこれ。

「そちらの方々。動けるようなら今すぐに移動しなさい。ここからは戦闘が激化する恐れがあります。今のうちに避難所まで退避を」

敵を吹き飛ばして尚も射撃を続けるクレア・ハーヴェイが背後にいる俺達に言う。それもそうだ。助けられたからか、無意識に安心しきっていたようだ。今のうちに移動しないと。

「エリカ。彼らの護衛を任せますわ」

「了解しました」

赤い縁の眼鏡を掛けた女性、エリカ・キャンドルが俺達の傍に駆け寄り、声をかけてくる。

「立てますか？」

「あ、ああ。すまない。助かった」

「いえ、これも私たち武芸者スレイヤーの仕事の内ですから。近くにリベリア軍の部隊が待機しています。とりあえずはそちらまで護衛します」

「わかりました、ありがとうございます」

「あ・・・ありがとうございます」

退去を促されながら両親がそれぞれに礼を言う。俺も戸惑いながら言うと、彼女に先導されながら移動を始めた。

## ★☆☆☆☆

「——どうやら彼らは離脱できたようですね」

サベージと相対してから数分。クレア・ハーヴェイら選抜隊セレクトションズが救助したアキラ達家族が自分たちから離れた事を確認するように呟く。その呟きに答える者がいた。もう一人の生徒会、リディ・スタインバーグである。

「そのようです。他にも3体の個体がいるようですが、そちらはリベリア軍所属の部隊が対処しているようですね。こちらにも直ぐにでも」

「ええ。終わらせましょう」

その言葉と同時に、クレアが操作する浮遊砲台がそれぞれの砲口から、先の光線よりも一際極太の光線を照射する。計五基の砲台から照射された光線はサベージの左右の足と右腕を打ち抜き、表面にある模様よりも一際光り輝く頭部が砕け散り、黄色の体液が漏れる。

サベージはかろうじて五つの内一つの光線を左腕で防ぐも、完全に受け流す事は出来ずに表面の皮膚だけが砕かれ、黄色い体液を辺りにまき散らす。

そして頭部から露出する形になったサベージの急所——所謂心臓部に値する”核”コア

が、黄色の輝きを帯びながらその外観を露わにする。

「行きますわよ、リディ！」

「了解！」

クレアからの呼びかけと同時にリディが駆ける。左手の盾を投げ捨て、右手に持つドリル状のスパア——《漆黒の天槍》ミッドガルドンコラシダを前に突きだした。

リディの身長分もあるほどの長いスパアに、紫色の輝きが宿る。それに伴い、爆発的なエネルギーが槍全体から溢れ出す。

「——貫く！」

リベリア軍の武芸者部隊スレイヤーがいるとはいえ、他の個体にも対処しなければならない為、クレアとの連携によって一分でも早く目の前のサページを屠らなければならない。ならば、この一撃で終わらせる。

リディは呟き、スパアの矛先を定める。目標はサページの核コア。他の部位はほぼ死に体。余計なことは考えず、核を破壊する事だけに集中する。

「っ!!」

右腕両足をもがれて身動きの取れないサページの核コアに意識を集中させ、スパアを前に突きだしたままの体勢で地を駆け出すリディ。

そのリディに気が付いたのか、サページは残る左腕の鋏を獲物を引き裂かんとばかり

に振り上げる。しかし、それを妨害する者がいた。

「させませんわ!」

クレア・ハーヴェイである。彼女は浮遊砲台二基を量子変換し、一丁のライフルへと再構成する。右手に握ったグリップから長銃身が形成され、中央には細長いバレルが延びている。

そんな長大なライフルをすぐにサベージの左腕に狙いを定め、間も置かず一射を放つ。エナジーには指向性を持たせることで貫通力を高める事も出来る。一定の方向へ螺旋状に飛ぶ一射は見事にサベージの左腕——人間でいうところの二の腕を貫通、分断せしめた。

——グオオオオオツ!!

砲撃以外の攻撃手段を断たれたサベージは叫びながらも口を大きく開く。その中央には筒状の発射口があり、今すぐにも放たんとばかりに眼前の敵対者達に抗う姿勢を見せるが、時すでに遅し。既に近くまで迫っていたリデイが地を蹴り出してサベージの頭頂部——核<sup>コア</sup>に向けて跳躍していた。

「はああああつ!!」

核<sup>コア</sup>の真上へと一瞬にして跳躍したりデイが雄叫びを上げながら、落下しながらスピアを突き出した。

ドリル状のスピアが回転し、唸りを上げる。エナジーを帯びながら突き出された突貫がサページの核コアに触れた。

回転が増し、更に唸りを上げ続けるスピアが徐々に核コアに亀裂を入れ始める。ピキリ、と音を立て、リデイはスピアの勢いをさらに加速させる。

サページは自らの核コアに亀裂を入れられた程度では直ぐには死なない。粉々に砕けるまで破壊しなければ、撃破する事は出来ないのだ。そのために、リデイは《漆黒の天槍ミッドガルドンユランゲ》の威力を高めている。

核コアに亀裂が入っているならば後はこちらのもの——あと一歩で核コアを破壊できる。そう確信し、リデイは更にスピアの先端を核コアに押し込んだ。

「これでえっ……終わりだあああっ!!」

宣言し、リデイが叫ぶ。刹那、亀裂がサページの核全体に入り、スピアの先端が核コアの向こう側へと貫き通した。

心臓部を破壊されたサページの全身から発していた黄色の模様は輝きを失い、それに伴い静かに沈黙。叫び声すら上げられずに絶命した。

「ハア……ハア……クレア様」

「ええ。まずは一体目、ですわね」

軽い息切れを覚えながらもリデイがクレアに向き直る。その意図を察してか、すぐに



答えたクレアは海岸側へと顔を向けた。

「リデイ、まだ戦えますか？」

「はい・・・問題ありません。行けます」

リデイの返答をきっかけに、クレアは浮遊砲台を使って自らも宙に浮かび上がり、他の個体がいるであろう地点に向けて飛翔する。その後を追いかけるように、地上でリデイは自ら投げ捨てた盾を拾いながら走って追いかける。

★★☆☆☆

「こつちです」

俺達が先ほどの現場を離れて数分走った地点の曲道、先導するエリカ・キャンドルが道を示してくれる。

恐らく避難所までは結構距離が離れている。しかしなぜ彼女は地図もないのに避難所までの道がわかるのか。原作知識からだけど、彼女の掛けた眼鏡のレンズがデータリンクするモニタになっていた筈。それで避難所までの道を検索しているんだろう。

ぶつちやけあんな真正面にモニタがあつて目が疲れないのかと思わなくもない。

「アキラ。まだ走れるか？」

父が心配する言葉を掛けてくる。俺の手を引いて少し前を走る母さんも同じような表情を浮かべている。

普段の厳格な父ならそんな言葉を掛けてくる事は滅多にない。これは本心で心配してくれているんだな。ならそんな父を安心させるため、俺はあえてこう言わせてもらおう。

「はい、アキラは大丈夫です！（榛名感）」

「二．．．．．三」

俺がそう言うと、三人は揃つて奇怪な物を見る目で俺を見てくる。とても避難中のやりとりとは言えませんねえ。

「なんなのですか？ その子。避難中に言うような事には聞こえなかつたのですが」

「すまない。変なのは物心ついた時からだから問題ない」

「そうね。時折変な事を突拍子もなく言う子だから。でもいつものアキラだから逆に安心だわ」

（良いのですか、そんな扱いで？）

「ところでエリク．．お姉さん、その眼鏡なんか光ってますけど大丈夫？ 目痛くなら

ない？」

「本当に突拍子もないですね！ この眼鏡はモニタになってるので光ってるように見えるのは当然です！ あとレンズがブルーライトカットになってるので目の負担は抑えられてます！」

知 っ て る 。 あ、でもブルカ（ブルーライトカットの略）は知らなかった。なるほど。

「そろそろリベリア軍が展開した武芸者部隊と合流できる地点ですが……！ 止まってください」

そこで初めて俺達は市街地内に入っている事に気が付く。和風な雰囲気があるヤマトには無いような建物が多数建ち並び、煉瓦造りの建物が多く見受けられる。大通りには大量の車が乗り捨てられ、どこかの店のチラシや破れかけた新聞紙が辺りに散っている。

人の通りは一切なく、まるで元から人はいなかったような錯覚を覚えながらも、エリカ……ここからはさん付で呼ぶか。彼女は”ある一点”に注視する。

そこには、一体のサベージと抗戦している一人の男性武芸者と、その周りを囲むように立つ三人の女性武芸者達の姿があった。

エリカさんが注視している中、父さんが覗き見るように彼らの様子を伺っていた。

「あれは・・・他の個体よりも一回り大きいな。最初の三体とは別個体か」

「ええ、恐らく」

父さんが冷静に言つて、エリカさんが短く返す。するとエリカさんは訝し気に父さんを見ながら訊ねる。

「ところで、あなたはなぜそんなに冷静なんですか？ 普通一般人がサページを見たら

パニックに陥るものなんですが」

「ああ、そういえば自己紹介が遅れたな。私と女房は”ワルスラーン社の技術部副部長を務めている者”だ」

「はあ、そうですk・・・つて、ええっ!？」

そうです。俺の両親はまさかのワルスラーン社で割と高めの地位の職業に就いています。技術者と言う職のおかげで金に困る事はほとんどありません（ゲス顔）。俺も聞くまで知らなかった。因みに知ったのは俺が8歳の時。原作知識があつても驚いたのは良い思い出。だつて今生での両親が原作に絡むかもしれない可能性が微レ存だもの。期待が膨らむー♪

そんな俺の記憶とはさておき。父の驚愕の一言でエリカさんが素つ頓狂な声を上げる。まあそれは当然の反応だな。エリカさん達からしたらリトルガーデンってワルスラーンがあつてこそ建造できたものだから。

「ちなみにリトルガーデンの設計にも一枚囁ませてもらった者でもある」

「あの頃は楽しかったわー♪」

「えええええっ!?!」

ちよつと待つて、それ初耳なんですけど?! エリカさんと俺が揃つて驚きの表情を浮かべた。俺はそんな爆弾発言を投下した父さんに詰め寄つて問い質す。

「父さん母さん待つてそんな話聞いてないんですけど!?!」

「なんだ、聞いてなかったのか。その事は話したと思つていたんだが」

「ほら、随分前に私たちが数か月くらい帰つてこなかった時期があつたでしょう? あ  
の頃からリトルガーデンの建設に携わつていたのよ」

避難中という状況下を忘れ、両親が揃つてマイペースにそう補足してくる。数か  
月………あ、そういうえば、何かの組み立てで忙しいと2人が言つて、帰つてくる  
のは随分後になるとか、そんな話をしていたような。心当たりめっちゃあるじゃん俺!  
何でそういう大事などころに出くわさなかつたんだ俺は!?! もしかしたら原作キヤ  
ラと絡む機会があつたかもしれないじゃん! 馬鹿なのこのままサベージに向かつて  
生身で呐喊してこようか俺!?

「えと、その…し、知らかったとはいえ、これまでのご無礼を、お、お許しください…？」

ホラアツ！ エリカさんも申し訳なさそうに頭下げてんじやん！ このまま菓子折り渡してきそうな勢いだよ持つてないけど！

「なに、こんな状況だ。保護した家族の素性を知らないのも無理はない。それとそこまでする必要もない。君はいつも通りの姿勢で職務に励んでくれ。その姿を見るだけで私たちも安心する」

「そうねー。あ、でも無理はしないでね。力んで前に出過ぎちやうと逆に心配になっちゃうから。主に私が」

「えー…えと、はい。善処します…」

冷静さを通り越してマイペースな両親がエリカさんを優しく諭した。

なにこの傍から見たら親子のようなやり取りは。緊張感っていうものが全くないんだけど。さっきまでの緊張感はどこ行った。家出か？ 緊張感が出したのか？ というか事態に追いついていないせいで俺が完全に蚊帳の外なんすけど。つうかもっと状況見ろや（怒）。サページが近い距離にいらだぞ。向こうで武芸者スレイヤの方々が奮戦してるんだぞ何でこんな隅っこではのぼのとした空間を形成しとるんですか緊張感帰ってきやがれいい加減。

「とりあえずそこら辺の話は後回しにして。今はここをどう切り抜けるかだよ」

「あ！　そ、そうですね！　まずはあそこのサベージをどう避けて行きましょうか!？」

俺の一言で我に帰ったエリカさんが早口で捲し立てる。キョドってるのが目に見えて可笑しい。この人ここまで動揺するような人だったっけ？

「まずは向こうの一人と連絡を試みます。あなた方はこの場で待機しててください」

父さんに言っつて、エリカさんは物陰から飛び出して近くに乗り捨てられた車の影に隠れる。すると彼女はしゃがみこんでヴァリアブルスーツの手首に位置する小型の端末を数度叩き、口元に寄せる。

「通信機能か。恐らくあそこでサベージと抗戦している武芸者スレイヤーと通信を凶っているんだろう」

父さんが俺に解るように説明してくる。悪いけど父さん。それは見ただけで解っちゃったから補足は必要ないです、とは口が裂けても言えない。

★★★☆☆

「——こちら、リトルガーデン所属、エリカ・キャンドルです。そちらの部隊の方、応答願います」

アキラ達から少し離れた位置に移動したエリカが通信機を介して、背にした車の向こう側でサページと戦う武芸者スレイヤーに呼びかける。

サページと抗戦している中で、その呼びかけに答える者がいた。敵と最も近くで戦っている大柄な体躯の男性武芸者スレイヤーが通信に答える。

『あー、こちらはベルグリット・レオンハルト。現場の指揮を任されている者だ。今は忙しいんから後にくれなかつ、と!!』

ベルグリットと名乗った男性の持つハンドレッドの斧がサページの鉄と打ち合い、弾き返す。その張り上げた声で彼がどの位置にいるのかを把握したエリカは車の窓越しに向こう側の様子を探りながら答える。

「お忙しい中申し訳ありません。ですが、私は現在逃げ遅れた一般人の護衛に回っております。偶々あなたの方の近くまで移動してきたもので・・・」

『なるほど。下手に動けばこいつがその一般人に目を向けるかもしれない、て事か』

早々に察したのかベルグリットの張り詰めたような声に、エリカは「お察しの通りです」と返す。

「今はまだそのサページに見つかっていないようなので、何とかそちらに意識を集中



させるか、可能であれば離れた地点への誘導を願いたいのです」

『そりや難しいな。アンタがどこから見てるかは知らんが、見ての通りこいつは他の個体よりもデカい。そのせいかわパワーも通常のものよりかは強い。気を抜けば一瞬で逝くことになる。そんな奴を遠くへ誘き寄せるつてのは、まだ”ひよっこ”のこいつらには荷が重すぎる』

「ひよっこ？ 一緒に戦っている武芸者スレイヤーはまだ実戦経験が無い、という事ですか？」

通信で答えてくるベルグリットの一言に気付き、確認の言葉を掛けるエリカに返ってきた返事は「ああ」の一言だった。

よく見れば前衛で戦っているのはベルグリットだけで、他の三人は立ったまま微動だにしていない——さらに目を凝らして見てみれば武装を展開しているが、その三人は強張った表情を浮かべたままガチガチと体を震わせてサベージを凝視しているではないか。あの様子から鑑みるに・・・恐らくは、サベージを前にした時の恐怖心に苛まれているのだろう。あれでは動くどころか思考する事すら放棄していると見ていい。エリカとベルグリットの通信に気が付かないのもそのせいか。

しかし、恐怖心からくるのか、彼らはベルグリットからやや離れた位置に立っていた。サベージの攻撃圏外にいるおかげか、彼らは未だに傷一つ付いていないようだった。

棒立ちの三人の武芸者スレイヤーの様子を見て見当を付けたエリカに、ベルグリットは自らの斧

で次々と繰り出されるサページの鉄の殴打を受け流しつつ言葉を紡ぐ。

『俺はワルスラーン社所属の武芸者だ。<sup>スレイヤー</sup>つい先日こちらに教官として派遣されてきたばかりで、肝心の教導する部隊には実戦経験がないと来た。そんな連中をしごいている日々を送っていると今の状況になった、て訳だ』

「なるほど、ワルスラーン社の方でしたか。・・・待ってください。そんな部隊がどうして出動なさっているのですか？　・・・まさかとは思いますが、彼らの上司からの命令で、ではないですよ？」

『・・・そうだ』

エリカの予想の言葉に肯定するのは他でもないベルグリットだ。彼の重苦しい声色を察して、「無茶苦茶な上司ですね」とエリカがそう零す。

『『実戦経験がないなら実戦で埋めればいい』なんて言われてな。俺は反対したんだが、無理矢理押し通されてしまった。だからこうして俺が一人で奮戦してるって訳だよ、つと！』

サページの鉄を掻い潜りながらすり抜けざまに、敵の脚に強烈な一撃を見舞うベルグリット。その衝撃でサページは横倒しになり、体勢を立て直そうとジタバタし始めた。あの状態なら、少しの間は余裕を保てるだろう。

通信しながらも余裕で抗戦を続けているのはひとえに彼がベテランだからだろう。

見た限りでは彼に疲労の様子は無い。自らの体力とスタミナを考えながら立ち回っている事を鑑みて、確実に彼が経験豊富ということの頭れだ。そんな彼の様子にエリカは感心の表情を浮かべる。

『さて。そんなわけで、そちらはどうにかしてこの場から離脱してくれ。できればサベージさいじに見つかからないように、な』

「……………」

エリカは言い淀む。できれば元来た道を迂回して避難した方がいいのだろうが、先ほどの地点まで戻ると他の個体に遭遇する可能性が非常に高い。

仮にクレアとリデイがまだ抗戦していたとしても、そちらに戻れば二人に防衛してもらいながら抗戦を続ける負担を負わせるだけになってしまう。かと言ってベルグリット達の傍を通るわけにもいかない——ならば、道は自ずと一つしかない。

ほかの道に迂回せず、且つ誰にも負担を掛けない手段——エリカ自身が、ベルグリットの援護に回るしか道はない。

「……………でしたら、私が一時的にあなたの援護に回ります」

『何？ そちらには民間人がいるんだろう！ まずはそちらを最優先に避難させるべきだ！』

エリカの突然の提案にはベテランであるベルグリットも度肝を抜かれたのか、取り乱

さないうように平静を装いつつも通信機の向こうにいる相手に否定の意を示す。当然だ。なぜならその提案は民間人を放置する事を意味しているからだ。

「そんな提案は受け入れられない」とベルグリットが言い出す前にエリカが続げざまに言葉を紡いでいく。

『一時的に』と言った筈です。私が一瞬だけサページの身動きを奪います。あなたはその隙を突いてサページの核を破壊してください。出来れば一撃でサページのシエルターを核ごと”破砕”できる威力で仕留めていただければ、と」

『マジかよ……。確かに”クラッシャー型”である俺ならシエルターごと奴の息の根を止める事も不可能じゃねえが……。それでも奴の身動きを封じるなんてことは』

「出来ます。何故なら私のハンドレッドは”アルセーヌ型”ですから」

ハンドレッドは”百武装”という意味を持つ。その由来は、ヴァリアブルストーンが所持者の意思に呼応して無数の型に姿を変えるからであり、その型は百種類以上にも及ぶことから『ハンドレッド』と名付けられた。

ベルグリットの持つハンドレッドは、斧や鉄球等の一撃の威力に優れた”クラッシャー”。

エリカのハンドレッドは敵の動きを封じ込め、エナジーに反応して伸縮したりダメー

ジを与えられる、味方の支援に優れた”アルセーヌ”。

この様に多種多様な特徴に秀でた型と武芸者スレイヤの組み合わせによって《第二次遭遇》セカンド・アタック以降、人類はサベージを効率的に討伐できるようになったのである。

エリカからの自信のある答えに合点がいったのか、ベルグリットは笑みを零しながら「なるほど」と呟く。

『しかし、民間人の方はどうする？ いくら一瞬とはいえ、目を離すのは』

「その点ですが、おそらくは大丈夫かと思えます。私が護衛する彼らはワルスラーンとも繋がりのある人物なので、後ほど説明すればご理解いただけるかと」

そう言つて先ほどアキラ達を置いてきた方向へ顔を向ける。すると、顔を覗かせたアキラの父がこちらの様子を悟つたのか親指を突き立てた。所謂『GOサイン』というやつだ。

そんな彼の意図を汲み取つて、エリカは了承を得た肝を伝える。

「OKのようです」

『それなら早速・・・と、奴さんのご起床だ』

通信機から流れる言葉に、エリカは車から顔を覗かせ向こう側を覗き込む。

そこには、ベルグリットの方へ顔を向けながら無数にある両足でやつと地に足をつけ

始めたサベージが起き上がろうとしていた。

「早速仕掛けますー！」

『はっ!?!』

突然すぎて素つ頓狂な声を上げるベルグリットを余所に、ゆつくりと起き上がろうとするサベージの死角からエリカは勢いよく飛び出す。

エリカの狙いはサベージが起き上がる寸前。自らの脚で立ち上がろうとしているサベージの後ろ足を引っ張ってもう一度転倒させるのが狙いだ。後ろにはアキラ達民間人がいる為、すぐにでも処理しなければならない。敵の意表を突くには今しかない。

彼女の右手のガントレット——”アルセーヌ型”である《絶対運命の鎖》エッシャーラステイングから先端にフックを取り付けたエナジীর鎖が伸び始める。エナジীরよって伸ばした鎖がサベージの後ろ足に括りつけられ、それを力の限り引っ張り出す。

「倒れなさいっ！」

狙い通り、エリカの放ったエナジীর鎖はサベージの後ろ足をがっちり掴んだ状態で後方に引っ張られ、その拍子にサベージは前のめりになって再び転倒した。

意識がベルグリットに集中していたせいもあってか、サベージは成す術もなく倒れ込む。そんなチャンスを見逃さないベルグリットではなかった。

「これで終わり、だああああっ!!」

ベルグリットの口から放たれる、生の叫び声——サベージの間近で、渾身の叫びと共に振り下ろされたクラツシャ—型の斧は頭部のシエルター—核コアを保護する膜——を容易に破壊せしめ、そのまま核コアに叩き付けられた。

勢いよく振り下ろされた一撃はシエルターを破壊するにとどまらず、核コアに亀裂を入れ、それが一瞬のうちにして全体に広がり心臓部としての全機能を奪い去るに至る。そして、サベージの全身から発する黄色の模様が失せ、敵は静かに沈黙した。

「……ふうふううっ」

斧を振り下ろしたベルグリットは深く吸い込んだ息を吐き出す。深く食い込んだ斧コアを核から引き抜き、黄色の体液を地面に振り払いつつ肩に担いだ。

「……これで、仕留めたんだよな？」

「ええ。見事な一撃でした」

不安そうに呟くベルグリットの元へエリカが近づきながら答える。対面するように向き合った二人はそれぞれの得物を下ろしながら敬礼をする。

「改めまして。リトルガーデンから出動しました、エリカ・キャンドルです。抗戦中にも拘わらず、通信した事と合図も無しに戦列に加わった事を謝罪します」

「ベルグリット・レオンハルト。ワルスラーン社所属の武芸者スレイヤーだ。通信に関してだが問題ない。そのくらいはそつなくこなせる技量はあると自負してるしな。むしろ、味方が

縮こまって動けない状況で支援してくれたことには感謝しているくらいだ」

温厚な笑みを浮かべて答えるベルグリットに、エリカは「ありがとうございます」と礼を述べた。

エリカは建物の陰に隠れた家族に手を振り、避難を再開する合図を送る。

★★★☆☆

エリカさんが離れてしばらくはその様子をうかがっていた。と言ってもそれを殆どしていたのは父さんで、俺は影からチラチラと向こうの様子を見る事くらいしかできなかったが。

「どうやら終わったみたいだな」

激しい振動と鋼を叩くような甲高い音を聞いていたのは先ほどまでの話で、今はそれらは全て止み、暫く静寂を保っていた時だ。向こうの様子を見ていた父さんが見計らったかのように「移動するぞ」と言い始めた。

既に抗戦は終わっているらしく、向こうでエリカさんが手を振っている。こちらへ来いと言っているように思え、俺達はそれに従って建物の影から彼女らの元まで歩き出した。



俺達が傍まで歩み寄ると、エリカさんは唐突に申し訳なさそうな表情を浮かべながら頭を下げた。

「お待たせしてすみませんでした。それと、申し訳ありません。待つてろと言った挙句、放置するようなことまでして」

「いや、君があのような行動に出たのは直ぐに理解できた。先の道を逆走するのは危険なうえ、君の仲間に負担を強いる事になってしまう。かと言って此処まで道は一直線だった。他の道はない為、ここであのサベージを倒した方が良いと判断したのだろう。懸命だ」

父さんの半ば推測のような考えは的を射ていたらしく、エリカさんと男性武芸者は揃って驚きの表情を浮かべている。どうやら凶星だったようだ。・・・ん？

「ご理解、ありがとうございます。あ、こちらの片は・・・」

「私はベルグリット・レオンハルトです。所属はワルスラーン社で、現在はリベリア軍の武芸者部隊で教官を任されています。どうぞお見知りおきを」

「私は・・・と、アキラ！ どこへ行くー！」

父さんが自己紹介している中、俺は黙ってその場を離れた。先ほど倒されたサベージの軀に、武芸者の女性が近づいたからだ。

俺も興味本位で近くまで寄ろうとした——その時だ。女性武芸者は、倒れたサベージ

の右腕の鍔を右足で思い切り踏みつけ始めたのだ。まるで『行き場のない怒りを発散させる』ように、それを思い切り踏みつけ続ける。

「クソツッ！ クソツッ!!」

女性の悪態が足蹴と共に放たれていく。そんな時だ。彼女に対して怒声を放つ人物がいた。

「おい！ 何をやっている！」

父さんと先ほどまで話していた男性スレイヤー武芸者だ。彼が自分の獲物である斧型のハンドレッドを担いで女性の元へ近づこうとした。

俺とすれ違った直後に気付く。この人は『原作キャラ』だという事に。

（あー・・・すっかり忘れてた。あの人は確か原作6巻に出てたベテランの）

うっすらとなりつつある原作知識を辛うじて引き出しつつ、俺は不意に軀となったサページに目を向ける。

そこで気付いた。サページの触覚器官がピクリ、とわずかに動いたことに。

「ツ!! サベージから離れる! そいつ、”まだ生きてる!!”」

俺の叫び声にいち早く反応を示したのはベルグリットさんだ。ほんの少し動揺するも直ぐに持ち直し、一番近くにいた女性武芸者スレイヤに向かつて駆けだした。

更に女性武芸者スレイヤが俺の言葉に気付いてサベージを見ようとした直前、ベルグリットさんがタツクルするように女性を突き飛ばした。

そんなベルグリットさんも自分ごと倒れ込む——直後、女性が立っていた場所に息を吹き返したサベージの右腕が縦に振るわれた。ベルグリットさんもギリで躲し切れたが、黄色の体液を滴らせ続けるサベージは地面を扶った右腕の鋏の先端を地面に突き立て再び立ち上がろうとしていた。案外タフだなあのサベージ。

「クソッ! 仕留め損なつてたか。坊主! そこから離れる!」

ベルグリットさんが俺に叫ぶも、その前に俺は動けずにいた。突然の事で脳の処理が追いついていなかったのか、それとも”俺の存在に気付いた”サベージが俺の方へ向き直り、ぎろりとした眼球が俺の姿を完全に捉えたせいか。

改めてサベージを眼前にした俺の心身を恐怖心が支配し始める。足が震えて動けない。その場から動く事すら出来ずに俺はサベージと正面から見据える。

交差する視線。全身から黄色の模様が点滅するサベージの眼球が俺を凝視している。

俺もまた同様にだ。互いに凝視し続けている中、サページは空いた左腕の袂が、俺を掴まんと伸ばし始めた。

覚醒パートは一話の終わりになることが多い。

サベージの左腕の鋏——それが俺に迫る中、目の前に重なる影があった。

「させませんっ!!」

エリカさんだ。右腕のガントレットを盾の様に構え、眼前に不可視の壁——自らのエナジーを壁のように展開する”エナジーバリア（以下「Eバリア」）を作り出し、俺を掴まんとしていたサベージの鋏を抑え込む。

「ッ！・・・いい、行つてください！」

「あ・・・は、はい！」

サベージを抑え込むエリカさんに言われ、俺はやつと体を動かす事ができた。とつきの事でとにかく後ろに数歩下がりが、すぐに踵を返した。

体感で随分と離れてから後ろを振り返ると、サベージはEバリアを展開した状態のエリカさんを持ち上げていた。鋏で挟まれているのもあつてか、宙に持ち上げられたエリカさんが展開するEバリアの表面は目視で確認できる程に揺れ動き、パリパリと電流の

ような音を迸らせていた。

「エリカ……お姉さん！」

思わず名前を呼びそうになるのを堪えながら呼びかける。しかし、エリカさんは気にするなとばかりに声を張り上げる。

「そのまま離れて！ このままでは、あなた達にまで危害が及んでしまいます！ ツ……  
そうなる前に！」

普通の人ならここで逃げるか迷うのだろうが、俺は言われた通りに従い、更に後方に下がる事にした。

「ぐうっ……！」

エリカさんの苦悶の声。無意識の内にか、俺の聴覚が自然とそれを聞き取る。

同時に、本能の赴くまま暴れるサベージの叫び声が辺りに響き渡る。直後、背後から何かを叩きつけたような、凄まじい音が鳴り響いた。

「があっ!!」

その悲鳴にも似た声によって、俺の意識と視線は再び背後へと振り返らせた。

そこに居たのは、地面に倒れ伏すエリカさんだった。先ほどまでサベージに掴まれていたのに、苦しそうにうめき声を漏らす彼女が何故地面に倒れ伏しているのか。

しかし、その謎も直ぐに解けた。今しがた聞いた物音と悲鳴は、サベージがエリカさ

んを地面に叩き付けた衝撃のものだった。

着用するヴァリアブルスーツは小さな円を形作りながら擦り切れ、彼女の柔肌に軽い出血を伴う傷跡が生まれているのが遠目から見てもわかる。

やだ、ちよつとエツチイ・・・なんて思つてる場合でなくて。

「お姉さん！ 大丈夫?!」

「ぐっ！ は、早く・・・逃げ・・・」

俺の心配する声に、エリカさんは尚も俺に避難を促そうとする。が、彼女の頭上に影が差した。サベージが再び腕を上には振り上げたのだ。

「っ・・・!!」

エリカさんの息を？む様子が遠目からでもよくわかる。あれは危ない。あのままでサベージに殺されてしまう。その現状を目の前にした俺は走っていた。

「アキラ！ とまれ!!」

「戻つてきて、アキラ!!」

両親の呼ぶ声がある。しかし、俺はそんな声を無視して一直線に進む。向かう先は当然エリカさんの下へ。ここから走ればまだ間に合うかもしれない。殆ど死に体のサベージが腕を完全に振り下ろす前に、エリカさんを助け出す！

せつかく原作キャラと出会えたのに、ここで退場させるわけにはいかない。つうかそ

れ以前に原作崩壊なんかさせて堪るか!! まだ本編すら始まってねえんだぞ（メタア）  
ふざけんな!

何より俺がさっさと離れなかったのが原因なのだ。目の前に佇む死の恐怖に怯えて、一瞬でも硬直した数分前の自分自身をぶん殴りたい衝動に駆られつつも、俺は急いでエリカさんの下へ駆け寄る——しかし、そこはやはり距離的な問題で彼女と一番近い所にいるサベージのほうに分がある。

サベージはボロボロになりつつも振り上げた腕を直下に下ろした。重力に則った鍔がエリカさんを貫かんと迫る——が。

「させるかあっ!!!」

サベージの腕とエリカさんの間に割って入ったのは、先に女性武芸者スレイヤーを突き飛ばしたベルグリットさんだった。彼が自らの斧状ハンドレッドを振るい、振り下ろされたサベージの鍔を打ち返す。打ち返された衝撃によって、サベージの左腕は粉々に粉砕。直接的な攻撃手段を奪われたサベージはその痛みに耐えかねたのか、悲痛な叫び声を上げ始める。

「坊主! 動けるか!? 今のうちにその嬢ちゃんを連れてけ!」



「わ、わかりました！」

ベルグリットさんの言葉で俺は再び動き出す。現状、俺に出来ることはそれくらいだ。ならばさっさと連れてその場を離れるとしようしようしよう。

「立て、ますか？」

「くっ……なんとかか。……何故、さっきは逃げなかつたんですか？」

助け起こしながら投げかけられたその質問に息が詰まる。

「えと……まだ、間に合うかなー、と思つて……」

「……それで、私を助けようと、したのでですか？」

呆れた顔を浮かべたエリカさんの言葉に、首を縦に振る俺。すると彼女は途端に「はあ……」とため息をついた。ですよね。薄々そんな反応されると思つてた。

「あの距離で「助けられる」と思うなんて、あなたは馬鹿なのですか？……いえ、ご両親の対応からして薄々そんな感じはしてましたが」

なんと。俺達家族のやり取りだけでそこまで把握したとは、やりますねえ。理解されたよ！ やつたねアキラ！ 全然嬉しくないけどな。

そんな事よりもさっさとここを離れないと。今後ろでベルグリットさんがサベージを引き付けてくれている間にできるだけ離れた位置に移動する。勿論エリカさんに肩を貸しながら、だ。

体感で二十歩ほど離れたところで、俺は顔を後ろに振り向かせる。

そこには満身創痍のサベージに斧を振るうベルグリットさんがいた。彼が振るった斧がサベージの頭部を往復ビンタのように左右から叩き付け、一撃毎に飛び散るサベージの体液が地面に広がっていく。

正直に言ってドン引くレベルであのサベージが不憫だ。両腕を失った瀕死の状態であの殴打・・・怪物相手に同情するのもどうかと思うが、それでもさっさと止めを刺してあげた方がいいと思うの俺は。

そんな事を思っていると、ベルグリットさんは殴打を突然停止させ、その場から瀕死のサベージの頭上高くを跳躍する。

「今度こそおおおッ!!」

咆哮と共に振り下ろされた斧が、真下にいるサベージの核コアに深く突き刺さる。落下時の重力による重たい一撃が核全体を粉々に砕き、心臓部を完全破壊されたサベージは今度こそ、息を吹き返すことなくその場に倒れ伏した。

「ハアツ・・・ハアツ・・・やっと終わったか」

軽い息切れを起こすベルグリットさんが安心したように呟く。そりやあんな斧の振り方をしてたら、いくらベテランでも疲れるものだ。今にして思えば連戦だもの、本当にお疲れ様です。

「ベルグリットさん。休んでるところ申し訳ないんですけど、そろそろ移動しないと」  
俺がそう言うや否や、2、3回軽く深呼吸を繰り返したベルグリットさんが駆け寄りながら答える。

「わかってるさ。嬢ちゃんのほうはどうだ？ 怪我はないのか？」

「私は平気です。まだ自力で動けます」

強く打ち付けられた上、数ヶ所の擦り傷を浮かべるエリカさんが答える。彼女は自分の足で立とうとするもふらついて上手く歩けそうもない。見るからにダメージが抜けていない彼女の様子を鑑みてベルグリットさんが、

「・・・無理はするな。さっきのダメージが抜けきるまでは俺が前が出る。それまで坊主に肩を貸してもらえ」

と言う。遠回しな戦力外通告を受けてエリカさんの表情が強張る。

「ですが・・・ッ！」

それでもまだ動けると主張しようとするエリカさんだが、突然歯を食い縛りながら腰に手を回した。まだ前線に出られる状態でないことだけは確かなようだ。

「そんな状態で前に出られても足手まといだ。こっちの部隊の連中はさっきので多少は動けるようになったから、周囲をこいつらに任せておけばいい」

後ろを指差しながら言うベルグリットさん。彼の後ろで控えるように立つ三人の女

性武<sup>スレイヤー</sup>芸者達は俺達から目をそらすように顔を俯かせている。先ほどの醜態を晒してしまつたのを気にしているのだろう、申し訳なささと後悔の感情がごっちゃになつていのが見てとれる。

ベルグリットさんには悪いけど、とてもじゃないが俺達の周りを任せられるような精神状態ではないな。父さん母さんだけでなく、エリカさんもきつとそう思っているはず。

ふとエリカさんのほうへ向き直つてみると、俺と同じ事を考えているのか、「まるで信用できない」と言わんばかりの難しい表情を浮かべていた。しかし、そんな意識もすぐに切り替え、仕方ないとばかりにため息をついた。

「・・・わかりました。でしたら先頭をベルグリットさんに、私達の左右及び後方を部下の方々に任せます。私は救援を呼び掛けますので、何かあればすぐに報告してください」

「元からそのつもりさ」

エリカさんの言葉に同意を示したベルグリットさんは、部下達にそれぞれ指示を与えていく。

「あの、そろそろ離していただきたいのですが」

ベルグリットさん達を見ていた俺にエリカさんが言った。そういえば肩を貸した状

態だったな。そんなに俺から離れたいのか、ちとシヨック。でもなあ。

「お姉さん、さつきふらついてたでしょ。このまま肩を貸しますんで、ダメージが抜けきるまでは大人しくしててください」

「いえ、本当に大丈夫ですから。歩くだけならできますので」

頑なに俺の厚意を拒むエリカさん。そんな彼女に諭すように語りかけてくるのは父さんと母さんだ。

「今のアキラに何を言っても無駄だ。そいつは一度こうと決めたら中々折れない性分なのでな。ここは大人しく肩を貸してもらった方がいい」

「大丈夫よ。その状態のアキラは特に問題を起こすようなことはしないから安心して」

父さん母さん、それってつまり俺が有事でなければ変態的行動に出るとお考えですか？ 今是有事だからそんな余裕もないことは俺でもわかってる。しかし、もしも今が有事でなければ、俺はしっかりとエリカさんの手や腰の感触を堪能していただろう。かと言つて現状、『いやあ程よくやわかい肉付きで気ン持ちはいいツ!!』なんて思えない。思えない。思えないのだ。ん？ 現に今触ってるし思ってるじゃないかって？ これはほら。たんに『肩を貸してる』だけだからセフセフ。

「まあ、あなた方がそれでいいのならこのまま支えてもらいますが」

やっただぜ（歓喜）。

「さて。そちらも話が纏まったようだな。坊主には嬢ちゃんを支えながら移動してもらう。大変だろうが、近くにあるリベリア軍の基地まで頑張ってくれるな？」

ベルグリットさんの言葉に俺は頷く。同様に頷き返した彼が「出発だ」と俺達全員に促し、基地への後退を始めた。

移動を開始して数分後。俺達はまたもサベージに遭遇した。丁度繁華街の前を通り過ぎる頃、正面の建物の影から現れたのがそいつだ。数は一体。どうやら他の個体とは別行動中のようだ。

現在、俺と両親とエリカさんは近くにあった車の影に隠れてやり過ごそうとしていた。移動中だったがエリカさんはようやくとダメージが抜けてきたのはいいのだが、それでも戦闘には出られない。なので今はベルグリットさん達と部下の人達に前線を任せている。

「・・・何でこんな短時間で2匹目と遭遇するのかねえ」

胡座をかきながら、そう愚痴めいた事を呟く俺。

「私達が見たのが4体だったんだ。そうなれば遭遇率が高くなるのは必然と言える。討伐されるまで私達は大人しくここで待ってればいい」

「そうね。こういう時こそ一休さんの精神で待っておかないとね」

「『慌てない慌てない』って？ 後ろの爆音とか打撃音とかが無ければ一休みにはなれただろうね」

（この家族の落ち着き様って一体何なんでしょう）

ぶっちゃけこんなところにいるよりも建物の陰にいたほうが安全のような気がしないでもないが、遭遇してとっさにここに避難したのだから、終わるまで待つしかない。

ここで俺はちと向こうの様子を窺ってみる事にした。確認した方が移動するタイミングを見計らいやすいからだ。そんな訳で頭をちよこつと出してみる。さながら砂漠の地中の巣から顔を出す小動物の様に。

「ちよつと、何しているんですか!？」

「ん？ 向こうの様子を見るだけですけど?」

エリカさんの慌てた声に俺は当然とばかりに答える。

「危ないですから、少しは大人しくしてください。私が確認するので」

そう言って、慌てて俺の頭を無理矢理押さえつけて大人しくさせた。手袋越しとはい

え、見知らぬ女性の手が俺の頭を押さえつけている・・・これはこれで（歓喜）。

「・・・どうやら状況は均衡しているようですね」

頭を覗かせ向こうの状況を確認したエリカさんが呟く。

均衡している、という事はベルグリットさん達も限界が近づいてきたという事か。先ほどとは違い、今では部隊員全員で任務に当たれるようになったとはいえ、聞いたところによれば三人の女性武芸者スレイヤーは今回が初陣・・・そんな彼女らを取り仕切るベルグリットさんには多大な負担がかかっている筈だ。その上サベージに遭遇して連戦続き。いくらベテランでもそろそろ限界に近付いてきた、と言ったところか。

「お姉さん、こういう時って大体増援とか駆けつけてきてくれるはずですよ？　そこはどうなってるんですか？」

俺がエリカさんにそう問うや、彼女は途端に言い辛そうに表情を歪めながら答えた。

「・・・いえ、残念ながらこの場への増援は期待できません」

「は？　なんでですか？」

「実は他の所にもサベージが出現しているんです。あなた方が見た群れとは別の群れが、です。それらが別の地点に現れ、それらの対処に追われて他の部隊に手が空いてないからだそうです」

それは初耳だ。何故そんな重要な事を話してくれなかったのだろうか。そんな俺の



考えが顔に出ていたのだろうか、エリカさんは俺を見つめながら答えてくれる。

『何故話してくれなかったのか?』と言いたそうな顔ですね。無論話そうとは思いましたが、今のあなたの方の精神状態にこれ以上の負担を掛けたくなかつたからです。今は冷静に振る舞っていても、それがいつ限界を迎えてもおかしくありません。ましてやあなた方は民間人・・・そんな方達を守り、いち早く安全な場所に送り届ける事こそが今の私達のすべき事です」

俺を、というよりも俺達を見つめながらエリカさんは優しく微笑みだす。

「それが私たち、<sup>スレイヤー</sup>武芸者の仕事の一つです」

守るべき人命を安堵させるような笑みを浮かべながら、最後にそう付け加えた。

つまりは俺達をこれ以上危険な目に遭わせない為にこれまで黙っていた、という事か。なるほど。確かにその通りだ。いくら両親がワルスラーンの人間だからって、俺達は所詮一般人。戦う力を持たない”守るべき対象”だ。

”普通”ならばそう考えるだろう。しかしながらエリカさんや。多分その心配は杞憂に終わると思いますよ。

「流石武芸者<sup>スレイヤー</sup>だな、立派な心意気だ。今まで誰にも喧嘩で負けた事が無い誰かさんも見習ってほしいものだ。なあアキラ?」

「そうねー。腕つぶしには自信があるのだから、せめて自分の為なんかじゃなくて誰か

の為と言って力を振るってほしいわ。ねえアキラ」

「お姉さん。こんな時にこんな事を言える一家がこれ以上冷静さを失うように思えますか？ 自分たちの子供をDisるような人達ですよ。こんな普通じや考えられませんかよ」

「・・・どうやらそのようですね」

キメ顔で言ってくる父さん、ほんわか笑顔で言う母さん。そして俺の言葉に呆れるような表情を浮かべるエリカさん。しかしまあ心配してくれていたので、俺もこれ以上は彼女の手を煩わせるようなことはしないと誓いましょう。誰にですって？ それは勿論まだ見ぬ『この世界の神様（自称）』にです。

「ぐあつ!!」

俺達家族とエリカさんがそんなやりとりをしていた時だ。俺達が背にしていた車の横を通り過ぎて誰かが吹き飛ばされてきた。壁に叩き付けられたのは、今もなお抗戦中の筈のベルグリットさんが率いる部隊の一人である女性武芸者だ。

その人は今の衝撃で肺の中の空気が無理矢理吐き出され、壁を背に力なく倒れ伏した。

「大丈夫ですか!？」

そんな彼女の下に先に駆け寄ったのはエリカさんだ。まだ全快していないとは言え、すぐさま動き出したのは流石武芸者スレイヤーと言える。

そんな事を考えながら、俺も同様に駆け寄り、女性隊員の意識の有無を確認するエリカさんからの返答を待つ。

「……………今の衝撃で意識を失ったようです」

神妙な表情でそう告げる。まあ、あんな叩き付けられ方をしたらな。

「とりあえず抗戦の余波が届かない場所に移しましょう。すみませんが、お願いできませんか?」

「ちよつと待つてください。お姉さんはどうするんですか?」

気を失った女性の移動を促してきたエリカさんに嫌な予感を覚えつつ、俺は問う。

「私は……………彼らの援護に回ります」

やっぱりか。んな事だろうと思つたよ。

「それ、本気で言ってるんですか?」

「本気も何も、今はそうするほかありません。抗戦中の欠員は、あなたが思っているほど小さい事ではないんです」

エリカさんがそう言うや、節節に残る痛みを抑えながら立ち上がる。少し苦悶の表情

を浮かべるも、すぐに表情を引き締めながら改めて俺に向き直り、言葉を紡いでいく。「先ほどまではベルグリット・レオンハルトが凌いでくれてましたが、彼は連戦続きで疲労が溜まっていてる筈です。今の状況で誰かが空けた穴をすぐに埋めないと、益々不利になっていきます。最悪・・・全滅の場合も」

確かにそうだ。このまま続けば長期戦に入る前に彼らが倒されてしまう危険性が高まるばかり・・・そんな事態にさせないために、エリカさんは最善となる道を選ぼうとしている。

「・・・わかりました。どっち道俺達に止める権利なんてありはしないですからね。増援も来ない以上、お姉さんとベルグリットさん達に頼るしかないです」

「ご理解頂き、ありがとうございます」

エリカさんの言葉に対し、俺は「それと」と付け加える。

「俺のせいですらなってしまうって、こんな事を言う資格はないですけど。それでも、無理だけはしないでくださいいね」

身を案じる俺の言葉が意外だったのか、エリカさんは一瞬驚くような表情を見せた後、すぐに切り替えて微笑むように表情を緩めて言葉を繋げる。

「心配してくれてありがとうございます。ですが大丈夫です。あまり無理をすることもないでしょうし、私の役目はあくまでサベージの動きを抑えるだけ・・・それにこれ以

上怪我を負うつもりは欠片もないので、あなたは心配せず、家族の下へ戻ってください」  
エリカさんが優しい声で諭す。俺は彼女の言葉に従い、気絶した女性隊員の背負って  
その場を離れた。

★☆☆☆

「さて・・・」

気を失った女性隊員をアキラと一家に任せ、見送ったエリカは改めて抗戦中のベルグ  
リット達の方へと顔を向けた。

エリカの見立て通り、先の抗戦では機敏に動いていたベルグリットだったが、今の彼の  
動きにはむらが見られる。彼が一瞬だけ動きを止めた時をエリカは見逃さなかった。  
彼の顔からはおびただしい量の汗が流れ、激しい息切れも起こしている。おまけに彼の  
の一撃に込められたエナジーの量も著しいもので、サベージに対して決定打になりえて  
いない。

疲労困憊——そんな状態でいまだに倒れていないのは度重なる実戦経験と極度の集  
中力があってこそと言えるだろう。しかし、

（決定打になりうる攻撃をできるあの人がそれをしないという事は、もうすでにそこま

でのエナジーが残されていないという事)

逆に考えれば、彼が機を見て止めを刺すという可能性は無きにしも非ずだが、今の彼の状態から察するにその可能性は限りなく低いとも言える。となれば、ベルグリット以外に必殺の一撃を決められる武芸者スレイヤーが必要となる。

現時点でこの場にいる武芸者スレイヤーはエリカとベルグリットを除いた、残された二名の女性武芸者スレイヤーのみ。彼女らの武装はそれぞれ双剣と槍の二種類という事が確認できる。

(連続攻撃に秀でた双剣は一撃必殺に向かないですね。槍を持ったあの武芸者スレイヤーの方が適任……ですが)

様子を見てみる限り、槍を持った女性武芸者スレイヤーの攻撃はお世辞にも鋭いとは言えず、ただサベージの攻撃を避けては槍の切っ先を当て続けるだけのループ作業だった。彼女の表情には仲間が倒れた時の動揺で混乱や焦り等の感情が見え隠れしていて、その動作は誰の目から見てもお粗末としか呼べないものとなっていた。

(がむしゃらに突いているだけですね、あれは。リディならばとつくに核コアを破壊できていますように)

身近に槍(より厳密に言えばスピア)の扱いに長けた同生徒会員と比べると、やはり見劣りしてしまう。そんな感想を抱きながらもエリカは分析を止めない。

(私の《絶対運命の鎖エヴァー・ラステイング》で動きを封じつつ、彼女の槍か、可能であればベルグリット・レ

オンハルトにシエルターを破壊してもらいつつ止めを刺していただきたいのですが)

しかし、ここで下手にベルグリットへ通信を繋げてしまえば、彼の集中力を途切らせてしまう可能性が非常に高くなる。そうなれば最悪、サベージによつて彼が行動不能に陥つてしまい、エリカとろくな実戦経験のない2人の女性武芸者<sup>スレイヤー</sup>とで抗戦を続けなければいけなくなる。

それだけは何としても避けたい事態だとエリカはより念密に考える。

(増援は望めない。部隊を率いるベルグリット・レオンハルトもすでに疲労困憊。実戦経験がほとんどない武芸者<sup>スレイヤー</sup>が2人。残る此方の戦力のみでサベージを撃破・・・ツ、ここは無理を通すしか)

考えれば考える程不利な状況。仮にサベージの動きを止められたとして、残る面子で確実に撃破できるのかすら怪しい。

先のアキラとの会話で「無理をすることはない」と口にしたが、無論それは「可能であれば」の話であり、絶対にはしないという保証は付けていなかった。

ならば、エリカに出来る事は既に決まっていた。その場から駆け出し、ベルグリット達と対峙するサベージに向かって右側面へと走り出ながら、エリカは右腕に装着した《絶対運命の鎖》<sup>エヴァー・ラステイング</sup>からフックの付いた鎖を伸ばし始めた。

「ハアアアッ!!」

サベージの攻撃が届かない距離を保ちつつ放たれた鎖は込められたエナジーによって伸び続け、三々四メートルの巨体を誇るサベージの上半身を覆い尽くすように雁字搦めにしていき、攻撃と防御を同時に封じる。

エリカはそのままエナジーを鎖に流し続け、怪物特有の怪力任せな抵抗で砕かれないよう頑丈にしていく。

「私の残るエナジー全てを込めた鎖……そう簡単に砕けるとは思わないことですっ!!」  
エリカの宣言通り、サベージが鎖を破壊しようともがき続けるが、ギシギシと音を鳴らすだけでヒビすら入らない。それでも何とか振りほどこうともがくサベージだったが、同じことの繰り返しでろくな抵抗ができるはずもなかった。

そんな両者の様子に、既にサベージと対峙している三人はエリカが取った行動の意図を即座に理解する。ベルグリットはより意識を集中させ、二人の女性武芸者スレイヤーはそれぞれの得物を構え直す。

エリカがさらに力を込めて拘束力を強め、その場にサベージを抑えつける。彼女の拘束が続いている間、二人の女性武芸者スレイヤーがサベージの両側から攻撃を仕掛け始める。

「脚を狙うわよ!!」

「了解!」

二人はそれぞれ狙いを定める。両者共にサベージの硬い皮膚と皮膚の間、生物ならば



必ず存在する急所目掛けて双剣を振るい、槍を突き出して的確に攻撃を加えていく。

「グオオオオオオツ!!」

得物は違えど同じ個所を二カ所も同時に攻撃されれば、いくらサベージでも堪らず叫び出してしまふ。

そんなサベージの躰を足場にして、ベルグリットがサベージの頭上に飛び出していく。狙いは頭部の核コアを守る膜であるシエルター。空中で斧を上段に振り上げ、落下の勢いと合わせて膜目掛けて振り下ろす。

「おおおおおっ!!」

雄叫びと共に振り下ろされた斧がシエルターに叩き付けられる。その一撃でシエルター全体にひびが入り、その勢いのまま力任せにシエルターを破壊。斧の刃が核コアに触れる——その直前。

「うお!!」

サベージは拘束されているにもかかわらず、頭を振る事で無理矢理核コアへの直撃を避けたのだ。あと数センチというところで核破壊を免れたサベージは頭上に滞空するベルグリットに頭突きの際で反撃する。自らの心臓部である筈の核コアを武器として扱う——普通ならば考えられない行動に驚きの声を上げつつ、ベルグリットは地面に叩き落とされた。

「教官!」

両側から攻撃を続けていた二人の武芸者スレイヤーが攻撃の手を止めながら声を荒げる。

「クソッ……そんなのアリかよッ……!」

驚嘆な声を上げるベルグリットが斧を杖代わりに立ち上がり、正面のサベージを睨み付ける。エリカが抑えてくれていられるおかげで反撃を受けずに済んでいるが、それもいつまで保つかわからない。早々にケリを付けたいベルグリットだったが、如何せん連戦続きでろくなエナジーが残っているはずもない。

ただし、シエルターは破壊できたのだ。あと一撃——それに全てのエナジーを注ぎ込み、叩き込む事ができれば、或いは。

「うしっ! もう一度!!」

腹を括り、もう一度駆け出すベルグリット。またサベージの躰をつたって空中に飛び出す算段だろう。

「キャアッ!」

「何っ!?!」

しかし、サベージは突然躰を右に大きく揺らし、その巨体を抑えつけていたエリカを力任せに引っ張ってこちらに向かってきていたベルグリットにぶつけるといふ驚きの行動に出た。

攻撃も防御もできない状態でこの反撃。予測できない動きに驚く暇もないまま二人は地面に倒れ、ベルグリットは最後の攻撃のチャンスを失い、エリカが全霊を込めた拘束から無理やりに脱したサベージ。拘束が緩んだその瞬間を見逃さないように、サベージは今度こそエリカが放ったハンドレッドの鎖を引き千切り、ようやく解放する事ができた。

「オオオオオオオッ!!」

歓喜にも聞こえる咆哮が響く中、エリカとベルグリットは傷ついた体に鞭打ちながら立ち上がろうとする。が、ぶつけられた時と地面に叩き付けられた時のダメージが重なって中々立ち上がれずにいる。

そんな二人に向き直ったサベージはまず左右の鋏を大きく振りかぶり、一連の行動を見ていた二人の武芸者スレイヤーを後方に下げさせる。更に追い打ちをかけるように鋏を使つてベルグリットに振るう。

「クッー」

鋏が当たる直前に残るエナジーを込めてEバリアを展開してそれを防ぐも、立ち上がるのもやつとな彼がまともにそれを受け止められるはずもなく、叩き付けるような衝撃と共にベルグリットは後方に吹き飛ばされていく。そのまま乗り捨てられた車両に叩き付けられる。

「ガハッ！」

ベルグリットはその衝撃で口から血を吐き出し、車体を背にズルズルと下がり地面に座り込む。

「ツ・・ベルグリット・・レオンハルト・・！」

心配する声を上げながらエリカが彼の方へ向くも、直ぐにサベージに向き直って自らのハンドレッドを構え直す。

触覚を動かし、次の獲物へ狙いを定めたサベージ。ギョロリとした目に映すのは、ハンドレッドを構えた臨戦態勢のエリカだった。

彼女があまり動けないのを良い事に、サベージが容赦無く左腕の鋏を振るい、とつさにEバリアを展開したエリカをまるで火の粉を払うかのような動作でその防御ごと薙ぎ払う。

この攻撃で真横に吹き飛ばされたエリカが今の状態から受け身を取れる筈もなく、そのまま背中から煉瓦造りの建物に叩き付けられる。

「グハッ！ ゴホッ・・ケホッ」

勢いが乗った衝撃で煉瓦造りの壁を突き破り、建物の中で滑るようにして地面に倒れ込んだエリカの口から血が吐き出された。

ベルグリットとほぼ同時に倒れたエリカに、立ち上がる力は殆ど残っていなかった。

ここで自分は討たれるのか・・・そんな考えが過った時だ。自身が倒れる建物の部屋の中に、聞き覚えのある声が響く。

「お姉さん!!」

アキラだ。一時間もかからないうちに彼らと出会い、先ほど倒れた女性スレイヤー武芸者の一人を抗戦の余波が届かない場所へ移動させた家族のうちの一人が、心配する声を上げながら部屋に入ってくる。

「あな、たっ・・・な、何で・・・ここに・・・?」

「何でって。そりゃ様子を見に来たからに決まってるでしょ。さっきの会話でお姉さんは、絶対に無理する」と確信してましたから」

自身を助け起こすアキラに問い質したエリカの顔に、一瞬だけ驚きの表情が浮かぶ。まるで最初から自分の行動を先読みしていたかのような口ぶりに、エリカは驚きを隠しきれなかった。

「やっぱりね。ベルグリットさんが疲労困憊なのはわかっていたし、あの状況でサベージを倒すには、相手の意表を突くよりも、確実に身動きを封じた状態にしたほうが確実性が高まりますからね。でも、実際はそう簡単に上手くいかなかったようですよ」

「なっ・・・!」

冷静な様子で先の抗戦の流れを口にするアキラに絶句する。短時間ながらもアキラ達家族のやりとりを見ていて少なからず彼らの事を理解し始めていたエリカだったが、ここにきて改めて彼ら家族の一端を垣間見た。

どんな時も冷静を保つアキラの父と穏やかな笑みを崩さない温厚な母。その子供であるアキラは二人の性格を綺麗に分けて足したような存在だ。

非常時の今ですらそんな様子で状況を分析したのだ。驚愕を通り越して感心すら覚えてくる。

「・・・全く。どういう人生を送ってきたんですか？ あなたは」

「ん？ 至って普通の生活ですが？」

苦笑を浮かべるエリカのそんな問いにアキラは飄々と答える。しかし、これで事態が好転したわけではない。

「とにかく早くここを出しましょう。また肩を貸しますんで、立つてください」

「解つて、います・・・ウツ！」

立ち上がるうとしたエリカが突然自身の右肩を押さえる。恐らく建物の壁を突き破った際に骨折をしたのだろう。彼女の額から浮かんでくる汗の量が尋常ではない様子から、アキラはそう判断する。

「大丈夫ですか？」

「痛つ．．え、ええ．．ツ!!」

言葉を掛けるアキラに答えようとしたエリカだったが、その視線の端でサベージの姿が映り込み、それが”口を開いて砲撃状態に入っている”事に初めて気が付いた。

「危ないッ! あなたは逃げてッ!!」

「ハアツ?!」

突然避難するよう呼びかけるエリカの言葉に戸惑いを隠せず、素つ頓狂な声を上げる。しかし、それも束の間で彼女が何故そう言ったのかすぐに理解できた。

サベージが攻撃を仕掛けてくる——そう瞬時に理解したアキラは逃げるような素振りを見せず、今度はいまだに座ったままのエリカを突然、抱き抱えた”。所謂『お姫様抱っこ』である。

「なっ、何をするんですかっ?!」

「煩い! 今はとにかく黙ってて!!」

ハンドレッドを展開しているとはいえ今の状態のエリカを抱き抱えるアキラの腕力と有無を言わさぬ迫力に驚きつつも、いきなりの行為に頭の処理が追い付かず、エリカの両の頬は真つ赤に染まっていく。

そんなことに構わず走り出したアキラは、視界の先に砲撃体勢のサベージがいるにも関わらず建物の外へ飛び出す。このまま砲撃されれば建物ごと下敷きにされてしまう

からだ。ならば砲撃の射線上から出るべきと判断したアキラはエリカを抱き抱えたまま砲撃から逃れる為、がむしやらに足を動かし続ける。

幸いサベージの砲撃の直前にはチャージタイムがあり、難なく外に出る事は出来た――ただし、”それだけ”だ。外に飛び出して走り続けるだけでは簡単に砲撃から逃れる筈もなく、その臨界はすぐに迎えた。

サベージが開いた砲口から黄色い極太の光線が放たれた。それが狙うはエリカを抱え走り続けるアキラだ。砲撃が彼らを消し灰にするのに数秒も掛からない。

高密度のエネルギーの束である砲撃がアキラとエリカを諸共に包み込む。



そこには、何も残らない筈だった。

サベージの砲撃で残るのは破壊の傷跡のみ——それが、”庇うようにエリカの全身を覆うアキラの背中”がそこにはあり、同時に彼らの周りに『不可視の壁』があった。

「あ……あなた……は……」

今の砲撃を完全に防ぎ切った『不可視の壁』。それがエナジーによって作られた壁である事は武芸者スレイヤーであるエリカ自身が理解していた。しかし、それを展開したのはエリカ本人ではなかった。彼女はとうにエナジーを使い果たし、負傷までしている。そんな状態でエナジーを放つことすらできない。

では誰がやったのか？——その答えは自らの目の前に”居た”。

「……………ん？……………ん？」

砲撃を浴びたはずなのに、事態を把握できないでいる困惑顔の一般人である少年。エリカ達選抜隊セレクションズが安全を保障させる筈の民間人の一人。外敵との対抗手段を一切持たない筈の守るべき存在。そんな少年から、自分とは違う流れのエナジーを放っている事が肌で感じ取れた。

「あなたは……武<sup>スレイヤ</sup>芸者……なのですか？」  
「……はい？」

エリカの問いに少年——四宮アキラは困惑顔を浮かべたまま、呆然と呟くだけだった。

逃げる、避けるばかりは恥ではない。

『絶対に無理をする』と確信していた俺がエリカさん達の元に戻り、案の定無理を押し  
てサベージと対峙していたエリカさんが負傷している所を助け出し、放たれたサベージ  
の砲撃を前に無我夢中で彼女を庇った俺の周りで信じられないことが起きた。

砲撃に身を包まれ、塵すら残らない筈だった俺達が無傷でいたのだ。よく見てみれ  
ば、周りを囲うように不可視の壁があるように感じられる。その壁は電流を迸らせ、俺  
達を砲撃から守っていたことはすぐに分かった。

何がどうなっているのかもわからず、困惑する俺にエリカさんが問い質す。

「あなたは……武芸者<sup>スレイヤー</sup>……なのですか？」

一瞬「は？」と思った。

なぜ一民間人である俺にそんなことを訊ねるのか。そもそもこの不可視の壁は何な  
のか、俺の方が聞きたいことがあるのですが。

「答えてください！ あなたが何故Eバリアを張れるのですか!？」

解答に詰まる俺に業を煮やしたのか、エリカさんは俺の襟首を掴んで詰め寄る。すみ  
ません顔が近いです息がかかってますいい匂いがしますシャンプーはヴェイダル〇スー

ンかな？

「いや、でも俺は一庶民なんで……武芸者スレイヤーとか軍人とかではなくてですね……その、何故バリア？を張れるのかも検討が付かなくて」

「あなたに武芸者スレイヤーとしての資質があるのならバリアブルストーンを持つだけでバリアくらいは張れます！」

そんな事を言われても、俺はバリアブルストーンなんて持つてるわ……け……

「……まさか」

「？ なんですか？」

エリカさんを余所に、俺は懐に仕舞っていた包——父さんと母さんに渡されたばかりの方位除守の御守りを取り出した。

その包みからは僅かにだが光が漏れていた。ボウツと淡い輝きを放つその包みから中身を取り出した。そこにあつたのは……。

「……嘘だろ」

「それは……バリアブルストーン!? やはり持っていたのですね」

予想だにしなかった”中身”に驚きを隠せない俺とエリカさんの眩き。

包みから取り出したのは、掌に乗れるサイズもある八面体の鉱石だった。濃紺の淡い輝きを持ったそれが、武芸者スレイヤーを武芸者スレイヤーたらしめるモノ——『バリアブルストーン』で

ある事は素人の俺から見ても直ぐに解った。

しかし、まさか父さんと母さんからの贈り物がこれだったとは……. 那样的いえば『御守り』とか言ってたな、これがそうなんだろうか。というかこんなことでこの場に留まってる場合じゃなかった!

「動かないでよね!」

「え……. キャア!」

ヴァリアブルストーンを握りながらエリカさんを再び抱えて俺は走り出す。

「ちよ……. 私はもう平気なので下してください!」

「並んで逃げるよりも抱えて走った方が早い!」

ぶつちやけ下ろす余裕があればそうしてるよ!

んで、サベージのほうは……. と、俺達を追跡するように走り始めた!?

「なんだよアイツ! 何で俺達を追ってくるんだよ!」

「……. これは私の憶測なのですが」

ふと聞こえたエリカさんの呟きに気付きつつ、走りながらも腕に抱えた彼女の方へ顔を向け直す。

「恐らくは……. あなたのヴァリアブルストーンを狙っているのではないかと…….」

なん……. だと……. !?

「……え？ 何？ じゃあ俺がこれを持つてる限りは追われ続けるってこと？」

「……あのサベージの反応から察するに……その可能性はあるかと」

おうふぎけんちくしょうめい。誰がサベージと追いかけてこなんて興じるかよ。そうなると早いとこの手のヴァリアブルストーンを投げ捨てるべきなんだろうけど……如何せん父さんと母さんからの贈り物だから捨てづらい。ていうかできない。

「つうか何でサベージがヴァリアブルストーンを狙ってるなんてわかったの!？」

「今のサベージの反応からそう推察するのが自然な事かと」

それもそうだ。……待てよ。ヴァリアブルストーンを持ってバリアが張れた、て事は……俺も武装を展開できるんじゃない？」

「もしかして……ちよつと止まるよー」

「な、なにを!？」

俺はそこで立ち止まってエリカさんを抱き抱えたまま、背後に振り返る。

話しながらも相当走ったせい、サベージとはかなり距離が離れていた。少し小休止しても良い位には程よい距離だろう。それでも相手は走ってくるのだからすぐに追いつかれるのだろうか。

息を吸って……吐いて……手の中のヴァリアブルストーンを握りしめながら、俺は正面のサベージを見据える。そして、手の中のそれを前に掲げながら「ある言葉」

を口にする。

「……………ハンドレッド・オン  
百武装展開!!」

武芸者がハンドレッドを展開する際に用いる起動コード。それを合図に、手の中にあ  
る濃紺のヴァリアブルストーンが更に輝きを放ち、微粒子状に分解されていく。

その微粒子は俺の両腕に纏わり付くように集まり出し、やがて収束するように形を形  
成し始める。

剣道着の防具によく似た形状で、ゴツゴツとした武骨な印象を与えつつ、手首辺りか  
ら伸びた濃紺に光るラインが、防具全体に迸る電流のように伸びている。

防具の所々にもまるで棘のような歪な針が飛び出して、当たれば大怪我は避けら  
れないだろう。全体的に見て防具らしからぬ形状をしたそれが両腕に備わり、展開が完  
了する。

「で、できた……」

「それが、あなたのハンドレッド……まさか一回で展開できるなんて」





だもの。いや、本当にできてよかった。これでしばらくは走る必要もなくなった。ぶつちやけ言うところのエイカさん（武装込み）は重かった。そんな彼女を抱えてサベージから距離を離すほどに走った俺を一生分褒めてやりたい。

「それで？ どうするつもりですか？」

「ん？ 何を？」

「え？」

「え？」

え？

「ちよつと。待つてください。ハンドレットを操れるあなたが戦うのではないのですか？」

「え？ そんなつもりはないですけど」

「え？」

「え？」

ん？

「え、と・・・それでは、この後はどうするのですか？」

「えーと、とりあえず・・・スレイヤー武芸者なら誰でもいいから来てくれるまでサベコイイッジをここに足止めしておく。俺はとにかく躲すなり防ぐなりして時間を稼ぐ。これが最良」

「えー……」

俺の最良の案を聞いて呆れた表情になるエリカさん。仕方ないじゃない。俺は戦闘経験なんて皆無なんだし、逃げるよりもはるかにマシだよ。決して走るのが疲れたなんて理由ではない。

「ま、まあ案が無いよりはマシですか。そろそろ下ろしてください」

片腕に抱えたエリカさんから降ろすよう促される。多少は疲労が抜けたのだろうか、地面に下ろした彼女は先ほどよりもしつかりと立てるまでに回復したようだ。

「私は通信でもう一度増援を望めないか確認してみます。あなたはその間にサベージを引き付けておいてください」

え？ 下ろしたなら手伝ってくれるんじゃないの？ 俺がそんな事を言いたげな視線を向けると、エリカさんはごく自然な口調で言葉を紡ぐ。

「ベルグリット・レオンハルト達がいらない以上、私達だけであのサベージをどうにかすべきです。ですが、あなたは実戦経験が皆無。私はエナジーを使い果たし、碌に戦える状態ではありません。ならば増援を呼ぶしか他に手はないです」

そういえばエナジーって休めばそう簡単に回復するモノではなかったね。忘れてた。つまり俺がサベージを足止めしてればいいわけか。普通民間人にそんな役を任せるかね。

「あなたがハンドレッドを展開できたのは僥倖でした。幸いにも、あなたはサベージの攻撃を防ぐだけの術を得ています。でなければ私達は今もずっと逃げ続けていたことでしょう。ともかく、私が増援を呼びかけている間、あなたはサベージを引き付けてください。そうすれば、あなたの役目は終わりです」

そんな悪役が言いそうなセリフを吐くエリカさんに吃驚しつつも、俺は正面のサベージを見据えながら身構える。

「引き付けるのは良いけど、何でそんな役目を俺のような民間人なんかにな？」

「不幸中の幸いとは言え、あなたは自らの武芸者<sup>スレイヤー</sup>としての素質を示しました。ですから利用する価値がある——理由はそれだけです」

ようは『利用できるものはなんでも利用する』、か……。この人ってこんなキャラだっけ？ まあ状況が状況だからそれに従うほかないか。他に手もないみたいだし。

「じゃあ俺はバリア張るのに集中するから、お姉さんは早く通信で呼びかけて」「解っています！」

なげなしの勇気を振り絞って敵の出方を窺いながら、エリカさんは比較的安全な地点まで離れていく。

後ろで離れていく足音を聞き届けていると、直ぐにサベージが行動に移る。片腕の鋏で狙いを定めるのは——俺か！

「よっ、とー！」

後ろに飛び退いて一撃を躲す。俺を切り裂く筈だった鋏は空振りに終わり、鋏が届かない位置に離れた俺を追ってサベージが距離を詰めてくる。このままエリカさんから距離を置くのが得策なんだが、それでは俺が何時までもサベージを引き付ける事になる。一般人の俺にも体力や気力には限度がある。辛抱強く引き付ける為には一時離脱も必要だ。

「こつちだノロマ！ 悔しかったら俺のケツを刺してみやがれ！」

俺はサベージに背を向けて走り出す。奴さんが追いかけてくるのを止めないよう、一定の間隔まで距離を詰めさせてまた離れる。こうすれば俺の体力と気力の温存につながるしエリカさんにも危害が及ばない筈だ。尚、俺が吐き捨てた台詞に深い意味はない。

俺はこのままサベージと距離を離しつつ、軽い足取りでその場を走った。

「………そういや、何でサベージは砲撃しないんだろ」

★☆☆

「こちらはリトルガーデン所属、エリカ・キャンドルです。リベリア軍支部へ応援を要請

します。繰り返します」

アキラがサページを引き付けて遠ざかっている間、破壊された建物の陰に隠れたエリカは手首の通信機を通してリベリア軍支部への直接連絡を図っている。しかし、通信機を介して返ってきたのは「困難」の二文字だった。支部のオペレーターによると、どうやら他区間に現れたサページの対処に追われているようだ。

「そうですか・・・そちらの状況は理解しました。こちら私達で何とかしてみます。無理を言って申し訳ありませんでした」

無情な返答を聞いて少しばかり気落ちするものの、すぐに気持ちを切り替えて今度は自らが尊敬する“彼女”——クレア・ハーヴェイへ通信を繋げる。

『私ですわ。どうかされましたの？』

「クレア様。お忙しいところ申し訳ありません。実は・・・」

エリカは今の状況について向こう側にいるクレアに話した。遭遇したサページによって戦闘不能に陥ったベルグリット達と離れて戦う事になった事。エリカ自身に継戦能力は殆ど残っていない事。そして、アキラがハンドレッドを展開してサページを引き付けてくれている事を。

『そうです。あの少年が・・・状況は飲み込めましたわ。こちら片付き次第そちらへ向かいますので、GPS機能を起動しておいてください。リトルガーデンから逐一位置

情報を更新してもらうので、あなたはあの少年に出来得る限りの援護を行ってサベージをその場に足止めしてください』

「了解いたしました。そのように伝えます」

『エリカ、分かっている事とは思いますが、無理はしないように。あの少年も同様に、ですわ』

「理解しております。クレア様もどうかお気を付けて」

最後に『ええ』と短い返答と共にブツリと通信が切られる。言われた通り腕の機器を操作して自らの位置を示すGPS機能を起動しておき、後は彼女達が来るまでの辛抱となつた。

「まさかクレア様のお手を煩わせることになるとは……私もまだまだ半人前という事ですわね」

歯痒い気持ちと共に込み上げてくる小さな苛立ち——憧れであり崇拜する対象であるクレアの手を煩わせる自分に対して芽生えた感情が胸中を占め始める。

「いえ、今は自分の事よりも先にサベージをどうにかしなければ……それではクレア様に合わせる顔がありませんね」

とにかく残るサベージをどうにか締め上げたい衝動に駆られつつも、その衝動を頭の隅に追いやり、アキラへ増援が来る事を伝えなければならぬ。

「あの少年は……向こうですか。サベージの暴れている音が聞こえるという事は、しっかり役目を果たしてくれているという事ですか」

自分から言い出した事とはいえ、距離を離すまでしてくれるとは思っていなかった。内心でアキラに感心しながらも、物陰から立ち上がる。

破壊し尽くされた市街地へ向き直った彼女の視線の先では、死角となった建物の向こう側からサベージが何かを叩きつけたような打撃音が聞き届く。

「ですがこれ以上は彼自身にも疲労が溜まる一方ですね。急がないと」

ふとエリカは、あの少年の名前を知らないことを思い出す。

「そういえば、彼らのファミリィネームさえ知らないままでしたね」

事態が事態とは言え、少しは知るようになった彼らの事くらいは名前だけでも覚えておこうと思いつつ、エリカはアキラの下へ走り出した。

★★★

エリカさんと分かれて俺はサベージの誘導を、当のエリカさんは増援の要請をしに行つてから5分ほどの時間が経過していた。おかしいなー、そろそろ来る頃合いなんじゃないかなー、と思いつつサベージと距離が近づいては離れていく流れ作業を延々と

繰り返す俺。

あれからサベージは砲撃のほの字も浮かべない物理攻撃で俺に襲い掛かってくるんだけど、俺はそれを全て躲すか防具擬きで滑らせて受け流すしかしていない。

一番の気掛かりは砲撃を放つ口部で、それが何時開いてもおかしくはない筈なのが。

「そもそも何で俺のヴァリアブルストーンを狙いやがるんだ？」

このサベージの行動原理から推測したエリカさんの考えは多分正しいのだろう。

サベージは恐らく、俺が持つヴァリアブルストーンに惹かれて寄ってきているのだろう。理由はわからぬが砲撃してこないという事は、『壊さずに手に入れること』に意味があるのかもしれない。根拠はない。あくまで推測の中で導き出した結果なのだから、これが本当に正しい事もわからない。

しかしだ。理由が何であれ、今は模索などしている場合ではない。相手が砲撃してこないというのであれば逆に好都合。そこを利用して俺は地道に避けるなり引き離すなどして増援が来るまでの時間を稼ぐだけだ。ぶっちゃけバリア張るの疲れるから出来る事ならしたくない。増援が来たら俺はさっさと某三代目の大泥棒並みの逃げ足でトングラさせてもらおう。結果的に俺の行動原理はそこに集約されるので文句を言われる筋合いはない。「あーばよー！」って言いたいのはここだけの秘密だZO☆。



「おーい！ 聞こえてますかーっ!?」

そんな声が聞こえてきて俺はサベージとの距離を離しながら、その声が出た方へ振り向いた。

丁度真後ろで追走してくるデカイ壁の向こう側——ヴァリアブルスーツ姿のエリカさんが立っていた。彼女は口元に両掌を広げながら、大声で俺に言葉を投げってくる。

「つい先ほど連絡が届きましたーっ！ あと数分もすれば増援が駆けつけてくれます！ ここから先は私が引き継ぎますので！ あなたは武装を解除して何処かに隠れていてください！」

それは嬉しいニュースだ。ならば後は任せよう……と言いたいところなんだけど、エリカさんにエナジーは残っていないからそれを任せる事は出来ない。俺は目の前に迫るサベージの剣を屈んで避けながらエリカさんに向かって大声で返す。

「ごめんなさい！ それはちよつと難しいかもしれない！」  
「何故ですか!?!」

そう聞くのも当然だ。何せサベージは俺のヴァリアブルストーンを狙っているのだ。そのの武装を解除したところでコイツが諦めてくれるとは到底思えない。ならここはいつその事増援が来るまで俺が持たせるしかないだろう。どうでもいいけど通信機が無いと不憫だなこのやり取り。喉が枯れそうだ。

「多分だけど！ サベージはヴァリアブルストーンを狙ってるんだと思う！ 確証はないけどそんな感じがする！」

「・・・ッ！」

俺の言葉で思い当たる節があったのか、エリカさんは黙り込む。ごめんね。でもこれ多分気のせいじゃないんですわ。確証も根拠もないけど。あ、またサベージの鋏攻撃。バックステツポオツ!!

「・・・それでは私も加わります！」

フアツ!? まじで言ってるのかそれ！ 続く第三撃の鋏を踏み台にして高くジャンプする。ちよつとアクロバティックな動きになってきたな。

「無理はしないで！ お姉さん怪我もしてるんだしき！」

「あなたが引き付けてくれたお陰で走れるくらいには回復できました！ ハンドレッドを展開できたとはいえ民間人のあなたを巻き込んでしまったのですから、私にだってそうするくらいの責任があります！」

責任で・・・言われた事とはいえ俺だって進んでやってることなんだし気にしなくてもいいのに。続けて振るわれてくる鋏を屈んで避け、反対側から迫る鋏を両足のバネを全開にして地面を蹴り高く飛び上がる。そのまま空中で身を翻しつつ真後ろに後退。地面にスタツと綺麗に着地する。

「あと、さつきから思っていたのですがあなた動きが段々と洗練されつつありませんか!? 新体操選手も吃驚なくらいの!」

俺自身もそう思います。さつきから体が妙に軽い気がするんだよね。これもあれかな。エナジーが体に順応してきたって所かな。ともあれサベージを翻弄できるのであればこれくらいは身体能力はあってもいいよね。でも多分新体操選手の方が身体能力は凄まじいはずだけど。どうでもいいなこれは。

「兎に角! お姉さんは下がって! 俺も適当なところで避難するから!」  
「ですが・・・ッ!」

それでも尚引き下がるんとするエリカさんだが、彼女の存在に気付いたサベージが俺ではなく彼女の方へゆっくりと振り向いた。触覚を揺らめかせ、ギョロリとした双眸がエリカさんの姿を完全に捉える。彼女自身もそんなサベージの動きに気付き、一歩後ずさる。

「! お姉さん逃げて!!」

俺は腹の底から絞り出すような叫びを上げるも、サベージの腕が薙ぎ払わんとばかりに彼女に向かって振るわれる。

「チィッ!!」

舌打ちを打ちつつ、咄嗟に走り出した。エナジーのおかげで体が軽いと感じるせい

か、地面を蹴っただけで十歩分の距離を詰めながらサベージの腹の下を掻い潜り二歩目で更に十歩分、反対にエリカさんとの距離を縮めていく。

サベージの腕がエリカさんに届くまであと数センチ。俺の手が彼女に届くのも数センチ程。庇うには少し、いや結構危なすぎる！

「こなくそッ!!」

俺は頭で考えるよりも早く体が動いた。両腕を前に突き出しながら、更に地面を蹴つてエリカさんを抱き止めるように抱えて自分ごと突き飛ばす。その行動が功を奏したのか、間一髪のところまでサベージの攻撃から逃れる事に成功した——のは良いのだが、ここから先が問題です。殆どタツクルの要領で突き飛ばした後、俺達はどうなるのか。その結果は当然、地面に向かって倒れる事になる。

更に悪い事にこのままの体勢だと、自然とエリカさんを押し倒す事になってしまふ。突き飛ばす+押し倒す⇨地面をバウンドしながらエリカさんにさらに重傷を負わせることに。それだけは避けなくては！

「ふっ!!」

俺は咄嗟に身を翻し、俺が下敷きになる様にして地面に無防備な背中を晒す。そのまま強く地面をバウンドしながらなんとかエリカさんが傷を負わないよう、俺は自らをクッションにして地面を転げ回る。5回ほどバウンドした後、背中地面を削りなが

らブレーキが掛かってようやく止まる。

止まったのは良い。だけど背中が焼けるように熱い。あと全身が鞭を打ったように痛い。バウンドしたんだから当然だが、これは思っていた以上にヤバかった。打ち所が悪かったらこのまま人生終わってたかもしれない。

「痛ッ．．!!」

「だ．．．大丈夫ですか？」

両腕に抱き止めていたエリカさんから心配する声が聞こえる。俺が下で上がエリカさん．．．傍からはまるで抱き合っているように見えて中々に危ない体勢だ。おまけに肌の露出が多い全身ピチピチスーツを着込んでいる分余計に危うく感じる。その上今の姿勢からエリカさんはまるで上目遣いでこちらを見つめるような感じになっていて艶めかしく見えてしまう。

「つ．．．だ、大丈夫です、よ．．．？」

「?」なぜ疑問形なのかはわかりませんが、早く立つてください。今のうちに退避しましょう」

下敷きになった俺の上から退くように立ち上がり、エリカさんから差し伸べられた手を握り返して俺は立ち上がる。あぶねえ、今のが脳裏に焼き付いて俺の分身が立ち上がる寸前にまでなった。そんな状況じゃねえってのに。

「さ、早く行きましょう！」

そのまま腕を引かれてサベージとの距離をまた開け始める俺達。後ろを振り向けば、サベージは全速力で俺達に追いつこうと走ってくる。

「走ってきてる！ 追いつかれるよ！」

「大丈夫です」

「へ？」

何故——そう聞く前に俺達の頭上で“緑色の閃光”が走る——エナジーによる遠距離攻撃だ。それが一直線にサベージに吸い込まれるように飛び込み、奴の顔面に直撃する。小さな爆発を起こしながらサベージの頭部にあったシエルターが破壊されていて、核が露出していた。

「今のは……」

「！ あそこです！」

エリカさんの喜色を含めた言葉と共に、走った先にある建物の屋上へと指が指された——そこには赤いヴァリアブルスーツを身に包んだ金髪の女性、クレア・ハーヴェイが立っていた。彼女の手には自らの武器である赤く巨大な銃器が握られている。その隣で褐色肌で濃紫色のヴァリアブルスーツを着用した女性、リディ・スタインバーグが立っている。



「——お待たせしてしまい、申し訳ありませんでした」

その一言と共に、クレア・ハーヴェイは目線の先に見据えたサベージの頭部へと手の銃器——バスターキャノンを構え直し、エナジーをチャージし始め再び砲撃を加えようとしていた。その隣でリデイは静かに得物であるスピアを構え、いつでも突撃できる体制で待機した。

彼女達がこの場にたどり着いたのはたった今だ。先ほどまで他区間のサベージを駆逐していた時に通信を繋げてきたエリカの増援に向かうため、早急にサベージを撃破してここまで飛んできたのだ。

この時点で他の区間に現れたサベージは粗方討伐され、残るはエリカ達を襲うサベージのみとなった。リトルガーデンからの指示を頼りに殆ど瓦解した建物の屋上へ降り立つとともに、視線の向こう側にアキラの手を引くエリカ——と、それを追いかけるサベージの姿が見えた途端、クレアは咄嗟の判断で遠距離攻撃を放ったのだった。

クレアの紡ぐ言葉は通信機を介してエリカの下へ届けられる。その言葉が届いたのか、エリカが嬉しそうな表情を浮かべているのが遠目でわかった。

『クレア様！ お待ちしておりました！』

「間に合ったようで何よりです。エリカはそのまま少年を連れて退避してください。後の事は私達にお任せを」

『分かりました！』

若干興奮するような声が通信機を通して届き、遠目で鼻息を荒くしながらも敬礼の姿勢を取るエリカに微笑みを浮かべる。クレアはそんな彼女に退避するように促す。

遠目でエリカがアキラの手を引いてサベージから離れるように走っていくのが見えた。

「私のエナジーも残り僅か。これが最後の砲撃になります。これで仕留めきれなかった場合は・・・リデイ」

「わかっております」

バスターキャノンを手をサベージに向けながら確認を取るクレアに、リデイは頷き返してスピアと盾を構え直す。

すると、狙いを定めたサベージが口を開くのが見えた。その口部内にある筒状の砲口から黄色のエナジーが集まり出し、向こうも砲撃の態勢に移った。しかし、その時点でバスターキャノンのエナジー集束率はすでに臨界点を迎えており、いつでも引き金を引ける状態に入っていた。エリカとアキラはすでに射線の外に避難済みな事を確認して



いるので心配する必要はない。

「今頃砲撃するなど……遅いにも程がありますわ!!」

その言葉と共に、クレアは引き金を引いた。圧縮されたエナジーが銃口から開放され、それが先ほど放った砲撃よりも極太の閃光となってサベージに向かっていく。

ワンテンポ遅れて、サベージも砲撃を放ち始めた。黄色のエナジーが緑色の閃光とぶつかり合い、互いに均衡するかのようにならぬままに相殺されていく。しかし、それも一瞬の出来事で徐々に押し始めたのはクレアの砲撃からだった。

発射地点から放ったクレアは力づくで踏ん張りながら、グリップを握る手に力を込めた。それに伴って放出されるエナジーの濃度が増し、巨体を誇るサベージが放つ砲撃を徐々に相殺しながらも削り始めていく。

それがやがてはサベージの口部に届き、大きな爆発を伴いながら緑色の閃光が頭部を丸ごと包み込んでいく。高濃度に圧縮されたエナジーの濁流が敵の核コアを押し潰し、ひび割れながら崩壊していく。

放射が止む頃には、既にサベージはその生命活動を完全に停止していた。核コアも完全に破壊された事が確認され、クレアはリディと共に安堵したように一息付いた。

「サベージの討伐を完了。仲間と民間人の安全も確認……任務、完了致しましたわ」

そんなクレアの宣告と共に、リベリア軍支部から届いたオペレーターからも他区間のサベージが全て討伐されたという知らせが送られた。

リデイと共に安堵した表情を浮かべるクレアはバスターキャノンを粒子に還元しつつ、2人揃って眼下の崩壊した街に飛び降りたのだった。

下に降り立ったクレア達はエリカと合流を果たし——後にリベリア軍が敷いた避難所のテントを借りてアキラと、再開した四宮夫妻に事情聴取を執り行う事となった。

## 勧誘された時はよく考えてから結論すべし

時間は進んでリベリア軍支部の避難所。サベージの討伐が確認されて1時間が経過した頃だ。

俺も先に避難を済ませていた両親とこの場で再会して、今は救護テントの中で応急処置を終えて、今はクレア・ハーヴェイさん率いる選抜隊セレクションズによる事情聴取が執り行われている。聴取対象は勿論俺だ。

ちなみに互いに自己紹介は済ませてある。俺自身彼女らの名前は原作知識で知っていたから特に意味はないんだけど。

「――それで。負傷したりリベリア軍の一部隊とエリカがサベージとの抗戦中に負傷し、エリカに狙いを定めたサベージから逃れる為にあなたは所持していたヴァリアブルス・トーンを使い、ハンドレッドを展開した……そういうことですか?」

「ういっす」

彼女らと別行動になってからの出来事の詳細を事細かに伝え、クレアさんの確認する言葉に頷く俺。それぞれに用意されたパイプ椅子に腰掛けて対峙するように座っている。すると彼女は眉間に寄った皺をほぐすように人差し指と親指で押さえる。彼女の

後ろにはリディ・スタインバーグさんが仕えるように控えていて左手にメモ帳、右手に万年筆と俺の言葉を細かく書き記す。あとで報告書に纏めるつもりで書き綴っているのだろう。

ちなみに俺の後ろで同じく用意されたパイプ椅子に腰掛けるのは両親だ。後ろに居るので詳しくはわからないが、父さんは「どう言えばいいのか解らない」と言いたげにしかめつ面、母さんは多分ニコニコ笑顔をそれぞれに浮かべているに違いない、多分。「全く・・・武芸者<sup>スレイヤー</sup>じゃない民間人がハンドレッドを展開するばかりでなく、あまつさえ戦線に介入するなど言語道断ですわ。結果的にその場にいた全員の命が救われたのは良かったものの、一歩間違えれば被害は甚大なものでした。あなたはそれを判っていらして?」

「返す言葉もありません」

「そう思うのならもつと民間人らしく行動を慎んでくださいませ」

否応ながらも俺が進んでやった事とは言え、事実そうなっていた可能性のほうが高かったのだ。こうやって怒られるのは当然の事だ。今後からは同じ道を踏まぬよう、しっかりと正面から受け入れるしかない。

そんな俺の心境を汲み取ったのか、クレアさんは溜め息を付きつつも、

「ですが、私達の仲間を救ってくれた事には素直に感謝します。今や私達にとってエリ

力は無くしてはならない存在ですから。本当に、心から感謝いたしますわ」

微笑みを浮かべて感謝の意を示してくる彼女に俺は、視線を逸らして頬を掻くしかなかった。頬と耳が熱いのはテントの中が熱すぎるせいだ、そうに違いない。…後ろで両親がにんまりと笑っている顔が視界の隅に映り込む。クツソ殴りてえ・・・！

「そ、そういえば、お姉さんの怪我の具合はどうなんですか？ 不意を突かれたとは言え、結構ダメージも大きかったと思いますけど」

露骨な話題変換で場の空気を変える。これ以上は俺の精神が耐えられない。

「エリカの事なら大丈夫だ。君の話が本当なら確かにダメージは大きかったのだろうが、ヴァリアブルスーツの耐衝撃吸収効果はしっかり機能していたようだし、あの程度なら数日の休養で回復するだろう。医療スタッフからそう判断された。それに君達が出会ったベルグリット・レオンハルト達、スレイヤー武芸者部隊の彼らも同様に、だ。今もエリカがいるテントで診てもらっている頃だろう」

俺の質問に答えてくれたのは、クレアさんの後ろで控えていたりデイさんだ。決して地球連邦軍MSパイロットの方ではない。彼女は安心させるような口調で答えてくれる。

医療スタッフと言うのはリベリア軍所属のチームの事だろう。その人達が言うのだから、本当に大丈夫なのだろう。それにベルグリットさん達も無事だと知らされ、実は

気掛かりだった彼らの安否が確認でき、思わず安堵の息を付く。

「・・・あなたは優しい方なのですわね」

そんな様子の俺を見て気が付いたのか、クレアさんは先ほどよりも柔らかい笑みを浮かべてそう言った。ヤバ、顔に出てたか。気恥ずかしさで再び熱くなる頬を片手で隠しながら、俺は後ろの両親に振り返りながら訊ねた。

「と、ところで父さん母さん！ 何で俺にヴァリアブルストーンなんて渡したのか理由をお尋ねしても宜しいですか!？」

俺がそう尋ねると、2人は揃ってキョトンとした顔を浮かべる。後ろでクレアさんとリデイさんがクスクスと小さく笑う声が聞こえたのは気のせいだ。

「忘れたのか？ 普段から不運に見舞われるお前の為の『御守り』だと。何のための方位除守だと思ってる」

「いやだから、何で御守りの包みにヴァリアブルストーンを入れたのさって話だよ。あれじゃまるで予め用意していたみたいじゃないのさ」

「それは偶然よ。まさかサベージが上陸してくるとは思わなかったし。何よりあなたが武装を展開できたのだからって完全な予想外よ。ね、お父さん」

母さんの言葉に同意を示すように頷く父。まさか・・・本当に偶然なのか？ いや、だとしてもタイミングが良すぎだろ。俺がそう言おうとした時、父さんから予想外の言葉

が発せられた。

「しかし妙だな。そのヴァリアブルストーンは本来武装を展開できない筈なんだが」

「……は？　今なんて？　『武装を展開できない』？」

「ち、ちよつと待つて。どういうことそれ。意味がわからないよ」

「そのままの意味だ。そのヴァリアブルストーンは今までの武芸者スレイヤーにも反応を示さず、エナジーすら検出される事はなかった。それが原因で世界各地の有力な研究所を転々としたものの、原因を究明しようとした科学者の全てが白旗を上げてな」

「それでそのヴァリアブルストーンが最後に行き着いたのが私達の研究室なの。でも結局私達でも原因がわからなくて、誰の手にもわたらないのならいつその事——」

「御守りとして俺に上げようとした？」

「その通り」

馬鹿じゃないの？　もう一度言う。馬鹿じゃないの？　採掘量に限られるほどの貴重品に入るヴァリアブルストーンを個人に渡そうとするなよ。もしかしたら何かの役に立つかもしれないでしょ。いやわからんけども。

「だが結果的に渡して正解だったようだしな」

「そうね。もし持つてなかったら今頃アキラはこの世にいないでしょうからね」

「さりと怖いこと言わないでよ母さん。そりや結果としては持つてて良かったかもしれないけどさ。」

「そんな話を聞いてみるとよくそんなのを展開できたよね、俺って。そうになると、これを武装展開できたのって俺が初めてなんでしょ?」

「そうなるな」

「あれ? でも父さん、このヴァリアブルストーンはありあわせの物から錬成したとか言っでなかった?」

「それはだ、最初に私達の研究室に届いた時、所々欠けていた部分があつてな。もしかしたらそのせいで誰にも反応を示さないんじゃないかと思つて他のヴァリアブルストーンの切粉を加工して繋ぎ合わせたんだ。だが、結果は芳しくなかった」

「つまり結局は誰にも反応しなかった、と。それでお手上げになつたのか。」

「だけどそのヴァリアブルストーン、複数個のヴァリアブルストーンの原子配列を組み込んでいるから、他のヴァリアブルストーンと比べても高いポテンシャルを秘めている筈よ。どう? すごいでしょ?」

「母さんが自慢げに話してくる。そりや凄いだろうけどさ。それつつまり俺が展開できなきや無意味に終わつてたよね?」



何故そんなものを武芸者スレイヤーでもない俺が展開できたのか解らない。ただ、偶然というわけではない事だけは確かだ。何故なら俺にそれほどの”資質”があつた、という一点に尽きるのだから。

流石にそんな事で天狗になるつもりは一ミクロンもないが、かといつてこのまま持つてるだけというのは宝の持ち腐れというものだ。

・・・もし俺が、このヴァリアブルストーンを持ち続けられるのなら、これを使って”何か”の役に立てられるような事をしてみたいな。それこそ、前世でなりたかつた・・・子供の頃からの”将来の夢”というやつに。

『この力で何かを成し遂げたい』・・・そう言いたそうな顔ですわね』

掌のヴァリアブルストーンを見つめながら思い耽つていた所に、まるで俺の心情を読み取つたかのような言葉が届く。俺はそちらへ顔を向ける。そこに俺の顔を真っ直ぐ見つめながら、真剣な表情を浮かべるクレアさんがいた。

「失礼、唐突過ぎましたわね。何しろあなたの表情がそう物語つていたので、つい」

本当に唐突だったので一瞬呆けてしまった。すぐに持ち直した俺はなぜそんな事を言ったのか訊ねてみる事にした。

「なんでそう思うんですか？」

「これでも武芸者スレイヤーを統率している身です。とは言つても殆ど見習いが大半ですが。人がその時、何を考えているかは面持ち次第で大体の心理は読み取れますわ。．．．．．一部は全く読み取れないこともありますけれど」

何そのリアル心理学。しかし流石はリトルガーデン艦長様だな。恐れ入る。

「今のあなたからは、その”力”を何かの為に役立てたい．．．．．大半の武芸者スレイヤーが抱く志と変わらない気持ちを持つている筈ですわ。違わなくて？」

そう言われると．．．違わくない．．．のかな？ アレ？ 何で俺一瞬迷ったんだろ？

「もしそうであるならば、一つ、あなたに提案がありますわ」

「提案？」

俺が反復すると、彼女は口元に小さく笑みを浮かべてその”提案”というものを口にした。

「私達の学園——リトルガーデンに来ませんか？」

その提案というのは所謂「勧誘」というやつだった。

「俺が・・・リトルガーデンに・・・？」

「ええ。先の抗戦の経緯を聞いてみる限り、あなたからは武芸者<sup>スレイヤー</sup>足り得る資質がある事を示しました。私としてはその資質を見過ぎす事は出来ません。先ほどはああ言いましたが、正直に申し上げるとその資質を正しい道に使って頂きたいというのが本音です。何よりも・・・」

「『何より』？」

「あなたの力はきつと、何か大きな出来事に対処できるような力がある——そう感じたのですわ」

直感めいていていまいち信用できなさそうな言葉だが、彼女の目からは真剣さがありありと伝わってきて、本気で言っているのだと理解できた。

しかし、そんな力が俺にあるのかと言われても実感が湧かない。クレアさん自身もそう感じただけで確信はないんだろうが、当事者としてはもつとはつきりしないものだ。ぶつちやけ俺は逃げてばかりだったからその分余計に、ね。

「これはあくまで提案です。それを決めるのはあなた自身ですから、ゆっくりお考え下さいな」

そう言つて彼女はおもむろに立ち上がり、リデイさんを伴つてテントから出て行くところとする。

「何処に行くんですか？」

「リトルガーデンに帰還するのです。そろそろエリカの治療も終わつてゐる頃でしょうから。それにあまり長居してリトルガーデンを不在にするわけにもいきませんのでその準備を。答えはまた後日で結構——良い返事を期待していますわ」

そう言い残して、彼女らは今度こそテントから出て行つてしまつた。あとに取り残されたのは、未だに答えを見いだせずにいる俺と、静かに静聴していた俺の両親だ。

「中々強引なお人でしたね」

「そうだな。．．．それで、お前はどうかしたいんだ？」

おもむろに母さんと父さんが口を開く。どうしたいって言われてもな。こればかりはよく考えないと。もしかしたら俺の人生にも左右する事柄だからな。今は頭も体もゆつくり休めて、また後日．．．て、俺あの人達の連絡先とか知らねえよ。父さんと母さんも顔合わせは今日が初めてな様子だったし、今のうちに追いかけて連絡先を聞いとかねえと。

「ごめん、ちよつと用事思い出したからまた後で。父さんと母さんは先に旅先のホテルに帰つてて。行つてくる！」

父さんへの答えを置き去りに、俺はすぐにテントを出て後を追いつめる。後ろから父さんと母さんの「行ってらっしゃい」なんて間の抜けて言葉にどこか安心感を覚えるのはこの際放つておいても大丈夫だろう、うん。

「全く・・・答えはとっくに出ているだろうに。それに中々気付かないのがアキラの短所だな」

「ですね。勧誘の話が出てきた時点であの子がどんな顔をしていたのか教えてやりたいくらいだわ」

「まあ、それでも後で気付いて自分なりに正すのがあいつの良い所でもある。私達は温かく見守るとしよう」

「そうですね。」いつもの事「ですから、ね」

避難所には無数のテントが張られている他に、軍の武芸者スレイヤーや負傷者を輸送する為の仮設ヘリポートが設けられていて、俺は迷わずそちらに向けて走っていた。ちなみに俺達が入ったテントはその仮設ヘリポートと背中合わせに面した位置にあつて、すぐにヘリポートの敷地内に入る事ができた。同時に、目的の人達の姿も確認できた。

「ち、ちよつと待つて」

下さいと言いかけた所を、視界の隅に捉えた人物の姿を確認した事で止めた。

「あなたは・・・先の民間人の少年ですか」

「お、お姉さん？」

俺達がここに着いて早々リベリア軍の医療スタッフに連れていかれた、エリカ・キャンドルその人だった。

頭や腕に包帯を巻いて、先ほどまで俺達を守ってくれていた事に感謝の意識が芽生えると同時に、彼女にそんな怪我を負わせてしまった自分に対して行き場のない憤りを感じてしまう。

それを表に出す事もなく、俺は自然な口調でエリカさんに話しかける。

「怪我の具合はどうですか？」

「問題ありません。医師からは数日の休養で快調するだろうと診断されました。心配をかけたみたいですね」

手をぐっつぽと握りながら体に不調がない事を示すエリカさん。額から一滴の小さな雫が流れているのを見てそれが強がりだとわかり、俺は憤りに加えて彼女に対して何も出来なかった自身の不甲斐無さに更に憤りを募らせる。

「そう・・・ですか」

「?」 どうかさされたのですか?」

今度は心配そうな表情で窺ってくるエリカさんから目をそらしつつ、俺は「なんでもないです」と返した。嗚呼、何やってんだか俺は。助けてくれた恩人の一人にこんな態度は無いだろうに。

「そうですねか・・・ああ、そういえば伝え忘れていたことがあります」

「?」

すると彼女は俺と正面から向き合いながら、柔らかい笑みを浮かべた。

「!」

「今日は危ない所を助けていただき、ありがとうございます。あの時、あなたがいてくれなかったら私はどうなっていたか・・・それに、あなたを囿役にしておいてこう言うのは可笑しい話ですが、助けられた一人としてこれだけは言わせてください——」



「あなたが傍にいてくれて、本当に助かりました。心から感謝致します」

彼女の口から紡がれる感謝の言葉。眩いばかりの笑顔と共に向けられた俺は、気恥ずかしさと照れ隠しで顔ごと明後日の方向へ逸らしてしまう。何故か目にフィルタらしきものが掛かってとてつもなく可愛く見えてしまうのは気のせいか。

それにしてもこの人ってここまで素直に感謝示す人だったっけ？ 確か原作では主人公に対してかなりつんけん……というか辛辣な態度を取っていた印象なんですけど。何で会って一日も経たない初対面の相手にこんなに眩しい笑顔を向けてくるの？ 何でこんな可愛く見えてしまうの？ 実はこれが全部夢で、現実では俺は負傷して長い夢を見ていた、なんてオチだと言われても疑う事無く信じられるぞ。

「今返せるのは感謝の言葉くらいしかありませんが、私に出来る事があれば喜んで協力する所存です。何かあればご一報を。相談事でも何でもよろしいですよ！」

握り拳を作りながら言うエリカさんだが、少し積極的過ぎる気がしないでもない。ちよつと俺の中の原作キャラ崩壊が現在進行形で進んでるんですががが。

「そ、それはどうも。それよりも、お姉さんはどうしてこっちに？ あの人達はリトルガーデンに戻る準備をしに戻っていきましたけど」

「ああ、クレア様達が戻ると連絡が入りましたので、私もその準備の為に。あなたは？」  
そうだった。あの人達に連絡先を聞くのを忘れていた。

「実はですね」

俺は手短かに先の勧誘の事を話した。最初こそ吃驚していた様子だったけど、話を聞くうちに次第に納得したような領きを返しつつ、話を聞き終えた時には苦笑を浮かべていた。

「なるほど、クレア様の御眼鏡にかなったという訳ですか」

「かなったかどうかは知りませんが、返事するにしても向こうの連絡先を知っておかなくちゃと思って、今からそれを聞こうと」

「それでしたら、少々お待ちください」

俺の目的を聞いたエリカさんは胸ポケットから手帳を取り出し、適当に開いたページに万年筆で何かを書き出していく。十秒も満たないで書き終えたとおもむろにそのページを破り取り、それを俺に差し出してくる。

「こちらにリトルガーデン生徒会への直通番号を書いています。答えが決まればこちらへ直接ご連絡を」

え、そんな簡単に教えちゃって大丈夫なの？ 生徒会と言えればリトルガーデンの中心部に相当する筈だけど・・・まあ、教えるという事は、俺が相手でも問題ないと思われ

てるんだろうな。これは大人しく貰っておこう。

「それではこれにて失礼いたします。私からも良い返事を期待していますね」

「ち、ちよつと待つてくださいい！」

笑顔でそう言つて、再び歩き出そうとした彼女を俺は呼び止める。

「なんででしょう？」

「さ、さつきから不安に思つていたんですけど・・・本当に、俺なんかリトルガーデンに行つても良いんですかね？」

「?」 どういう意味ですか？」

俺の発言に振り返りながら訊ね返してくるエリカさん。俺はここに辿り着くまでの間隠していた事を、包み隠さず吐露する事にする。

実のところ、俺には不安があった。数時間前にサベージと遭遇したばかりの時、俺は”怖かった”。生まれて初めて、俺の中で恐怖の感情が芽生えた瞬間だったが、あの時は父さんと母さんに連れられて走った事もあつて直ぐに落ち着きを取り戻した。その後はまあ、普段通りでいられたが、もし今度こそサベージに遭うとなると・・・やっぱり、不安が込み上げてくる。

「サベージと向かい合つてる間、俺は冷静で居られましたけど・・・正直に言えば、怖いんですよね。何せサベージを直接目にしたのは今回が初めてですし、それと遭遇した途

端、俺は恐怖で一瞬だけ体が動けませんでした」

「……………」

「今度サベージに会えば、俺は今度こそ動けなくなる……そんな予感がするんです。そんな俺が、リトルガーデンに行っても意味が無いんじゃないかと思ひまして……」

生前あんな怪物と遭遇した経験なんてないし……あつても困るけど……逃げてる最中は俺自身落ちていて行動できていたけども、次にそういう場面に出くわすと、正直冷静でいられるかわからない。直接目にしてはいないとは言え、サベージによつて人が死ぬ直前の様子を見ていた事も加えて尚更だ。

そんな心配事を胸の奥底で考えていると、エリカさんはそんな俺の心中を知つてか知らずか、下に俯きつつある俺の前まで歩み寄つてきて——俺の頬に手を添えた。

「ツ……！」

「その気持ちは分かります。あなただけに限らず、全ての武芸者スレイヤーが最初に抱く感情です。人は危機的状況に陥つてしまえば、誰だつて恐怖心を抱くものです」

「私だつて最初はそうになりました」と、昔を懐かしむような様子でエリカさんは言葉を続けていく。

「ですがその時、私には自分を奮い立たせるモノがありました。それが何か、分かりますか？」

彼女の言葉にピンと来るものが無くて、言葉の代わりに首を横に振る。そんな返答を予想していたのか、エリカさんは微笑みを浮かべつつ答える。

「私には、いつまでもお傍で仕えたい御人がおります。その方の為なら、私はどんな困難にも立ち向かえます。初めてサベージと対峙した時に抱いた恐怖を、それで乗り越えしました。ハンドレッドがその気持ちに伝えてくれて、私に恐怖を乗り越える“勇気”を与えてくれたんです」

勇気——それは、どんな絶望的な時でも心を奮い立たせる魔法の言葉。自らが宿す気持を力に変えて、困難に立ち向かえる力を与えてくれる。

「私が恐怖を乗り越える事ができたのは、ハンドレッドが勇気を与えてくれたからなんです。あなただつてそう……私を助けに来てくれた時の勇気にハンドレッドが応えてくれた——」

「だから大丈夫。あなたの中にある勇気はサベージを相手に決して挫ける事はない筈です。私達の命を救ってくれた自分に自信を持つてください。あなたならきっと、その恐怖心を乗り越えられる筈ですから」

真正面から励ましの言葉を受け、俺の中にふつふつと熱い何か湧き上がってきた。俺はそれが何なのか、自然と頭の中で理解していく。

全身を駆け巡る熱く滾る何か——それは紛れもない「熱意」の感情そのものだ。先程まで抱いていた不安が今では嘘のように無くなっていて、逆に何かに打ち込みたいという衝動に突き動かされ始めていた。

「どうかされましたか？」

突然黙り込んだ俺を心配したのか、エリカさんは顔を覗き込みながら言葉を掛けてくる。

先程まで俺を励ましてくれていた様子は何処へやら、今はそんな様子は微塵も感じられなかった。俺を安心させるように小さく笑みを浮かべながら「大丈夫です」と短く答え、俺の頬に添えていた手をゆっくりと離しながら彼女の横を通り抜ける。

「あれ、どちらへ行かれるのですか？」

「さっきの勧誘に応えてきます」

俺の返答を聞いたエリカさんが「ええっ!？」と驚きの声を上げると、タツタと後ろに近づいて言葉を続ける。

「待つてください！ 先程も言った通り返事はまた後日でいいと」

「いいえ、今決めました。ですので今から返事しても問題ないでしょう」

「そ、それではさつき渡した連絡先が無駄に」

「その事に関しては申し訳なく思っています。ですけど、今を逃したら俺は後悔すると思わんです」

「後悔……ですか？」

俺はこの胸の奥からこみあげてくる熱意を、今あるうちに今後に示しておきたい。でないとならば冷めてしまうとと思ったから。ならば今のうちにやれる事はやっておこう。その為にも向かうは一カ所、クレアさん達が乗ってきたヘリが待機する場所だ。さつきまで向かっていた方向へ進路を向けて、数機もある軍用ヘリの群れの中で一機だけ、他の機体とは違うヘリを見つける。

その機体の胴体部にはリベリア軍のとは別物のエンブレムが塗装されていて、それに綴られている文字を見てリトルガーデンの物だとすぐに理解する。俺は迷わずその機体に向けて歩を進めていく。

「あら、エリカ……と、先程の。どうか致しましたか？ 何かご用でも？」

ヘリの外で待機していたクレアさんが俺達の姿を確認すると真っ先に俺に話しかけてくる。外にいたのは恐らくエリカさんを待っていたからだろう。という事は今は見えないリデイさんはヘリの中か。

「先程の考えが纏まったので、その返答に來ました」

「返答に？ それはそれは・・・で、どういう結論にお達しで？」

一瞬驚いた表情を見せるとそれは直ぐに潜め、代わりに興味があると言いたげな表情で俺に問うも、その声色は真剣味がありありで、まるで俺を値踏みしているかのように聞こえなくもない。実際そうなんだろうけど。

「俺は・・・出来るならこの力を」何かの為に使いたいです」

「何かとは曖昧ですわね。もっと具体的な言葉をお選びなさい」

俺の言葉に語気を強くして訂正を促してくるクレアさん。尤もな意見だね。

「俺は昔から、」他人を助けられる人間になりたい」と思ってきました。所謂「正義の味方」ってやつに強い憧れを持ってまして・・・だから、俺に武芸者としての資質があるのなら、その資質を使って武芸者として、この力を誰かの為に使いたい、そう思っただです」

俺の紡いでいく言葉に、クレアさんは黙って静聴している。俺の話を遮らないという事は、まだ喋ってもいいという証拠だろう。

「資質があつても、俺にはきつと才能は無いでしょう・・・ですけど、俺にはなりたいたい目標があるんです。俺に武芸者としての資質があつたのは、きつと偶然なんかじゃない。何かしらの意味がある筈なんです。なら俺は、この力を使って人を、誰かを助けられる



人間になっていきたい」

「——その人達の笑顔を、守りたいから・・・です」

先程のエリカさんが笑ってくれた姿を見て、俺が率直に抱いた気持ちだ。小さい頃から抱き続けてきた将来の夢。人を守る事でその人の、ひいては周りの笑顔を守れる、”人を助けられる人間になる”。それが俺にとつての、なりたい俺自身だ。

例えば誰かに馬鹿にされても、これだけは諦めはしなかった。だってそれが俺にとつての、嘘偽りのない目標なのだから。

「・・・なるほど」

クレアさんが不意に呟く。声は真剣そのもので、しかしその表情には若干の笑みが浮かべられているのが見て取れる。

「了解致しましたわ。既に入試試験は終了していますが、あなたの意思を汲んで特別に個別の試験を設けます」

「それって・・・」と俺が最後まで言葉を発する前に、クレアさんは「ただし」と念を押すように区切る。

「まずは中学を卒業してからですわ。リトルガーデンは武芸者スレイヤーの育成を目的としてはい

るものの、高等課程に相当します。流石に今すぐとはいかないので、まずはあなたが中学を卒業してからが本番、という事になります」

あー……言われてみればそうだった。リトルガーデンはあくまで武芸者育成のための高校。専門の知識を身に付ける以外にも普通の高校で受けるような一般授業もある。そんな学園である故に試験も当然あり、その為の準備期間もなくてはならない。現に今はサベージ襲撃の直後だ。試験までには相応の時間が必要になる。

「それもそうですね。それじゃあまずは帰って卒業を目指します」

相槌を打ちつつ俺はクレアさんの言葉に同意を示す。なに、卒業までにはそれなりに時間がある。それまでには武芸者としての教養を深めれば良い。幸いにもツテはある。 ”あの子” が受け入れてくれれば、の話ではあるが。

「ええ。日程が決まり次第、後日改めてお伝えしますわ。それまでに武芸者について、認識を深めておきなさい」

つまり試験勉強ですね、わかります。

「クレア様。離陸の準備が整いました」

そこでヘリの中からリデイさんが姿を現し、クレアさんにそう報告した。俺を一瞬だけ一瞥したが、それだけで特に話しかけてくるなんて事はなかった。

「了解しましたわ。それでは私達はこれにて失礼致します。エリカ、行きますわよ」

「あ、はい！．．．それでは私もこれで失礼させていただきます。それから．．．試験、頑張ってください」

「ええ、頑張らせていただきます」

俺がそう返して、エリカさんは微かに微笑みを浮かべる。すぐに傍を離れるとヘリの中へ駆けて行き、ハッチが閉じられていく。

ヘリのローターが回転を始めると、俺は少し離れた位置に下がりゆっくりと上昇していくヘリを見詰める。

胴体部の窓からこちらの方向を覗いてきたエリカさんと目が合い、俺は彼女に向けて手を振った。すると彼女のほうも手を振り返してくれる。

地上から足を離れたヘリはやがて数十メートルほどの高さにまで上昇すると、ゆっくりと前進して飛んでいった。

「行ったか」

「行っちゃいましたね」

「!？」

突然後ろから掛けられた声に驚き、そちらへ振り返る。そこにはいつの間にか父さんと母さんが立っていて、エリカさん達を乗せたヘリが飛び去っていった方向へ顔が向いていた。

「い、いつからいたの?」

「『先程の考えが纏まったので』の所からだな」

「ほぼ最初からじゃん!! 来たのなら声くらいかけてよ!」

「アキラがあんなに熱弁していたんじゃ出るに出られなかったのよ。ね、お父さん?」

「あのアキラがあそこまでの決意を胸に秘めていたとは：：今まで思う事はなかったが、正直に言つて見直したぞ。お前が他人の為にありたいと言つたのは。親として鼻が高いな」

あ? あああああつ!!! 恥ずかしい! めっさ恥つずかしい!! さっきまでのやり取りが見られてたのもそうだけど、俺の発言自体が聞かれていたのが何よりもキツイ!

さて。ここからは少し時間を飛ばそう。

あの後、俺達家族はヤマトへ帰国しようとしたのだが、件のサベージのせいで空港に

影響が出て、乗る筈だった便が遅れに遅れた。飛び立ったのは夜の10時頃で、ヤマトに着いたのはおよそ朝の10時過ぎになってしまった。フライト時間が遅れた時点で翌日の学校は午前中は休めるよう予め学校へ連絡を入れていた。午後からの授業には参加しなくてはならない。この時はぶつちやけ眠気がヤバくて、午後は結局居眠りをしてしまった。担任に叩き起こされた。

更に数日後。自宅にリトルガーデンから一通の封筒が届いた。中身を確認すると、「リトルガーデン・武芸科入学試験のご案内」とヤマトの言語で複数の書類が同封されていた。これが届いたという事は、どうやら準備が整ったという事だろう。

書類によると、ヴァリアブルストーンを用いた反応数値を測定する一次試験。次に身体検査と体力測定・知力測定の二次試験。最後に面接を行う三次試験についてと、それらが中学の卒業式から数日後に行われることが明記されていた。器官は二日間。一日目に一次と二次試験を執り行い、二日目に三次試験を行う段取りとなっている。場所はヤマト国内のリベリア軍支部にて行われるらしい。最終的な結果報告は後日自宅へ郵送で送られるとのことだ。・・・こう言うのもなんだけど、態々俺なんかの為に試験を設けてくれたクレアさん達には多大なるご迷惑をおかけしましたと同時に感謝の意を抱かざるを得ないな。これでもし合格したら、しっかりと恩返ししたい所存です。

二次の試験内容のうちの一つである知力測定と三次試験の面接以外はどうとでもなるな。しかし、一番の課題は知力だ。俺は言うほど頭が良くない。逆に悪いとも言えないが。これは本格的にフランソワ王国にいる”あの子”に教わるしかないかなあ……後が怖い。近いうち何かしらの要求があるかも。俺ができる範囲内であればいいんだけど。

そしてリベリアから帰ってきて一週間が経過した平日。俺は中学の卒業式を迎えた。あれから学校の通常授業の傍ら、武芸者スレイヤーについて色々”あの子”に教わりながらも日々を過ごした。この一週間で面倒だったのが元々進学する筈だった高校への進学取り消しとか、学校中で広まった俺がリトルガーデンの試験を受ける話とかだったが、まあ時間の流れは早いものでそれも直ぐに収まった。

これからは片手でかぞえるほどしかない友人達との交流も減ってしまうが、こういう事は誰にでもある事だろう。元々その友人達とは別々の所に進学する予定だったからさして問題なかった。せいぜい「マジかー」とか「試験頑張れよー」とかの言葉を貰ったくらいだ。その時は適当に返事しておいた。

さて。そんなこんなでリトルガーデンへの進学試験を迎えた俺は、午前中に執り行われる知力測定にだけは直前まで入念にとりかかった。事前に「あの子」に教わって入念な復習を繰り返していたとはいえ、まだまだ力不足感が否めなかったのは事実だ。ちなみに一次試験と体力測定は無問題。俺にとつちや体を動かす事は日常茶飯事なんですね。運動神経には大分自信があったし。面接の三次試験もこれと言って大きな失敗もなく、無事に通過したと自信を持って言える。

兎も角として、俺は全ての試験を終え帰宅した。帰ると珍しい事に普段は多忙で家を空けることの多かった父さんと母さんがいて、試験を受けに行った俺へのお祝いor慰めパーティーなるものを開催した。まだ合否通知も来てないのに先にやるのは縁起が悪い気がしたが、まあ基本的にマイペースなのが我が家の長所だ。ここは変に気負わずパーティーを楽しむとしよう。この時、母さんが買ってきてくれたチョコミントケーキなるものが俺の脳的な部分に電撃を与え、両親の分まで食った。翌日腹を下した。若干ミントっぽい色のした何かが出てきたが、すぐに調子は戻った。

その更に数日後、通知が届いた。

封を開けてみると、一枚の紙切れに——「合格」の二文字が掛かっていた。俺のりトルガーデンへの進学が決まった瞬間である。



## 第一章

## 入学したての決闘宣言はラノベ特有の恒例行事

4月の某日。天気は快晴。本日は陽の当たる所が多く、洗濯物を干すのには丁度良いお天気となるでしょう——はい、そんな雲一つない空を飛ぶ小型飛行機の中から窓の外を眺める俺、四宮アキラは現在リトルガーデンに向かつております。

試験の数日後から昨日の夜まではフランソワ王国のとある場所に御厄介になつていて、個人的な知り合いである「友人の少女」のご厚意で自家用ジェット機でリトルガーデンまで送ってもらっている所なのである。今この場にその知り合いはいない。一庶民な俺とは違い、立場的な意味であまり外出が許されない彼女は空港まで見送つてくれたきりだ。

何故国外にまで出向いたのかと言うと、その知り合いが現役の武芸者スレイヤーであり、武芸者としての能力を高めるのなら教官役として最適な人物は彼女しかいないと言う訳で、俺は無理を言つて彼女に協力を申し出た。当の本人はと言うと、快く承諾してくれた。期間は短かったが、それでもセンスエナジーの扱い方が多少分かつただけでも助かつたというもの。近いうち何かお返ししないとな。

さて。そんな短い修業期間を経て多少は戦えるようになった俺ではあるが、何も俺一人だけでヤマトを出たわけではない。

「アキラ。間もなくリトルガーデンが見えてくるそうさ」

「あの都市艦の建造には私達も多少は携わってるんだから、よおくその眼に焼き付けておきなさい」

父さんと母さんも、俺と共にフランソワ王国まで付いてきたのである。

付いてきた、とは言うものの、流石に一日中一緒と言う訳ではなかった。二人は国内近隣に支部を置いたりベリア軍の研究室に入り浸り、“俺のヴァリアブルストーン”を調整してくれていたのだ。

前回のリベリアでの一件、俺が展開したハンドレッドは所々歪な針のようなものが飛び出た不完全な形状だった。両親曰く「様々な原子配列が入り乱れてそのような状態になった」らしい。

そんな状態のせいか、普通のヴァリアブルストーンと比較しても高いポテンシャルを引き出せる分、入念な調整が必須だと言う。それも数日に一回と言う頻度で。この話を聞かされた時、内心でもうちよつと頑張つてよと思いはしたが、そんな事を俺が知る由も無かったので文句なぞ言える筈もなかった。

父さんと母さんが付いてきたのは、主にそれが理由の大部分を占めている。態々軍の

研究室を借りたのも、俺のヴァリアブルストーンを調整する為なのだった。  
閑話休題。

そういう事もあって、俺達家族は揃ってリトルガーデンに向かう。

今日は入学式。記念すべき高校デビューだ。・・・転生したとは言え二度目の高校デビューとか複雑な気分だな。

「アキラ」

「ん？」

「見えてきたぞ」

父さんに促され、俺は窓の外へ身を乗り出すようにして覗き込む。

「あれが・・・」

眼下に広がる大海原を悠々と進む一隻の巨大な艦艇。父さん曰く、全長四平方キロメートル以上はある超巨大な胴体の上に、俺が入学する学園を含めた一つの都市を備えていると言う。

無論、この世界を知っている転生者の俺がそれを知らない筈はないのだが、両親はそんな事は知る由もないので知らない体で貫いている。

しかし、原作知識で予め知っていたとはいえ、実物を見るのは初めてだ。率直な感想を述べるなら「デカイ」としか言いようがない。これほどのものの建造に携わっていた

と言う父さんと母さんも、相当な人達だと思ひ知らされる。

「どうだ。あれがワルスラーン社主導で建造した学園都市艦、リトルガーデンだ」

「あそこにうちの子が通うようになるとはね、人生何が起きるかかわからないものね」

それは俺も同じだ。まさかこの間の一件で、ここに通えることになるなんて、俺自身夢にも思わなかったんだから。

「そろそろ着陸態勢だ。シートに座れ」

窓の外をじつと見つめていた俺は父さんにそう促され、急いで窓際の座席に座り直り、シートベルトを締める。それからすぐにジェット機は下降を始め、眼下の滑走路に向かつていった。

滑走路に着陸したジェット機から降りた俺達は、着いて間もなく飛び去っていくジェット機を見送った後、手荷物検査や諸々の手続きを終わらせ、空港の外へ出た。

「おー！」

空港の出入り口を抜けた先には、俺の良く知る街並が広がっていた。

普通の街と違わない風景に加え、街の中を歩く人々は活気に溢れている。

座敷茶屋や寺などの和の伝統が今も色濃く残るヤマトと違い、リトルガーデンの街並

みはこの間行ったりベリアとあまり変わらない風景が広がっている。

普通の人なら見慣れない光景で多少困惑するだろうが、転生者の俺からしたら懐かしさが勝って感慨深くなってしまふ。

「さて、着いて早々悪いんだが、アキラ。お前は一人で寮まで行きなさい」

父さんの言葉がここからは一人で行けと促してくる。そんな父さんの言葉に補足を付けるのは母さんだ。

「私達はこれから少し用事で行くところがあるの。入学式には参列できると思うから先に行っておいて」

それじゃここからは別行動か。それは別に構わないんだけど、二人が言う「行くところ」というのがちよつと気になるな。まあ、ちよつとと言うだけで特段問うつもりはないのだけれど。

「分かった。それじゃあここからは別行動だね。ちゃんと入学式には間に合つてよ？」

俺の言葉に二人はそれぞれ頷きつつ、俺は荷物を詰めたバッグを背負い直し寮のある方向へ、父さんと母さんは俺とは別の方角へと分かれた。

二人はこのリトルガーデンの建造にも関わってるから、何処に何があるのかの地理も見当が付いてるんだな。まあそれで俺が二人のように何処に何があるのかなんて知ってる訳でもないんだけどね。

とりあえず、俺は空港の受付嬢から受け取ったリトルガーデンの地図を頼りに、「武芸科・男子寮」と書かれた地点を目指した。

たどり着いた先は、二階建ての白い洋風の建物だった。

空港の受付嬢の話によると、その周辺には他の建物は無く白い外観が特徴と言っていたのでここだと確信できた。ちなみに建物の前に「リトルガーデン武芸科・男子寮」と看板が立て掛けられてあったので更に一押しだ。

建物の扉を開き、玄関を通ってロビーに入る。

「ほー、中々に綺麗だな」

寮の内部は外観通りの白で統一され、ロビーには大きなソファやテーブルが幾つか設けられている。生徒同士での交流の為の備品であることは直ぐに分かった。

ただ一つ気になる事と言えば・・・

「何で誰も居ないんだよ」

まあ、それも今日が入学式だからという事だろう。この時間帯だと、殆どの生徒がもう会場に向かっている頃合いだ。他の誰とも会わないってのは少しばかり寂しいけれど。

しかし、そんな俺の落胆は直ぐに裏切られることになった。

「ハヤトっ!？」

二階廊下の手すりから身を乗り出して姿を見せたのは、男子生徒用の制服を身に纏った一人の生徒だった。

顔立ちは幼さの残る中世的な顔立ちで、肌は白く制服の上から見ても体は華奢なように見える……って。ここに来て初の遭遇一番手は”こいつ”か。

「って……なんだ、違う人じゃん……」

俺の姿を認識するなり、落胆した様子で乗り出した手すりに項垂れる彼(?)。

こいつ……出会い頭に失礼だな。まあ、特段気にするほどでもないからいいけど。

「違う人で悪かったな。とりあえず姿勢を正した方がいいんじゃないか? そのままだと落ちるぞ」

見ていてハラハラしてくるからな。頼むからさっさと姿勢を正してくれ。

「あ、ごめんごめん。さすがに失礼だったね、誤るよ」

「そう言つて手すりから身を乗り上げた彼は苦笑を浮かべながら階段を駆け下りて俺の前に立つ。」

背は俺の方が高いが、頭一つ分と半分程度で大した身長差はない。俺が少し見下ろす程度だ。しかし、改めて見ると中世的な顔立ちが余計に女の子らしく見える・・・いや、まあ、転生者の俺からしたら彼(?)の正体は既に分かり切つてるんだけどね。

「始めまして、僕はエミール・クロスフォード。君と同じ新入生だよ、よろしくー」  
「こいつこそが原作キャラの一人にしてメインヒロイン——エミール・クロスフォード。」

今は男装で偽名を使っているが、これでも歴とした女性だ。男装しているのには訳がある。今では具体的な事は離さないでおく。まあそんな事を初対面の俺が知る筈もないので、彼(女)から教えてくれるまでは知らない体で行くが。

「始めまして、俺は四宮アキラだ。よろしく、クロスフォード」

「こちらこそ。ねえねえ、どうせなら僕の事は『エミール』って呼んでよ。僕も君の事は『アキラ』って呼ぶからさ」

マジでか。初対面で名前呼びとかハードル高過ぎね? 中一からの腐れ縁である数少ない友人達でさえ未だに名字呼びなんだけど。ここは頑張るしかないか。



ん？ 前回まで生徒会三人の事は内心で名前を呼んでたじゃないかって？ あの三人は原作キャラの中でも特に好きなキャラクターだったんだから自然とそうなるさ。エミールは正直普通だ。

ちなみにどうでもいい事だが、前世で名前を呼び合っていた友人などいなかった…と、思う。多分。

「・・・わかった。エミールだな。これからよろしく」

「うん！ よろしくね、アキラ」

明るい笑顔を向けてくるが、正体を知ってる時点であまりときめかないんだよなあ。仮にエミール目当てで転生した人間が猛烈にアタックしても振り向かない可能性100%だもの。いや、それだけを目当てに転生してくるヤツなんてまずいないだろうけど。

「お、早速打ち解けてるみたいだな」

エミールとは別に、別人の男子生徒が俺達に声を掛けながら階段から降りてくる。

俺よりも頭一つ分は背が高く、短めの金髪で爽やかなイケメンフェイスを張り付けた好青年がやってきた。イケメン張つ倒したい（願望）。

「フリッツ」。彼も新入生だよ」

「見ればわかるさ。俺はフリッツ・グランツだ。一年の中でこの寮に最初に入ったって

事で仮リーダーをさせてもらってる。これからよろしくな」

そう言つて青年——フリッツ・グランツは手を差し伸べてくる。所謂握手を求めてきた。

「四宮アキラだ。よろしく、グランツ」

「おっと、そこは『フリッツ』と呼んでくれ。エミールだけ名前呼びなんて不公平だと思わないか、”アキラ”？」

むう・・・それを言われると痛い。てかナチュラルに名前呼びかよ。・・・まあ、これから色んな人と会うかもしれないだし、練習とでも思えばいいか。

「わかったよ、”フリッツ”」

「そうこなくちやな」

俺の名前呼びに満足したのか、フリッツははにかむ様にしながらウインクを飛ばしてくる。この固く交わしたフリッツの右手を握り潰したらダメですか？ ダメ？ ですよね。

「さて。自己紹介が済んだ所で、俺はリーダーとして寮内を案内する役目がある。まずはお前の部屋からだ。付いてきな」

「おう」

寮の部屋は二人で一部屋を共有する事になっている。基本的に同室になった相手と

は初対面な形になるが、まあ出会い頭に失礼が無ければ後々面倒な事にはならないだろう。さて、俺の部屋・・・もとい、誰と同室になるのかなつと。

俺に充てられた部屋は二階の一角にある。フリッツがPDA——リトルガーデンにおける学生証兼通行証のような物で、携帯電話や財布としての機能を併せ持つ。俺も先程の空港で支給された——を扉のドアノブ上部にある小さな正方形液晶パネルにかざすと、ピツ、という電子音が鳴り、扉が開いた。

「ここが今日からお前が暮らす事になる部屋だ」

そう言って俺を招き入れ、洋風のお洒落な様相をした室内が視界に飛び込んでくる。室内は中々に広く、2人分が使うには丁度良い広さと思つてもいいくらいだった。ベッドも椅子もテーブルもそれぞれ二つずつあり、共有スペースとしては申し分ない。

「へー、ロビーのほうでも思つたけど、部屋も中々だな」

「だろ？ あ、窓際のベッドは俺が使わせてもらおうからな」

はいはい・・・ん？ 今『俺が使わせてもらおう』つて言った？

「え・・・え、ちよ、なに？ 相部屋、君となの？」

「そうだぞ。言つてなかつたっけ？」

「今初めて聞いたぞ」

あー、そういえばそうだな！じゃねえよ。そういうことは先に言えよ。てつきりもつ

と別の奴と相部屋になるのかと思つてたわ。まあその分変に気を遣う必要がなくなつたからいいんだけど。

「部屋の次は、そうだな」

「ちよつと待つた。まずは制服に着替えさせてほしい。このままじゃ入学式に出られないからな。今のうちにいつでも出られるようにしておきたいんだ」

唸るフリッツを手で制しながら俺が言う。何せ昨日から私服姿だ。予め送られてきた制服を持つてきているから、今のうちに着替えておかないとまずい。

「おつと、そういやそうだな。それじゃロビーのほうで待つてるからな」

「ああ。悪いな」

気にするなど背で語るフリッツを見送り、扉が閉まるのを確認すると背負つていた鞆を壁際のベッドの上に置き、ファスナーを開けて中に仕舞つていた武芸科の男子用制服に手を掛ける。

制服に着替えると、俺は支給されたばかりの真新しいPDAを胸ポケットに仕舞いつつ、部屋を出る。

ガチャリツ、という電子音で施錠を掛けた事を確認してから、着慣れない制服に違和

感を覚えつつもロビーに向かう。

すると、ロビー側の方向から二、三人ほどの声を俺の耳は捉えた。

「——ッ！」

「——？」

「……やけに騒がしいな。他の新生者が来たのか？」

今でも捉え続ける声の中にはエミールの他、フリッツのものまで含まれている。この流れで行くとあとの一人は……あ！もしかして！

三人目の声が誰なのか。俺は大体の見当を付けて、軽めの駆け足でロビーに向かう。

ロビーに降りる階段の上に立つと同時に、フリッツ達がいるであろう方向に目を向ける。そこにはつい先ほど見知ったばかりの二人ともう一人、この世界にとつては初めて目にする顔だが、前世の記憶がある俺にとつてはとても見慣れた人物がそこに立っていた。……いや、より厳密に言えば、前世で読んでいた原作の中の意味でだけだね。

「あ、アキラ！ 制服に着替えたんだ」

エミールが俺の存在に気付き、残る二人も揃って俺のほうに向いた。見知っているように見知らぬ謎の新生者が目の前の二人に問う。

「誰だ？」

「あ、紹介するよ。彼も僕達と同じ新入生なんだ」

「アキラ、降りてこいよ。お前も自己紹介しておけ」

フリッツの言葉に頷きを返しつつ、俺は階段を降りていく。あとエミール。それは紹介になっていないからな。

「初めまして。俺の名前は四宮アキラだ。君は？」

「え？ あ、ああ。俺は如月ハヤトだ。よろしく」

如月ハヤト。原作主人公である彼は既に武芸科の男子用制服に袖を通して。恐らく原作通りの展開で行けば、つい先程まで妹さんが入院している病院に居たのだろう。そんな事を俺が知る由もないので知らない体で行くが。

個人的にこの世界が原作準拠なのかアニメ準拠なのかが一番の疑問点だが、まあどうせ後でわかる事なので今は頭の片隅に置いておくことにする。

この後、フリッツが如月とエミールを連れて彼らが共有する部屋まで案内している間、俺はロビーのほうで待機した。だって俺が行く必要もないし。PDAをスマホ感覚で操作しつつ、俺は両親に『寮に着いた。これから入学式に行く』と言う内容でメールを送る。

暫くして、ロビーに再び戻ってきたフリッツ達と共に、俺は武芸科校舎へと歩き出し

た。

「ようやく来たか、待ちわびたぞ！」

入学式が執り行われる講堂前まで行くと、フリッツに向かって呼び止める声がある。

明るい橙色の髪を後頭部で一括りに纏めた、見た感じ150cm程の身長しかない小さな少女だ。無論、俺はこの子を知っている。

「悪い、こいつらの準備に手間取ってな」

フリッツが親し気にそう返すと、少女は俺達の方を向いて目を輝かせ始める。気のせいか彼女の瞳の奥から黄色の椎茸が見えた気がした。

「おお、お前達も新入生なのか！ 私はレイティア・サンテミリオン。フリッツと同じリベリア合衆国の出身だ。こいつとは所謂顔なじみと言うやつだな」

「幼馴染の間違いだろ？」

呆れたように訂正するフリッツの手が少女——レイティア・サンテミリオンの頭にポフリと置かれる。当然、彼女が歯をむき出しにしながら威嚇するようにフリッツに突つ

かかる。

「そうやって髪を乱すなど言っているだろう、バカフリッツ！」

「置きやすい所にいるのが悪いんだよ」

「ぐぬぬ……」

「二人つて随分仲が良いんだね」

そんな微笑ましいやり取り見ていたエミールが訪ねる。幼馴染と言つてたくらいだしな。それもそうだろう。

「ちつさい頃からずっと一緒だったからな。俺とは違つてこいつはあまり成長してなくて、こつやつて子供扱いされるのが常だ。胸も相変わらず無いしな」

「だーかーらー……子供扱いするな！ 胸の事も言うな！ それよりもだ！ 今度はお前達が自己紹介する番だぞ」

ウガーとでも言いそうな形相でフリッツにそう吐き散らしたら、今度は打つて変わつて俺達の自己紹介を要求してきた。そんな彼女に答えたのはエミールだった。

「僕はエミール・クロスフォード。エミールと呼んで。それでこつちが……」

「如月ハヤトだ。お前達と同じ新入生だ。これからよろしくな」

「……四宮アキラ。同じく新入生」

それぞれ端的に名乗ると、如月の名前を聞いた途端、サンテミリオンは驚きの表情を



露わにする。

「お前が如月ハヤトか!? クレア様の記録を打ち破ったという、あの!」

『クレア様』? 誰なんだ?」

サンテミリオン言葉の中にあつた一人の人物の名前に首を傾げたのは当然の如く如月だつた。なんでこうも原作主人公は無知なんですかねえ(恒例)。

「お前、クレア様を知らないのか?」

「ああ」

「いいか。クレア様はだな・・・」

「その新入生! 何をやっている、入学式が始まるぞ!」

サンテミリオンがリトルガーデンにおけるクレアさんの話をしようとしたら、教員の人に呼びかけられた。

クレアさんの事は後で話すとして、俺達は早足で高度の中に向かった。

都合が良い事に俺達が最も多く空いていた席に着くと、ほどなくして入学式が開始された。

席の位置は特に決められておらず、各々で好きな所に座る、もしくは仲良くなった組

で隣同士に座ったりしていた。俺達も一グループとして席に座る。席順はエミール、如月、フリッツ、サンテミリオン、そして俺の順だ。

講堂内のホールの殆どの証明が落ちて、正面にある壇上に向けて幾つものスポットライトが当てられる。

「新入生諸君、リトルガーデンにようこそ。わたしは高等部武芸科二年で、このリトルガーデン生徒会副会長の一人、リディ・スタインバーグだ。今後、君達新入生の教育係も務める事になる。よく覚えておいてほしい」

壇上の中心部にある教壇にスポットライトが当てられる中、俺達新入生が今着ている制服とは異なる色合いをした制服を着用したリディさんが自己紹介を始める。その隣には、リディさんと同じ制服を着たエリカさんが立っていて、その手には大きめの箱が下げられている。

「続いて隣に立っている君達の先輩を紹介させてもらおう。彼女もわたしと同じ生徒会副会長の一人で、同じく二年のエリカ・キャンドルだ。これからはわたし達二人でこの入学式を取り仕切らせてもらう」

軽めの紹介を終えたりディさんは一礼すると、隣のエリカさんと今の位置を交代する。

「ご紹介にあずかりました、エリカ・キャンドルです。まずはリトルガーデンへの入学、

おめでとうございます」

そう言いつつ、丁寧に頭を下げるエリカさん。頭を上げた時、一瞬だけ俺達に視線だけを向けるとすぐに真正面に向き直り、手に下げていた箱を教壇の上に置いた。

「ねえ。あの副会長さんさ、今一瞬だけこっちに視線を向けてこなかった？」

エミールが小声で言う。確かに一瞬だけそう見えたが、あれはどちらかと言うと……俺を見ていた”……気がする。と、思う。勘違いじゃなければ。

「わたしの目にもそう見えたぞ」

「期待の新生入生君に目を向けてたんじゃないか？」

「いや、偶々だろ」

気になる事はあるが、まあそんな会話が長く続く筈もなく、以降はつつがなく式が進行していく。

エリカさん曰く、今から新生入生全員にリトルガーデンの生徒を表すバッジを授けていくという。

リデイさんが読み上げた名前の順にバッジを渡していくようだ。

「どうやら呼ばれるのは適性試験の反応数値が低い順のようだ。外に張り出されていた紙の通りだとすれば、恐らくは次に呼ばれるのはわたしの筈だ」

「途中何人が飛ばされてるがな」と補足を付け足しつつ、次に呼ばれたのはサンテミ

リオンの予想通りに彼女の名前だった。

「ほら、言った通りだろう」

自慢げに言った彼女は席を立ちあがり、壇上に向かって歩き出していく。

「残るは俺達四人だけだな」

「ハヤトが一番上なのは当然として、次は誰なんだろうね」

壇上でサンテミリオンがエリカさんからバツジを受け取っている。傍から見ると幼い子供にプレゼントを配っているような図式にしか見えない。それぞれの表情からはそんな様子は一切見られないが。

「次、フリッツ・グランツ」

「どうやらお前のほうが上だったみたいだな。行ってくる」

俺にそう語り掛けると、壇上に向かう花道を歩くフリッツへと周囲の女生徒から黄色い歓声を送られていく。これだからイケメンってやつは。

ふむ。原作だとフリッツは新入生の中でも上から三番目だった筈だ。それを俺が割り込む形であいつが四位に下がっているのは・・・正直申し訳ない気分になってくるな。まあ、あえて口には出さないけど。

あれ、もしかしなくてもこの時点で既に原作崩壊だよねコレ？ 大丈夫なのか？ 「次は僕らのどちらかだね。アキラはどっちだと思う」

「直ぐに解るだろ」

言わずともわかる事を敢えて聞くなよ。しかし、俺からしたら手に取るようにわかる。次に読み上げられるのは、

「次、四宮アキラ」

ほれ来た。やっぱり原作主人公とヒロインには勝てんね。行ってきまーす（A I B O 感）。

「ふふん、どうやら僕の方が上だったみたいだね」

何でそんな自慢げに言うんだよ。別に羨ましくもないからな。とりあえず適当に相槌を打ちつつ席を立ち、壇上に向かって歩き出す。

壇上上がり、エリカさんの前に立つと彼女から語り掛けられる。

「よくいらつしやいました、四宮アキラ。制服姿がよくお似合いです」  
「ありがとうございます」

エリカさんに褒められ、つい照れてしまう。こういうのを御世辞と言うんだろうな。「新入生としてもだが、わたしからも貴様を歓迎しよう。これからみっちり鍛えていくので、覚悟しておけ」

「臨むところですよ」

短く言葉を交わし、俺はエリカさんからバッジを受け取る。数は一つ。一年を現す値

で、エリカさん達は二年なので二つ付けている。

二人に一礼した後、壇上を下りて席に戻る。腰を落ち着けると隣のサンテミリオンが疑問の言葉を投げってくる。

「なあ、四宮。さつき壇上で副会長達と何を話していたんだ？ 遠目から見た程度だが、何やら親密そうだったが」

「何でもない、ただの世間話だよ」

サンテミリオンの言葉を曖昧な返事で返す。本当になんでもないだなこれが。だから四人揃って俺を見るな。正面を見てなさい、正面を。まだ式の最中なのよ。まったくこの子達ったら。

さて、ここからは特に原作と変わりないのでしよる事にする。

俺の後は当然の如くエミール、如月の順に呼ばれ、それぞれにバッジを受け取っている。く。

エミールの時は女子達から「可愛い」等の声が上がっていたが、対する如月には歓声の代わりにライバルとしての敵意の籠った視線や彼自身に備わる才への嫉視が含まれている。尊敬や羨望の眼差しもあるにはあるが、それでも比率の多くは負の感情を込められているのが多かった。針の筵状態も楽な物ではないか。いや、当然だが。

ちなみに俺が呼ばれた際には何の声も上がらなかった。この時だけ静かすぎて心の

中で泣きそうになったのは言うまでもない。ああああんまりだあああつ!!

「続いて、この海上学園都市艦リトルガーデンの艦長であり、初等部、中等部、そして高等部の普通科と武芸科、全ての学生を束ねる生徒会長——武芸科として、女王クイーンの座にも就かれていますクレア様からのご挨拶となります」

エリカさんがそう言うのと、舞台の袖から一人の女生徒が現れる。金髪の長髪を縦口ルにして両サイドから垂らした美女——我らが生徒会長こと、チヨロインとして知られるクレア・ハーヴェイさんのご登場だ。

彼女が教壇の前に立ち、その上に置かれたマイクに言葉を発しようとしたその時だった。講堂の出入り口から、バタンツ、という大きな音が講堂内に響き渡り、クレアさん達生徒会のみならず、講堂内に居た全ての者達の意識がそちらに持っていられる。

「すいませんっ!!」

「遅れてしまいましたっ!!」

そこに立っていたのは、俺達と同じ武芸科としての制服を身に纏った女生徒二人だった。それぞれに口にした言葉が講堂内に響く。あー・・・そーいやあの二人の事すっかり忘れてた。

ノア・シエルダンに劉雪梅——栗色の髪を腰まで伸ばした方がシエルダンで、黒髪を三つ編み且つ一つに束ねた方が劉である。

「ノア・シエルダンに劉雪梅。遅刻とはいい度胸ですわね」

壇上に立つクレアさんが冷徹な眼差しを二人に向ける。その声色は思わず背筋が凍るほどに冷たいものだった。俺まで凍えてどうすんだよ。しかし、そんな人に睨まれながらも、二人は怯えつつ勇氣を出して言葉を紡いでいく。

「ち、遅刻した事は謝ります!!」

「朝から繁華街セントラルに買い出しに出ていたんですが、ここまで来るのに思っていたよりも時間がかかってしまって、それで——」

「言い訳を聞くつもりはありませんわ」

二人の言葉を容赦なく切り捨てたのはクレアさんだ。冷徹な眼差しはそのままに、さらに追い打ちを掛ける。

「事前の情報で時間厳守と書かれていた筈です。その約束事すら守れない人間はこのリトルガーデンに必要ありません。今すぐ荷物を纏めて、リトルガーデンから出ていきなさい」

その言葉に、2人の女生徒は今にも泣き出しそうな表情を浮かべる。あんまりな物言いだが、実際問題クレアさんの言う事は尤もなものだ。尤もなんだが、いざこの場面に直面してみると気分が悪くなってくるな。どうにかできないものか。

「クレア様のご命令です。今すぐにPDAを返却し、この場から立ち去ってください。」



明日にはリトルガーデンから出て行けるように準備致しますので、今晚中に寮の後片付けも済ませておいてください」

エリカさんの淡々として声が響く。それと合わせて壁際に待機していた他の三年生達が二人を退出させようと動き出す。え？ 他の上級生いたのかだつて？ それがいちたんですよ。壁際に沿つてまるで西洋の鎧みたいな直立不動で立っていたんです。

「ちよつと待つてよ！」

そんな時だ。エミールが声を上げて立ち上がる。反抗心の宿つたその眼はクレアさんに対して向けられている。

「艦長だか女王だか生徒会長だか知らないけどさ、一度のミスで放校処分なんていくら何でも横暴すぎるんじゃないかな？ 二人とも泣いてるし、可哀相じゃないか」

「お、おい、エミール。喧嘩腰になるなつて」

明らかな敵意を込めた事を言うエミールに如月は抑えようと肩を掴む。そんな如月の手を振り払いつつ、エミールは怒り任せに言葉を紡いでいく。

「喧嘩腰にもなるよ！ 僕はああやって権力を振りかざす奴が大嫌いなんだ！ 親の七光りで艦長に就いてる奴ならなおさらだよ！」

「親の七光り……て、どういう意味だ？」

「クレア様はこのリトルガーデンを経営なさつているワルスラーン社のご息女なんだつ

！ それだけにこの場での権力はものすごいのだぞ！」

如月の疑問に答えたのはサンテミリオンだ。小声で如月に聞こえる声量で答え、それを知った如月の顔が驚愕に包まれる。それほど身分の高い人物に齒向かったのだから当然の反応だ。

「え、ええと、言い方はともかく、確かに一度のミスで放校処分を下すなんて、さすがにやりすぎなんじゃないかと。エミールだって、それが嫌で憤ってるのではないかと……」  
「そうだそうだ!!」

言葉を選びながら発言する如月のすぐ目の前で、頬を膨らませて激おこぶんぶん丸状態なエミールが叫ぶ。お前ちよつと黙ってようか。流石に緊張感が無さすぎるから。

「ここは俺も立っておくか。このまま放っておくのも気が引けるし。」

「すみません。差し出がましいですが、俺からも良いですか?」

「四宮アキラ? ……いいでしょう、言ってごらんなさい」

俺は立ち上がり、許可をいただくと発言する。

「確かにあなたのいう事は尤もです。時間厳守と事前に告知されていたのに、それを守れなかった彼女達に非があるのは明らかでしょう」

「アキラっ!!」

俺の物言いに突っかかってくるのはエミールだ。当然の反応だがまあ落ち着け。ま

だ言い終わってないから。

「しかし、いくら約束事を守れなかったとは言えその判断は性急に過ぎるかと思われま  
す。ここにいる全員が同じ志を持つ仲間同士なんです。理由はそれぞれで異なるで  
しょうが、それでも、『誰かを守りたい』という共通の目的があつてリトルガーデンに來  
た事實は消えません。先程自分はあなたの言う事に同調を示しましたが、それを踏まえ  
た上で敢えて発言させていただきます——どうか、お考え直し頂けないでしょうか？」  
「・・・わたくしの言つた事を認めつつも、あくまでもわたくしの意味には素直に賛成で  
きない。つまりそういう事ですね？」

俺は首を縦に振る。その動作に周囲がざわめき立つ。

解つてるよ。俺の言つてることが矛盾を孕んでる事くらい。けど、それでも割り切れ  
ないものがあるんだ。

相手は見ず知らずの赤の他人程度の認識だけど、それでも俺の目指したい『未来の自  
分』となる為に、今はこうした方が正しいと判断したまでだ。誰が何と言おうと、俺は  
この意思を貫き通す。今も出入口で泣いている二人の表情から、その感情を“安心”に  
塗り替える為に。

「生徒会長、確か面接に必要な履歴書には、志望動機が必須でしたよね？ それをあなた  
は読んだ上で、面接を通して、合格通知を出した筈です。ここにいる新入生全員を、例

外無くです」

「・・・ええ、その通りですわ」

「そして面接時、殆どの受験生に対してあなたは直々に面接を行った筈です」

「おおよそになります、それでも大部分の受験生に対して面接を行ったと自負しております」

「やっぱりか。あのお堅いイメージ通りに、彼女は全ての履歴書に目を通していている筈だと思っていたが、二重の意味で予感的中だったな。」

原作9巻でエリカさんがリトルガーデン入学を目指した話があったからもしやと思いつてみただけだったのだが、どうやら正解のようだ。

因みにここだけの話、俺の場合はなぜか面接官はおろか、大型のカメラとモニタが面接相手だったけどな。何分時期がアレだった為、俺の時は時間の確保が難しかったのだとかで態々カメラを通して遠くから間接的に面接を行ったそう。大雑把すぎるだろと心の中で盛大にツッコんだのは今も記憶に新しい。

「あなたはそれを承知した上で、このリトルガーデンへの入学を許した。それはつまり、あなた自身が彼女らの入学を認めたという何よりの証拠です。それが入学初日で放校処分なんて、理不尽にも程があります。彼女らには彼女らなりにここへ来た理由があるのですから、どうか今回ばかりは、大目に見ていただけないでしょうか？」

「四宮……生徒会長！俺からも、どうか、お願いします！検討していただけないでしょうか!？」

俺は頭を深く下げ、懇願する。黙って聞いていた如月も俺の意思に同調したのか、同じように深く頭を下げた。

俺達の言葉を聞いて、クレアさんは目を伏せて静かに考え込む。そんな様子を不安げに見る副会長二人だったが、やがてクレアさんは目を開いて俺に向けて言葉を発する。

「四宮アキラ。確かにあなたの言う通り、わたくしはここにいる全員の意思を尊重して入学を認めました。それはあなたも例外ではありません。ですが、それでもあなたの意思と発言を認める訳にはいかないのです」

「何故ですか?」

「今あなたの言った事が全て、あなた自身が抱いた感情論に基づくものだからです」

感情論……まさしくその通りだ。二人の為、と言うのももちろんあるが、多かれ少なかれ俺の発言は自分の為のものでもあるのだからそう返されるのも当然だ。

「ここにいる全員、これからわたくしが言う事を胸に刻みなさい」

そう言つてクレアさんは講堂にいる全員に向け直り、言葉を続けていく。

「わたくし達武芸科は、普通の学校とは違つて命を賭してサベージと抗戦する武芸者<sup>スレイヤー</sup>見習いに過ぎないのです。卒業後、あなた方は戦場に出る事もあるでしょう。その時、

たった一人のミスが原因で部隊が全滅という事も有り得るのです。回数の問題ではありません。戦場に出しまえば、誰かが命を落とす・・・そうならない為に、たった一つのミスも許す訳には参りません。ひいてはその結果が仲間の生還率に繋がるのですから」

「ッ・・・!!」

思わず歯噛みする俺だったが、「しかし」と続けたクレアさんの呟きに、俺と如月は下げていた頭を上げて壇上の上に立つクレアさんを見据える。

「四宮アキラ、あなたの言う事にも一理あるのは確かですわ。あなたの仲間を思うその姿勢に免じて、わたくしから一つ、提案があります」

「提案・・・ですか？」

突然のクレアさんの『提案』という言葉に動揺が走る講堂内。傍に立つ副会長達も同じように動揺を隠しきれず、彼女に近寄るが、クレアさんはそんな二人を気にした様子も見せずに俺達二人に右手の人差し指を突き付ける。

「わたくし、クレア・ハーヴェイは四宮アキラと如月ハヤトの両名に、決闘デュエルを申請致しますわ！」

彼女の口から発せられた驚きの宣言に、俺達だけじゃなく、エミールやフリッツにサントネリオン、講堂内の新入生を含めた生徒全員が目を丸くした。

「……………え？ マジで？ 原作通りつちや原作通りだけど……………」  
俺もやるの？

この時ばかりは流石の俺も「言うべきじゃなかつたかも」と思い、胸中でちよつとし

た後悔が込み上げてきたのだった。



# 一人につき武器は一つとは限らない

天気は晴れ。青く澄み渡る空には白い雲が流れ、洗濯物を干すのには絶好の洗濯日かな一日。そんな天候の中で、数羽の白い鳩が飛び立つ。

武芸科校舎から少し離れた位置にあるドーム状の建物、コロシウム闘技場。

そこで今日、ある戦いが執り行われることとなった。

「四宮。準備は？」

「ぼつちりだ。如月の方は？」

コロシウム闘技場内の控え室で俺専用のヴァリアブルスーツへと着替えた俺は、隣接した控え室に繋がるドアから出てきた原作主人公、如月ハヤトにそう答える。

彼も同じように専用のヴァリアブルスーツを着用していた。

「俺も問題なしだ」

「そうか」

確認すると、控え室の扉が開かれる。そこに立っていたのは生徒会副会長の一人であるエリカさんだった。

「お二人とも。準備は整いましたか？」

リデイさんの問いかけに、俺達は揃って首を縦に振る。

「よろしい。ではついて来なさい」

促されるがままに、俺達はエリカさんの後ろについていく。これからクレアさん”達”との決闘デュエルが始まるのだ。

この時点でお気づきの方達もおられますでしょうが、クレアさん”達”——つまりは俺達二人と相手方も二人、という組み合わせだ。

なぜそうなったかと言うと、昨日の入学式に遡る必要がある。

★☆☆

「わたくし、クレア・ハーヴェイは四宮アキラと如月ハヤトの両名に、決闘デュエルを申請致しますわ！」

クレアさんからの突然の宣言。彼女の口から告げられた言葉に周囲がざわめくのは

当然の出来事だった。

「決闘<sup>デュエル</sup>……て、どういう事だ？」

若干一名理解できないでいる奴がいるが……言わずもがな如月である。彼の眩きに答えるのは隣にいたフリッツだ。

「このリトルガーデンにおいて、武芸者<sup>スレイヤー</sup>同士が行う私闘の事だ。普通なら新入生がそれを行うのはまず在り得ない事なんだがな」

そう。通常ならば俺達新入生<sup>デュエル</sup>が決闘を仕掛けられることは在り得ない筈。それは新入生の全員が殆どの場合、ハンドレットを展開できた事が無いからだ。

すでにその経験があるエミールと俺と如月を除いて、碌に展開すらしたことがない者が大半を占めている。そんな彼らに決闘<sup>デュエル</sup>を吹っ掛けるというのは酷であり、何よりあのクレアさんが許さない事でもあるからだ。

しかし、そんなクレアさんが初めて、新入生に対して決闘<sup>デュエル</sup>を仕掛けた。

恐らく如月は原作通りだとしても、なぜ俺も含まれてるんだ？ もしかしなくとも俺も反論したからか？ でも自分で言った手前、今から撤回するなんてことはしたくないな。言った責任は取らなきゃ。

「生徒会長。俺達は新入生です。決闘<sup>デュエル</sup>を申請する理由をお尋ねしても？」

「良いですわよ。理由は二つあります」

俺の疑問に、クレアさんは口元を引き締めながら、握り拳を作った右手から人差し指を突き出して答える。

「まずは二つ目。如月ハヤト。あなたは半年前、ワルスラーン社モトマツ支部で行われたイベントにあつたヴァリアブルストーンに触れての適性試験で、わたくしよりも遥かに高い反応数値を示したそうですね。その際、ハンドレッドも刀に似た形状へと変わったと聞き及んでおります。それほどの適性があれば、直ぐにでもセンスエナジーのコントロールにも慣れる筈ですわ。そしてあなたの履歴書には剣術の経験もあると書かれておりました。刀の形状と剣術、これだけでもすぐにあなたの自身の戦闘スタイルは確立される筈です。何よりも、わたくしは自分自身の目であなた自身の実力を確かめたく、こうして申請しております」

なるほど。つまるところ腕試しという事か。原作だと「強くなれる兆しのある者は寧ろwelcome」みたいな考えだったからな、今はあくまでもそれで通すつもりなのだろう。いや、実際にクレアさんがそう言ったわけではないけども。

クレアさんは中指を突き立て、二つ目の理由を話す。

「次に二つ目。四宮アキラ。一カ月前に起きたリベリアでのサベージ襲撃の折、あなたは偶然所持していたヴァリアブルストーンに初めて触れたにも係わらず、ハンドレッドを展開できた事に起因します」

クレアさんの語った理由に、講堂内の殆どの人間から驚きの声が混じったどよめきが生じる。それをここで言っちゃうの？　しかし、彼女の語った理由はそれだけでは終わらない。

「あれからおよそ一カ月。話によるとあなたには知り合いに武芸者スレイヤーがいて、その方から武芸者としての戦い方を教わったと伺っております。つまりは如月ハヤトと同様、現時点でのあなたの実力を確認する為でもありますわ。あなたがハンドレットを扱えるに足るか、それをわたくしが直々に見定めて差し上げますわ」

「決闘デュエルをする理由は分かりました。ですがそれだと二人の放校処分と何の関係もないじゃないですか？」

俺の言葉に同調するように近くにいたエミールが「そうだそうだ！」と声を荒げる。黙つてろの意を込めた俺の平手打ちが原作ヒロインの後頭部を軽く打ち付ける。「何で叩いたの」と言いたげな視線を向けてくる原作ヒロインをガン無視しつつ、クレアさんの答えを待つ。

「わたくしは言つた筈ですわよ。『あなたの仲間を思う姿勢に免じて』と。つまりはあなた自身の手でわたくしとの戦いに勝ち、彼女達を“救つて見せなさい”と言つているのですわ。因みにこれを拒否した場合は・・・わかつておりますわね？」

まるで答えはわかっていると云いたげな笑みを浮かべるクレアさんが俺達からの返

答を促す。

要は彼女らを天秤にかけている訳か。俺達が勝てば彼女らの処分は取り消すが、逆に俺達が負ければ彼女らはこのまま退学という事に。拒否すれば有言実行、て訳か。

「解りました。その決闘、俺はお受けします」  
デュエル

「四宮！ 本気か!?!」

隣の如月が声を荒げる。ここまで来ちまったんだ。今さら後戻りできるかってんだよ。

「如月。反論した時点で俺達は既に後戻りできないんだ。反論した手前、俺は今まで自分が言った事を撤回したら絶対に後悔する」

「だからって……」

「だからここは引き下がる訳にはいかない。俺は自分で言った事は自分で責任を取る。お前は どうする?」

俺は如月に向けて訊ねる。彼は少し渋った表情を見せたが、それをすぐに決意を固めた表情に変え、クレアさんの方に向き直る。

「そうだな。俺もこのまま見ているなんて我慢できない……俺もその決闘、お受けします!」  
デュエル

「お二人とも、良いお返事ですわ。それでは日時を決めましょう。明日の……」

「お待ちください、クレア様」

ハヤトが意を決して決闘デュエルを受諾し、クレアさんが決闘の日時を口にしようとした時、彼女の後ろに立つリデイさんが待ったを掛ける。

「なんですの、リデイ？ これはわたくしの判断で決めた事です。あなたが口を挟むのは」

「クレア様。わたしもその決闘デュエルに加えていただけないでしょうか？」

「は？」

驚きの声を上げるクレアさん。俺達も自分の顔に驚きの表情を浮かべているのが解る。何でそうなった？

「わたしは新入生の教育係です。そのわたしが奴らの実力を確かめるのも当然の事でしよう」

「それはそうですが・・・」

「同時にわたしは生徒会副会長でもあります。奴らだけでなく、新入生達にわたし達生徒会の実力を見せつけるいい機会でもあります。加えてわたしも加わる事で、クレア様にかかる負担も抑えられます。あなたが二人を同時に相手にする必要は無い筈です。それにわたしにだって武芸者スレイヤーとしてのプライドというものがあります。あんな奴らに負けるつもりは毛頭ありません」

ほくそ笑みながら言うリデイさんの言葉に、顎に手を置いて考え込むクレアさん。暫しの沈黙の後、クレアさんは観念したように言葉を紡いでいく。

「…解りましたわ。わたくしとあなたで、彼らを完膚なきまでに叩き潰してあげましょう」

「はい！」

揃って俺達を見据えてくる二人の女性。その眼にははつきりとした敵対する意思が宿っていて、その眼を見て俺達は揃って固唾を飲み込んだ。

「ク、クレア様！ でしたら私もその決闘に」デューエル

「エリカ。あなたは審判役をお願い致しますわ」

「し、しかし！」

自分も加わろうとするエリカさんの言葉をシャットアウトし、それでも尚食い下がらんとするエリカさんに向き直ってクレアさんは言葉が続ける。

「お願いしますわ。互いに二人ずつの戦いです。わたくし達が何処までも公平でいられるよう、あなた自身の目で見極めてほしいのです。頼めますわね？」

「ツ……………わかりました」

葛藤があつたのだろう。自分も彼女の傍で役に立ちたいという気持ちを押し込め、エリカさんは渋々承諾する。



「それでは改めて日時を決めましょう。決闘デュエルの舞台は闘技場コロシナムにて、明日行いますわ。開始時間は追ってあなた方のPDAに連絡をお送り致します。わたくしからはこれで以上です——明日の試合、楽しみにしておりますわ」

クレアさんはそう言って壇上の袖に向かつて歩き出していく。やがてその姿が見えなくなると講堂内のざわめきが次第に大きくなり、如月や俺達はただ静かに、クレアさんが通っていった袖に向いていた。

その後、入学式の最中だったことを思い出し、直ぐに式を再開する。俺達はエリカさん達に促されるがまま席に着くと、些か緊張感とか色々な物が抜け落ちた気がして盛大に溜息を吐いたのはここだけの話。

ついでに後で如月のヴァリアブルストーンを受け取りに行っただけで、そこはまあ後にも話すでしょう。

★★★

とまあそんな事があり、今回開かれる決闘デュエルは如月と俺対クレアさんとリディさんでの

対戦となった。

対戦形式の方は既に今朝方PDAに送られていて、まずは俺とリディさんと戦い、その後で原作通りの展開、つまり如月とクレアさんとの決闘デュエルが行われる手筈になっている。俺達の場合はその前哨戦といった感じだ。見世物みたいでノれないな。

暫く廊下を歩いていると、進む先の出入り口——バトルフィールドでは、盛大なる歓声デューエルが沸き上がっていた。

「この歓声は？」

「会場の観客席に集まった見物客からのものです。尤も、会場にいるのは生徒のみですが」

「生徒だけでこの歓声って・・・」

それだけクレアさん達に人気があるってことだ。確かに廊下を歩いているだけでも歓声の熱気が伝わってきて熱い。熱中症になりそうだ。誰か俺に水分をおくれ。

「これより先が決闘デュエルの舞台となります。心の準備はよろしいですか？」

俺はいつでも。勝つ見込みはないとは思ってるけど、負けるつもりだって毛頭ない。それは如月も同じよう、俺と同時にしっかりと領いた。

「それでは参りましょう。・・・結果は既に見えています」

そんな事を俺達にも聞こえる声量で呟く彼女の後に付いていき、俺達は外——バトル

フィールドに入場した。

会場の観客席にはこれでもかと言うほどの人数が集まっていて、クレアさん達の雄姿を拜む為、または俺達が無様に地にひれ伏す様を見る為に来場した生徒が殆どだ。他の新入生の姿もちらほら見えるが、疎らにしか見えない。あ、フリッツとサンテミリオンにシエルダンと劉もいた。

「逃げずに来た事、褒めて差し上げますわ」

ワーワーと轟く歓声の中、そんな言葉が俺達の耳にしつかりと届いた。フィールドの中央にはクレアさんとリデイさんが立っている。二人ともそれぞれにヴァリアブルスーツを着用していて、既に戦闘準備は万端と言った様子だった。お二人とも立派な御山を抱えて大変眼福でございます。恐らく観客席の男子生徒の殆どもそれが目当てな筈だ、多分。

「始める前に、何か言う事はございませんこと？」

「貴様らは揃って初心者だ。如月は言わずもがなだが、四宮とてハンドレッドを展開できてまだ日が浅い筈だ。そんな貴様らが我々に勝てる道理はない。今ならまだクレア様に許しを請う余地はあるが、どうする？」

揃いも揃ってまあ強気なこと。普通なら許してもらおうべきところなんだろうけど、そんな気は更々無い。戦って自分の意思を通す——結局のところ、今の俺に出来る事はた

だそれだけだ。

昨日の入学式の後、シエルダンと劉が俺達を巻き込んだ事で謝罪に来た。その時に「今なら謝れば許してくれるかも」と二人から言われたが、俺は撤回するつもりはないという胆を伝えた。

二人は最後まで心配してくれていたが、俺の意思に同調した如月からの後押しでとりあえずは引き下がってくれた。その上で俺達二人を応援するとも言っていた。俺達にとつて、今はそれだけで十分だ。

「地面に倒れ伏す覚悟なら出来てますが、生憎と頭を垂れる余裕なんてありませんよ。俺は俺なりに全力を尽くす——ただそれだけです」

勝てる見込みがないなら、相手が引くほど食らいついて見せる。それが勝利に直結しなくとも、この決闘デュエルに於いて俺にできる最大限の抵抗だ。

「俺だつて男です。いくら実力差があるからと言つて引き下がる訳にはいかない。例えばどれほどの相手でも、俺は全力で戦う！」

よく言つた。それでこそ主人公だ。

「そうですか。覚悟のほどは承知致しましたわ——それではこれより、わたくしクレア・

ハーヴェイとリディ・スタインバーグ対如月ハヤトと四宮アキラの決闘デュエルの開始を宣言します!!」

その言葉が上がると共に、先程までの観客席からの歓声が更に高まり、より一層の厚い熱狂に包まれた。

「事前に告知していた通り、まずはリディと四宮アキラによる個人戦を行います。既に知っている方も多いとは思いますが、決闘デュエルのルールを再確認させていただきます。エリカ」

「はい、クレア様。ルールは通常のを適用します。決闘デュエルの制限時間は十五分。気絶、降参の宣言、体力ヴァイタル、もしくはエナジーがゼロになった時点で勝敗は決定致します」

エリカさんが説明すると観客席の上部に設置されている電光掲示板に目をやり、それを見ながら説明を続ける。

「制限時間や体力ヴァイタル、エナジーの残量については武芸者スレイヤーの手足についているヴァイタルリングより取得した数値が電光掲示板に表示されますので、観客席の皆様はいつでも視認できます。対戦相手のお二方、何かご質問はありますか？」

その言葉に如月は「要は倒れるか武装が解除されるかって事だろ?」と言う。その通りなんだが、俺にとっては一つ疑問がある。

「一つ、いいですか?」

「なんででしょう?」

「もしもの話になりますが、俺とスタインバーグ副会長が同時に倒れる、もしくはエナジーが同時にゼロになったら結果はどうなります?」

俺の疑問に観客席からどよめきが生じる。中には「まさか勝つつもりなんじゃ・・・」とか「在り得ないだろJK」とか言う声が疎らにだが聞こえる。前者は否定するが、おい誰だ今のネットスラング使ったやつ。

そんな中でも、エリカさんはちよつとした動揺を見せつつも冷静に答えてくれる。

「その場合は引き分けになりますが、この決闘はノア・シエルダンと劉雪梅リュウ、シユエメイの放校処分を賭けた戦いです。最終的な決定権はクレア様にありますが・・・リデイ、どうします?」

流石にそこまで確認を取っていなかったのか、エリカさんが臨戦態勢のリデイさんに向かつて訊ねる。

「わたしは副会長だ。このリトルガーデンにおいて最高権力者のクレア様の意向に従う」

「クレア様、如何致しましょう?」

「変わりありませんわ。昨日にも申し上げた通り、あなた方が勝てれば彼女達の処分は撤回、負ければ宣告通りに処分を執行致します。しかし引き分けになった場合、わたく

し達の間で協議して本日中に決議を下します。あとはあなた方の努力次第という事になりますわ」

なるほどね。結論は最終的にクレアさんが出す事になるが、俺達の敗北以外の結果になれば、俺達の戦いと思意思次第によつては考えを改めなくもない、という事か。これには多くの観客が聞いている。昨日の騒動を聞き及んでこの場に集まった上級生も含めてな。これで言質は取つた。

「了解しました。俺の方からは以上です」

「それでは両者は位置に付いてください。クレア様と如月ハヤト様は後ろの控えにまでお下がりにください」

確認を終えたエリカさんがそれぞれに促す。俺とリデイさんは数歩後ろに下がつて所定の位置へ。クレアさんと如月は後ろに常設されている控えにまで下がっていった。

「エミール!? お前、何でこんなところにいるんだよ!？」

「いいじゃん、僕だってハヤトの応援をしたいんだもん! あ、アキラも適当に頑張つてねー」

後ろの控えにいつの間にかいたエミールが投げやりな応援をしてくる。お前後で校

舎裏な。

★★★

クレアとハヤト、二人がそれぞれの控えに下がり、残ったりデイとアキラはそのままにらみ合いの状態で立っていた。

「四宮アキラ。貴様がヴァリアブルストーンを持って一カ月……その間に培った実力がどれほどのものか、わたしがこの場で見定めてやる！ 全力で向かって来い！」

「やれやれ……熱くなりすぎると後で辛いですよ。もうちよつと肩の力を抜いたらどうですか？」

リデイさんの言葉に溜息混じりに答えたのがいけなかったのか、彼女の目元がピクリと揺れる。

「貴様……そのやる気のない返事は何だ？ わたしを営めているのか？」

「いえ、そんなつもりはないですよ。俺はただ『もうちよつと気楽に戦いましょう』と言いたいだけです」

「それを営めていると言うんだが……まあいい。どうせ我々はあくまでも『余興』だ。クレア様の雄姿を拝みたい生徒もいるだろうから、さつさと終わらせるとしよう」



そう言って、彼女は右手に握られた鉱石——ヴァリアブルストーンを握り締める。対する俺も右手で玩んでいた自分専用のヴァリアブルストーンを握り直し、二人揃って胸の前まで掲げる。

『両選手、ハンドレッドを展開してください』

実況席に移ったエリカさんの声がマイクを通してスピーカーから流れる。その言葉に従い、俺達は揃ってヴァリアブルストーンに命令を下す。

「ハンドレッド、オン武装、展開!!!」

その言葉にヴァリアブルストーンは砕け散り、俺達の体に纏わり付くように周囲に飛び散る。

リデイさんの体に纏わり付いた微粒子状のエネルギーが両腕を囲うように集束、左右一対の防具となり、左右の手には同じくエネルギーで形成された大型のランスと上半身を丸ごと覆い尽くす巨大な盾が現れる。

それが彼女のファランクス型のハンドレッド——通称《ミドガルドシユランゲ漆黒の天槍》。右手のランスで攻撃を、左手の盾で防御を行う攻防一体の武装だ。

対する俺には両手足にエナジーが集まり、四肢を保護するプロテクターが装着されて

いく。

以前展開した時のような歪な突起物は生えておらず、代わりに腕と足を覆うガードは面積が狭くなっている分、洗練されていて防御よりも手足の動作に支障をきたさない設計となっているように思える。

俺の分はこれで一応展開の工程は終了だ。・・・他に武装はつて？ それについては直ぐに答えが出ます。

「それが貴様の武装か」

「そうですが。それが何か？」

「いや、以前見た時のとは形状が異なっているように思えてな。遠目で見えた限りではだが」

あー、両手足のプロテクターね。それも当然だ。フランソワ王国で父さんと母さんが原子配列を整理してくれたのだから、こんな形にもなる。

「そういうえげそうでしたね。でしたら・・・」これ「も初めてですね」

以前の不完全な展開状態を遠目から確認していたと零すりデイさんに答えつつ、俺は自分でも解るくらいに不敵な笑みを浮かべながら両手を肩と同じ高さに掲げる。俺は意識を集中して、左右に開いた手にエナジーを「集束」させる。

「なっ・・・エナジーが、集束していく・・・!？」

驚きの声を上げるリディさん。彼女だけじゃなく、周りの観客席からも驚きと困惑のざわめきが上がりに続ける。フリッツ達は当然として、控えにいる如月やエミールも同様の反応を示しているだろう。

俺の両手を中心に集まり始めたエナジーがそれぞれの手の中で形を成していき、同じ形をした二振りの剣を形成していく。それらは所謂双剣と呼ばれる武器で、右手の剣は刃が白く、反対の刃は黒い。非対称的な二振りの剣は異様な雰囲気を伴いながらも、それぞれ刃の内側から漏れ出すエナジーが陽炎の様に揺れ動き、見る者に幻想的な印象を与える。

俺はそれらが手の中で完全に形成させると、左右の人差し指の当たる箇所を中心に、まるでトリガーに指を掛けた拳銃を回すような動作でそれぞれの手の中で遊ばせると刃を下に向かせる形で保持する。俺なりに編み出した防御の姿勢で顔の前まで持つてくる。

「二振りの剣・・・なるほど。貴様のハンドレッドはシユバリエ型という事か。だがそれではわたしの攻撃は受け止めきれないぞ」

「止められなければ受け流すまでです」

”都合の良い事に”俺のハンドレッドが剣を主武装としたシユバリエ型だと思ってくれたりリディさんに返しつつ、互いに構えて臨戦態勢を整える。リディさんは盾を前方

に向けながら右手のランスを前に突き出し、俺はその場から動かさず刃を下に向けた双剣を顔の前に構えたままだ。

頭上に設置された掲示板に『10』の数字が表示され、それが1つずつ下がってカウントダウンを開始する。

カウントが減る度、俺達は揃って武装を構えたままジリジリと地面を擦って距離を縮めていく。

『決闘——開始！』

やがてカウントが『0』を表示すると、実況席のエリカさんが開始の合図を送り——  
刹那、リディさんはファランクス型らしく、真正面から突撃を敢行。

すぐ目の前に迫るリディさんのランスを、俺は左側にズレて軌道から逸れる。この時、右手の白剣をランスに叩き付け、上に救い上げるように打ち上げる。

「ふっ!!」

反対の黒剣で切りつけるが、リディさんの盾で防がれる。が、俺はすぐに黒剣を下げ、代わりに白剣で切り付ける。再び盾でいなされるが、俺は白と黒の双剣で交互に切り付けていく。攻撃の手を緩めず、盾の表面に鋭い傷を生み出していく。

しかし、リディさんは打ち上げられたランスを横薙ぎに振るい反撃。間一髪、双剣で横薙ぎを防ぐがその衝撃で俺は後方に後退させられる。あつぶね！ 今の当たってた

ら相当体力ヴァイタルが持つてかれていた。

「チツ・・・防がれたか」

舌打ちしつつ、再びランスを前に突き出して突撃してくるリデイさん。目前にまで迫った彼女の鋭い一刺しが俺を貫かんと突き出される。直撃コース——だが、俺はそれを躲さず、代わりに体を捻って直撃コースから無理矢理逸れた。

「なっ！」

驚きの声を上げるリデイさんに構わず、俺は体を捻った拍子に足を振り上げ、回し蹴りの要領で目の前に迫る彼女の盾を正面から蹴り飛ばす！

「ツ・・・!？」

リデイさんは蹴り飛ばされた衝撃を正面から受けるも、そこはやはり熟練者。腕に力を込めて盾の位置を無理矢理固定していた。蹴られた盾は一瞬ブレただけで姿勢はそのままに、右手のランスを引き戻して再び突かんと俺に矛先を向け直す。が、俺はそれを読んでランスの矛先の側面に右手の白剣を叩き付けてまた軌道をずらす。その拍子で体を回転させながら左手の黒剣でリデイさん目掛けて右から斬りかかる。

これに反応して盾で防いだリデイさんだったが、今度は体を回転させて生まれた遠心力を利用した回し蹴りならぬ回し斬りによってリデイさんを後方に吹き飛ばす。

「ぐうっ！」

後退させられたリディさんの苦悶の声に構わず、俺は両手の剣を正しい持ち方で構え直し、突撃。ランスと盾の両方に双剣で攻撃を与える。

突き、薙ぎ、斬り上げからの斬り下ろし、回し斬り。次の手を読まないようランダムに連撃を仕掛け、攻撃の手を緩めずにリディさんの動きを封じていく。

俺は双剣特有の『手数の方多さ』と『速度』で攻め、大振りで『刺し貫く』事と『威力』に優れたランスの唯一の長所を潰す——昨日の内に考えた、シンプルな手段で攻めていくつもりだ。

前世の知識もあって、至って単純な作戦になったが、ハンドレッドでの戦闘に未だ日の浅い俺にとっては唯一有効性の高い策だ。フランソワ王国で俺の教官を務めてくれた、リディさんと同じくフアランクス型の『彼女』との訓練の経験を活かして、”勝ち”は取れずとも”引き分け”で終わらせる。それがこの戦いに於いて、現状の俺が唯一取れる成功率の高い作戦だった。

しかし。やはり現実には先読みが不可能なものだ。俺がそのまま攻め続けるのを相手が許す筈も無く、状況は一気に変わっていく。

「くっ……舐めるなあ!!」

それを物語る様に、リディさんの雄叫びが猛る——突然彼女の動きが変わった。切り結ばれていた両手の武装を、彼女は前面に『突き出した』。

「っ!？」

俺が驚く刹那。彼女の武装が、俺の武装と正面から衝突する——しかし、『ただ』ぶつかった訳ではなかった。

突きを放った筈の左手の黒剣がランスの側面に刺したまま『繋がり』、右手の白剣が盾の縁の部分を持ち裂くように抉っているもの、わずかに盾の角度を変える事で刃を引っ掻けるように『繋ぎ止めていた』。

「そっ!?!」

突然の出来事に一瞬だけ次の手に迷いが生じた俺を見逃さず、真正面からリディさんは蹴りを放ってくる。咄嗟にEバリアを張ってダメージを最小限に抑えつつ、俺は両手の武装を手放しながら後ろに後退させられた。

「痛っ・・・!」

「なるほどな。どうやらそれなりの即応能力はあるらしい。わたしの蹴りを咄嗟にEバリアで防ぐとは・・・貴様を鍛えた武芸者スレイヤーは相当な手練れのようにだ」

そりゃ教官は子供の頃からハンドレッドを展開出来ていたと言うしな。彼女の祖国じゃ実家は貴族に仕える騎士の家系だし、それも当然だ。

「しかし、今ので貴様の手から武装は離れた。これが何を意味しているのか、貴様自身、十二分に解っているのだろうか?」

ランスと盾に繋がった俺の双剣を地面に落とし、それを踏みつけて双剣を砕くりディさん。これで俺の攻撃手段を奪ったリディさんがランスの矛先を俺に向けて構え直す。「貴様の手に武装は無く、反撃の手段もない。これ以上続ける理由はないが、どうする？　まだ続けるか？」

「逆に訊ねますが、降参する理由がありますか？　事前にルールを確認した筈ですよ。『どちらかの武装が解除されるか、倒されるか』だと。今の俺はまだその『どちらにも当てはまっていない』んですよ」

リディさんの表情に疑惑の感情が浮かび上がる。観客席からも「どういう・・・ことだ・・・」等の困惑の声が上がりに始める。おいちよつと今のセリフを言ったやつ、それ絶対元ネタ分かって言ってるよね？

そんな事とはかくとして。文字通り、俺の武装が解除されていないのが何よりの証拠だ。武装は破壊されたが、俺にはまだ手段が残っている——否、『俺のハンドレッド』に限っては、元から手段など『幾らでもある』のだから。

「・・・確かにその通りだな。だがそれでも、次の一撃で貴様の終わりに変わりはない!!」肯定しつつ、エナジーによるブースト、<sup>アクセラレート</sup>加速で俺との距離を一気に詰めてくる——  
” 今だ!”

俺は瞬時に両手の中でエナジーを集束——それが先ほど形成した双剣と同じものを



”模造”すると、距離を詰めるリデイさんのランスをクロス字に薙ぎ払う！  
 「何っ!？」

突然の出来事に驚きを露わにするリデイさんに、俺は両手の双剣にエナジーを付与し、上段からの振り下ろしでエナジーの刃を生み出す——双剣から解き放たれた二本の刃がリデイさんに迫り、回避が間に合わないと悟った彼女は咄嗟に盾を前方に構えつつEバリアを展開。

二本のエナジー刃がEバリアに衝突した事で爆発が二回起こり、爆炎が彼女の全身を覆い尽くす。一瞬の出来事で周囲の雰囲気が一瞬沈黙で支配されたが、それも爆炎の中からリデイさんが姿を現した事ですぐに掻き消えた。

「くっ……馬鹿な、貴様の武装は確かに……!」

「そう思うのも無理はないでしょうね。何せ、俺は最初から『武装を展開していたわけじゃない』んですから」

「なんだとっ!？」

俺の言葉で再び驚きの声を上げる。観客の口からもそんな声上がり、周囲がどよめきに包まれる。

「俺のハンドレッドは特殊でしょ。幾重にも積み重なった様々なヴァリアブルストーリーの原子配列を整理した結果、このハンドレッドは特定の武器を”模造”して始めて武

装を展開出来る代物なんですよ」

「馬鹿な……では、貴様のハンドレッドの型は……!」

お察しの通り。俺のハンドレッドの型は、『シユバリエ型』ではない。

「俺のハンドレッドは、『一度見た武器をエナジーで模造する』——オリジナルの武器よりも幾分かは性能が落ちますが、どのような剣であれ、エナジーの許す限りは幾らでも複製できる——即ち」

俺の周囲に陽炎の様に揺れ動く微粒子状のエナジーが、両手の双剣の他にも、長柄の先に禍々しい朱色の矛が付いた長槍、銀色に煌く鏢の無い七尺余りの長刀、岩のようなゴツゴツとした武骨な大剣、そして金色に輝く刃を有した”聖剣”と呼ぶに相応しき神々しさを放つ長剣としてそれぞれ形を成していく。

「イミテ<sup>模</sup>ーション<sup>造</sup>型ハンドレッド、名称『衛<sup>エ</sup>射<sup>ミ</sup>矢<sup>ヤ</sup>』——これが俺のハンドレッドの本領です」

エナジーを消費して模造した武装が俺の周りに次々と地面に突き刺さる。

「さて。それでは副会長殿——」

「決闘デュエルの続きといきましょうか」

## 武器は使い方次第で化ける

「イミテーション型……だと……？ そんな型は聞いた事もない」  
模造

それはそうだ。何せ父さん達から聞いた話によると、俺のハンドレッドは『史上初』と言うのだから。知る筈も無い。

似たような特性の型ならいくつもあるだろうが、俺のハンドレッドの場合は運用的な意味で全く異なる。まあそれは追々話していくとして、だ。

「まあ俺のハンドレッドについては後でいくらでも説明しますよ。時間も押してますから、ね！」

そう言つて、俺は地面に突き刺した武器の中から朱色の長槍を掴む。両の手で構えながら、リデイさんに向かって突撃。一瞬で距離を詰めつつ、朱に染まった矛先を突き付けながら刺突を放つ。

「くっ！」

「まだまだあつ！！」

刺突を盾で防いだリデイさんに構わず、俺は槍を引いて再び突きを繰り出す。

盾で防がれ、槍を引いてはまた突きを繰り出す。その繰り返しで、俺はリデイさん

に反撃する隙を与えない。先の双剣での連撃と同じ要領で反撃させる暇を与えないように気を配りつつ、リデイさんの体力ヴァイタルを削いでいく。

説明が遅れたが、両手足に付いたヴァイタルリングから反映されるダメージはなにも直接攻撃を受けた時に限った話ではない。例えば防がれても、こうしてチクチク蜂のように刺していけば微小なダメージが入り、その分が体力ヴァイタルへのダメージとして蓄積されていく。現にもうリデイさんの残り体力ヴァイタルは7割を切っている。

先の双剣での攻撃やエナジー刃の爆発ダメージも含めれば、序盤でここまでダメージが入ったのは良い展開だろう。対する俺は掲示板に表示された自分の数値を見るだけでも、既に2割の体力ヴァイタルを失っていた。

僅かだけど、ほぼ五分の戦いと言つて良いだろう。後はこのままどれだけ持ち堪えられるかが問題だ。残り時間は十分余り……どちらかの体力ヴァイタルかエナジーのエンプティ、時間切れによる引き分けを狙うにしても博打打な事には変わりないな。

「どっ、せえいつ!!」

腹の底から絞り出した声と共に、リデイさんを盾ごと槍で大きく薙ぎ払う。後方へと押し返されたリデイさんに体勢を整えさせる暇を与えずに、俺は引き続き槍で攻撃を加える為に接近する。

「嘗めるなよ……新入生の分際でっ!!」

しかし、リデイさんは憤怒しながら足腰を力ませる。右足で地面を削りながらも無理矢理体勢を立て直した。そのまま左足を地面にめり込ませるように力強く踏み込むと、右腕のランスを正面から突き出した。

正面から向かってくるランスの矛先が、俺の朱槍の矛先同士で接触する。

直線で突き貫くためのランスと、面で切り払う槍とでは前者の方に分が勝り、俺の槍は正面から碎かれる。そのまま碎かれ続ける槍の柄から咄嗟に手を離し、追撃が来る前に俺は遙か後方に突き刺さったままの武器の一つを操作し、手元に引き寄せる。

手元に呼び寄せたのは岩のようなゴツゴツとした大剣だった。呼び込んだ俺の身の丈以上もある大剣の柄を握り、大きく横薙ぎに振るう。リデイさんは盾でそれを防ぐと、防いだ衝撃を利用して後ろへ飛び込み、敢えて距離を置く。

なるほど。一瞬だけ距離を離してそのままランスで追撃してくる気か。ならこのまま迎え撃つか。

「食らうがいい！ はあっ!!」

地を蹴り、刺突の構えでランスを突き付けながら真っ直ぐこちらへ突撃を仕掛けるリデイさん——彼女が地を蹴った瞬間、ランスに変化が現れる。

ランスの切っ先を基点に、円錐全体が螺旋を描くようにして装甲が開かれる。内側から覗いた彼女のエナジー色が輝く中、柄の接続部を基点にランス全体が回転を始めた。

リデイさんのハンドレッド《漆黒の天槍》ミッドガルドシユランゲの特徴は、あのドリル状に回転を加えた突貫攻撃に集約されていた筈だ。確かサベージの核コアをシエルターごと突き貫く事を前提とした戦闘を毎回披露していたと記憶している。原作の様子から俺自身が予想した見識だけでも。

そんな攻撃が俺に向かってくる。俺の身の丈以上もあるこの大剣じゃ防ぐどころか、一撃で簡単に砕かれるのは目に見えていた。サベージのシエルターと同じくらいの頑丈さを誇るこの大剣でも、あの攻撃で容易に突破される。

ならば、“もう一手”を増やすだけだ。俺はもう一つの武器を操作、左手に引き寄せる。引き寄せたのは金色に煌く聖剣だ。右手の大剣で防御を取り、左手の聖剣で攻撃する。見方によっては無茶な戦法だが、今はリデイさんの攻撃を防ぎつつ反撃する術としてはこれが最良だと思う。

左右の手でアンバランスな武器を携えた俺に構う事無く、リデイさんはランスの矛先を向けつつ俺に呐喊。対する俺は大剣の側面でガリガリと削られる音を聞きながらランスを受け流し切り、彼女の右側に躍り出た俺は左手の聖剣をリデイさんに向かって横薙ぎに振るう。

「くっー！」

「おっとおっ!!」

しかし、聖剣の一振りは振り抜かれた盾であつけなく弾かれ、代わりとばかりに横薙ぎのランスが俺の顔面を打ち砕かんとばかりに迫る。それを身を屈めて躲しながらバックステップで距離を離す。

さすがに実戦経験者とだけあつて対応能力はかなりあるな……。対する俺は実戦未経験のトーシロ。それを考えると何でこんなことになつてしまつていいのか理解に苦しむな。誰だよ、こんな面倒な事態に発展させた馬鹿は。言うまでもなく俺です。

さて、真面目な話、ここからどう攻めようか迷う。俺の残り武器は、さつきは槍が破壊されたから、残るは四種類……。いや、さつきのすれ違いで大剣の峰が豪い程抉られてる所から鑑みるに、防御に使うにしても攻撃に使うにしても、一撃で完全に砕け散るだろうから実質残るのは三種類だけか。

対するリディさんの武装はまだまだ健在、ランスと盾が少々傷ついている程度で完全な無力化、つまり武器破壊を狙うのは実質不可能だな。残つた武器でどこまで押し通せるか。

「何をしている!!」

と、そんな考えを巡らせているとリディさんの呼び掛けでハツと我に返り、突撃してくるランスの一撃を大剣で受け流しながら防御する……。て、ああつ!! 大剣が砕けた!! 咄嗟にこれで防いだせいで大剣はお亡くなり……。え? また作り直せばいいん



じゃないかって？

残念。俺の武器は確かにすぐに作り直す事は出来るんだけど、さつき武装を構築するのに大分エネルギーを消費した上、今から作り直すにしてもわずかの時間がかかるからそれをするのも難しい状況なんですわ。かと言って作り直してる間にリデイさんが攻撃を仕掛けてくる可能性の方が高いからしなだけですけど。

「これでまた一つ、貴様の武装は減ったな。残るは三つの武装だけだが、今しがたわたしが破壊した大剣・・・あれの強度を鑑みるに、貴様の武装はそこまで強度は高くないのではないか？」

あれま、今の流れでそこまでわかっちゃうの？

お察しの通り、俺の武装はその構造上は模造を得意とするけれどその実、模造した武装に関しては今でも不安が拭い切れない面が少なからずある。その一つが強度だ。

敢えて詳細は省くけど、さつきの槍や大剣の脆さを見ればわかる通り、ほとんど見掛け倒しな側面が強くて碌に武器としては未だに使えない模造品だけど、それもヴァリアブルストーンの構成プログラムを整理や構築を繰り返していけば、それらも解消されていく筈と、父さん達が言ってた。

「・・・まあ、一応はその通りです。さつき破壊された槍と大剣に関して言えば、”あなたを威圧する為に”模造した、ただの見せかけです」

「やはりか。まさかあの程度で気圧せると思われていたとは、わたしも嘗められたものだな」

「別に嘗めちゃいけませんよ。手数で言えば俺の方が圧倒的に有利ですからね。まあ尤も・・・こんなあつさりと破壊されるとは思ってもいりませんでした」

リデイさんを威圧する為に作りだした模造品だった訳だが、まさかあんなあつさりと逝くとは思わなんだ。まだまだ活躍させられると思つてただけだな。これが未熟者と熟練者の決定的な違いってやつか。

「手数で言えばわたしに勝てる・・・いや、引き分けに持ち込める、などと思つていたのだろが、浅はかだったな。そんな考えを持つた貴様ではわたしにはおろか、そこらの新入生にすら負けてしまうぞ」

それを言われるとぐうの音も出ない。実際問題浅はかな考えだったことは薄々感じてはいたけれども。

「そ、それは言い過ぎなんじゃないですかね？　べ、別にこれなら勝てなくとも引き分けに持ち込める？　なんて考えは全くこれっぽっちも微塵も思つてなんかいませんけれど？」

「声が上がって聞こえてくるんだが・・・まあ良い。そろそろ興奮めもいとところだ。これに懲りたら、もう我々に齒向かおうなどという態度は取れないように幕を引くとしてよ

う」

おやま。もう終わらせる気であるよ、この人ってば。俺からしてみればそれも十分浅はかな考えだと思っただけだね。

「先輩。いくら何でももう終わらせると言うのは呆気無すぎませんか？ まだ試合は始まったばかりなんですから、もうちよつとやりあいましよや。俺も体が火照つてきたばかりですしね」

実際問題体にエンジンが掛かったばかりで温まつてきたので早く動きたくてしようがない。具体的に言うとうと真冬の真つ只中に駐車させた車の中が冷凍庫かと言うくらい冷気が車内を満たし、エンジンを掛けて暫く走つた後の温かい温度が車内を覆い尽くすような、そんな感覚だ。あれは地獄から天国だね、まさに。

え？ それなら炬燵の中に入ったと言つた方が解りやすい？ 実は俺もそう思つた。何で車で例えようとしたのかね？

「戯言を。もう貴様には五分・・・いや、三分も時間を掛けてはやらん。早々にケリをつけてやる」

そう宣告をして、リデイさんはランスを携えて俺に向かつて一步を進み出る。

これ以上の問答は不要とばかりに敵意を滲ませた瞳が俺の姿を捉えているのが、雰囲気気だけでも認識できる。本当に三分もかけて俺をなぶり倒そうとは思っていないみた

いけど、同時に完膚なきまで俺の心をへし折ってやろうという意気込みは感じ取る事ができた。感じたくなかったけども。

それでも・・・あの目から逃れられる事ができないのは明白、つまり回避不可能であるという事。これは流石に真面目にやらないと駄目か。最初から真面目にやれというツツコミは無しの方向で。

俺は聖剣を八相の構えでリディさんの動きに備える。ここから考えられる彼女の動きは正面からの呐喊・・・と、ドンッ！ という爆音と共に地面を蹴り出した彼女が本当に正面から突撃してきた！

「——はあっ！」

「ふっ！」

短く吐き出された息と共に繰り出されたランスを、俺から見て左側に逸らすように聖剣で弾く。持ち直されたランスの一突きが再び正面か来るが、それを冷静に見てはいなすように聖剣で受け流していく。

突き貫く事が専売特許のランスと取り回しに優れた剣とでは、いくらか手数ではこちらが有利だ。問題は俺の聖剣の強度だが、あと幾分かの余裕はあるが長くは持たない。防戦一方と言うのも時間を掛ければ掛けるほど不利になるのは此方だ。となれば、ここからは俺も積極的に攻めていく。

俺の夢の為、まずはシエルダンと劉の処分を取り消す為に、出せるだけの全力で抗う。追撃するランスを弾いては受け流すこと数合目。俺は柄を握る両手に力を込め、正面から迫るランスを上打ち上げるようにして叩き付ける。

「ぐうっ・・・！」

打ち上げた時の衝撃が伝わったのか、リデイさんは小さな呻き声を上げつつもその場に踏みとどまる。その隙を見逃さず、俺は一步前を踏みしめる。

振り落とされた聖剣の一閃が盾に防がれるも、その一撃が僅かに盾の表面に傷を付けていた。手応え有りだ。

反撃の隙を与えず、俺は切り返した黄金色の刃で盾に斬撃を与えていく。一撃毎に細かい傷が盾の表面に浮かんでいき、次第に盾全体に亀裂が走っていく。

「っ・・・のっ！」

盾の異変を感じ取り、リデイさんは防御を捨てて反撃に移る。破壊される前に盾を投げ捨て、ランスを突き出してくる。盾を捨てる判断が早い・・・とすれば、ここからは純粹な力量勝負になるな。

ランスと聖剣が互いに一本ずつ（俺はまだ二種類残ってるけど）。突き出されるランスを聖剣で受け流しながら開けた左手でランスの側面を握りしめる。左プロテクターの鋭い指先がリデイさんの得物を挟み、動かさないように抑えながら右手の聖剣をり

デイさんの頭目掛けて振りかぶる。

え？ 刃物で頭狙うのは危なくないかって？ 向こうは実戦経験者なんだ、きつとEバリア張って防御してくれるからダイジョブダイジョブ。

そんな俺の考えを余所に、正確に捉えた瞬間『取った！』と思った矢先、自らの得物から『手を離し』、海老反りの要領で聖剣の一太刀を寸での所で回避された。

「うっそだろオイ!？」

驚いているのも束の間。海老反りから姿勢を戻したりデイさんは再びランスの柄を握りしめると地を蹴って俺の腹目掛けて膝蹴りを叩き込んできた。

「ツ・カハツ！」

地を蹴った時の勢いとランスに体を引き寄せる勢いとが合わさって、モロに一撃を食らった俺は腹に詰まった物が肺の空気と一緒に吐き出される感覚に襲われるも、一瞬唾を飲み込んで無理矢理抑え込む。その一連で俺はランスから手を離していた。これ以上得物を掴んでいると打撃だけに留まらないと判断したからだ。

俺の一太刀を回避しただけでなく、カウンターばりに打撃を与えてくるとは……やっぱりこの人は強い。さすがは生徒会。軍人家系の血筋なこともあって、判断力と対応力に優れている上に力量の違いを思い知らされる。

「ふむ、浅かったか」

距離を取る俺を一瞥しながらリディさんは惜しいと言わんばかりの表情をしながら呟いた。浅いも何も腹の物が出そうになったんですががが。

俺が出そうになっている物を飲み込んでいる最中、リディさんは再び突撃。何度目になるか忘れたランスの矛先が俺の喉元を貫かんと差し迫ってくる。出そうになった物もギリで押さえられたんで聖剣でそれを軽くいなしながら、突き出されるランスの下を滑らせるように聖剣を振るう。

ギヤリギヤリと金属同士が削り合う音が響く中、聖剣が向かう先はリディさんの腹部だった。

「っー」

リディさんも聖剣が向かう先を察知したのか地を蹴って、飛び上がる。彼女の腹に向かっていた聖剣は空を裂き、間一髪のところ回避された。が、そうなる事は分かっていた。リディさんの目が聖剣の向かう先に向いていた一瞬を見逃さなかったから。回避されることは確信していた。

回避したりディさんは真後ろで着地しながらランスを振るってくるだろう——それを見越して、俺は振り向きざまに聖剣を切り返しながらいつでも応戦できるように備える。

振り返ると案の定、リディさんはランスを突き出していた。俺が思っていたよりも早

く地に足を付けていたが、その程度で動揺するわけにもいかない。動揺するならさっきの海老反りだけで十分だ。

切り返していた聖剣でランスを弾き、反撃とばかりに斬りつける。彼女も同じことを考えていたようで、ランスで防ぎながら弾き、同様に返してくる。

突かれ、防ぎ、斬り、防がれ。そんな攻防を幾度も続けると、流石に体力がもつ筈も無く。俺とリディさんはほぼ同じタイミングで互いに息を切らせ始めていた。

「ハアッ！ ハッ……どうしました？ 三分も時間はかけないとか言ってますんでしたっけ？」

「ハア……ハア……黙れ！ 宣告通り、もう終わりにしてやる！」

俺の言葉に苛立ちを募らせたのか、リディさんの周囲に異変が起きた。彼女の躰から溢れんばかりのエナジーが放出され始めた。

陽炎の様に揺らめく透明なエナジーがランス全体に収束されていく——同時に、ランスが開いてドリル回転を始めた。さながら残るエナジーを余さず込めて突貫に集中し、恐らくガードするであろう俺を防御ごと破ってダウンさせる腹積もりなんだろう。流石にあれだけのエナジーを込められたら、さきの攻防で6割にまで削られた俺の残り<sup>ヴァイタル</sup>体力も全て削がれるに違いない。それほどの威力があの一撃にあると、俺は直感で感じ取る。



ならば当たらないように回避するまで……と言いたいところなんだけど、流石にこの決闘デュエルが始まってからこれまでの短い経験上、リデイさんが当てないという確証はない。実戦経験豊富でありこれまで幾度となくサベージを屠ってきた彼女の実力は、はっきり言って指折りだ。そんな彼女が『目標を外す』などという失敗はまずしない筈だとすれば、俺が取るべき選択肢は自ずと絞られてくる。

「エナジーの大半を込めた最大の一撃、ですか。ならば俺も……それなりにお応えしましょう」

俺の言葉の真意が掴めないのか、リデイさんは訝し気に首をかしげつつ、俺を一直線に見据える。

対する俺は右手を前に突き出した。聖剣がリデイさんに向いて掲げられているが、何も攻撃する為に向けたわけじゃない”。

意識を集中——右手を基点に、質量として固定させていた聖剣のエナジーを分解させる。離れた位置に突き刺さった長刀や双剣を俺の前に引き寄せつつ、それらの形状を固定させていたエナジーも分解し、右手に集束。

淡い光が右手に宿る中、突き出した右手の先に一輪の蕾のような物体が現れる。手元に現れたそれは次第に花が咲くように開いていき、蕾だったものが完全に開かれるとそれを基点に『三枚の花弁』が展開される。

それら三枚が俺のエネルギーである事を意味する色を放っていて、眼前に三層の壁となつてリディysonとの間を遮っていた。

俺のエネルギーで模造した双剣と長刀、聖剣それぞれに込められたエネルギーを使って形成了した盾。その名も――

「熾<sup>ロ</sup>天<sup>ア</sup>覆<sup>イ</sup>う七<sup>ア</sup>つの円環<sup>ス</sup>」

某赤い弓兵ご用達の盾まんまである。七つと書いて実際は三枚しかないけど、そこるところはツツコミは無しの方向で。OK？

「大型の盾・・・だと？ そんなものまで持ち合わせるか・・・だがっ！」

近接武器のみしか模造できないと踏んでいたのか、俺が展開したそれに驚きを隠せないリディysonさんが呟く。

「その程度で防がれるほど――わたしの攻撃を甘くないぞッ!!」

しかし、いつまでも驚いている訳にはいかず。リディysonのランスの回転が最高潮に達すると、激しい唸り声を上げるランスを真正面に突き出しながら突撃――彼女の誇る最大の一突きが、俺が誇る最強の防御に向かってくる。

ランスの矛先が接触したのは第一の壁。三層の壁から成る俺の盾を突破するには、ま

ずは順に破壊して第二第三の層を破壊していかななくてはならない。しかし、第三となる最後の壁はそう簡単には突破する事は難しい程、堅牢な造りとなっている筈だ。

この盾自体は先程言ったような問題点には当てはまらず、最初から盾として機能するよう設計してもらっている。

この盾が父さん母さんに相談して設計・構築してもらったプログラム通りに機能しているのなら、最後の壁は分厚い壁となつて、リデイさんの突きを防いでくれるだろう。まだ試したことはないけど、きつとクレアさんの砲撃にも耐えられるようになっている筈だ。・・・多分。

だからと言つて他の壁が脆いなんてことはない。最後の壁とはいかなくとも、それだけでも負けないほどの強固な壁が合わせて三層にもなつているのだ。そう簡単に突破されることなんて滅多にないだろう。

「おおおおおっ!!」

しかし。それはあくまでも『通常の攻撃』ならばでの話だ。

今リデイさんが破壊せんと押し込むように突き出しているランスの回転がさらに唸りを上げている中、俺は見た・・・一枚一枚が強固な壁となつている筈の、第一の壁にヒビが走つた瞬間を。

それに伴い、ランスの回転もさらに激しくなつていくとヒビが第一層の壁のほぼ全体

に及んでいく。とすれば、後は必然的に――

「まずは一枚!」

声と共に、さらに突き出されるランスの先端が第一の壁を完全に破壊した。そのまま第二の壁にランスの矛先が突き進んで・・・ツ!?

「ハアアアアツ!!」

(おいおいおい、さつきよりも勢い増してるのは気のせいですか!?)

俺の考えた通り。リデイさんのランスの回転は勢いを落とすどころか、さらに激しさが増しているように感じた。

何故、あれほどまでのエナジーが減るどころか増えているのか疑問に思う。リデイさんの残りエナジーは6割程度しか残っていない筈。それがこうして第一の壁を破壊して、そのまま第二の壁すらも破壊せんとさらに勢いを高めていく。

しかし、全てのエナジーを費やしてまで迫ってきた彼女のエナジーでは、確かに第二の壁“まで”は破壊できると思う。但し、それで第三の壁を破壊するというのは無理に近い。仮にできたとして、堅牢な第三の壁を突破するにはエナジーが足りない筈。

過去に幾度と無くサベージを屠ってきた経験豊富な彼女が、そんな計算ミスをするとは思えない。だが現に、彼女の得物は内包するエナジーが増してきていると実感できる。まるで『余所からエナジーを供給している』ような・・・

(? 『余所から?』)

現状、リデイさんと相対しているのは俺だけだ。互いに武芸者——俺は『見習い』と付くけど——ならば、共通するのはエナジーくらいだ。それでいて実戦経験豊富な彼女ならば、あるいは。

俺は正面に掲げた自身の右手の先、その手元に展開した盾を見やる——そこで俺の表情は驚愕を露わにした。自分でも自覚できる程の筋肉の強張りを感じながら、俺は目の前にある現実を言葉にすることができなかつた。

「ほう……この状況でも冷静に事態を把握するとは大した奴だー」

相対するリデイさんが感心した口調で言う。それも当然だろう。何せ『盾を削っている際に生じた粉状のエナジーが、ランスに吸収されていく』なんて光景を目の当たりにしたら、誰だつて言葉にできない筈だ。

リデイさんのやっつてゐることは実に単純な事だ。高速回転するランスで俺の盾を削り、その際に生じたエナジーの残滓をランスが吸収して勢いを増加させているだけに過ぎない。

やっつてゐる事は単純に見えるだろうが、これを戦闘中にやるには相当な熟練度と集中力が必要になる筈。ランスと盾が接触している箇所を一ミリもずらさず、一点に集中し

てただ穴を開けるが為に他から足りないエナジーを補う——武芸者スレイヤー見習いの俺から見ても明らかな高等技術を前にしては、もはや感服の念を抱かざるを得ない。

原作ではされる筈も無かった戦い方に驚いている中、リ Дейさんは勢いを増したランスを更に押し突きながら、俺の言葉を持たずして言葉を続ける。

「わたしに……までさせた事は正直に褒めてやろう！　だが……最後に勝つのは、このわたしだっ!!」

その勝利宣言を証明するかのようには、俺の盾の二層目が突破された。このままだと確実に三枚目も突破されてしまう……そんな予感を裏付けるように、ランスの切っ先と接触した第三の壁にも次第にヒビが走り始めていた。早すぎだろオイッ!?

「コン、のおツ!!」  
「む!?!」

俺は余るエナジーを費やして第三の壁の修復にかかる。走っていたヒビが徐々にだが押し返され、元通りの壁に修復されていく。

防いでいる最中に修復できるか試したことなんてなかったけど、とりあえずは出来てよかった。これでまだ何とか出来る……筈。

「おおおおおっ!!」

ランスの回転が更なる唸りを上げ、俺は盾に亀裂が生まれる度にその修復を繰り返して、互いに腹の底から絞り出すように雄叫びを上げていた。

ここを突破されたら、ほとんどのエナジーを費やしている俺が僅かな差で敗北する。反対にリデイさんのエナジーが尽きれば奇跡的に俺の勝利。だけど互いにエナジーが尽きれば……ええい、今は目の前に集中しろ俺！

相手は本気で向かってきてるんだ。俺も全霊を掛けて向き合わなきゃ失礼だろう！  
とにかく耐えろ、俺！　ここで踏ん張らなきゃこの戦いに赴いた覚悟が無駄になる！  
人を助けられる『正義の味方』になる——その夢を叶える為に……何よりも、困っているシエルダンと劉を助ける為にも!!

「負けて……たまるかあッ!!」

最後となった盾にエナジーをさらに付与し、防御に集中する。一点突破を仕掛けるランスの切っ先が当たる点に集中してエナジーを収束——こうすれば突破するのも難しくなる筈だ！

上方の掲示板に目をやれば、互いのエナジーはぐんぐんと減り続けていく。よし、このまま押し切れれば最悪は引き分けに

「――残念だが」

『持ち込める』・・・そう考えていた俺の思考を読んでいたかのように、リデイさんの言葉が思考を遮る。

先程とは打って変わって変わって淡々とした口調のせいか、頭の中で警鐘を鳴らしたような錯覚を覚える。



「さきの宣告通り、この勝負——わたしの勝ちだ」

変わらぬ勝利宣言を裏付けするかのようになり、リディさんのランスが”俺の盾を貫通し、破壊していた”。

一点に集中していたエナジーを勢いのままに削り取り、その残滓を吸収して爆発的な勢いで加速したランスが盾を貫いた。

削り取るというただそれだけの行為で、俺が唯一持ち得る最大の防御を突破された。その現実が、俺の心臓を抉るような勢いで心に深く刻みつけられていく。

「——ッ!!」

驚きを隠せない俺の眼前にまで突き付けられたランスが寸前で止まり——直後、決闘デュエル

終了を示すブザーが鳴り響く。

『——試合終了。勝者、リディ・スタインバーグ』

実況席に座るエリカさんの淡々とした言葉がマイクを通して会場全体に設置されたスピーカーから流れてくる。結果は、残ったエナジーが僅かな偏差でリディさんに軍配が上がり、俺は残存エナジーがゼロという事で勝敗が付いたのだ。

その直後に観客席からかなりの歓声が沸き上がり、誰もがリディさんの勝利を讃えていた。しかし、そんな中でも俺に対する称賛の声は意外にも少なくなかった。

「上級生相手に善戦したなー」とか、「残念な結果だったが頑張っていたぞー」とか、そんな声が耳に届く。ふと振り向くと、観客席から見えていたであろうフリッツとサンテミリオンが揃って親指を突き立てた拳を突き出していて、その隣に座っていたシエルダんと劉が2人に同調するようにしきりに頷いていた。

「・・・ハハ・・・別に善戦できていなかっただろ」

否定的な言葉を呟く俺の言葉を聞き届ける者はこの場にはいないが、まあ、一応全霊は出したと思う事にする。

しかし、やはり全霊は出しても当初の目的を果たせなかったのには悔しさが残る。

当初、俺はこの試合を引き分けにまで持ち込んで、二人の放校処分を考え直してもらうのが目的だった。

原作では如月が途中でその身に宿る力——「ヴァリアント」の力を覚醒させてクレアさんとの試合には敗北したが、試合前にクレアさんが自らに課した「全身武装はしない」というルールを破った事で試合結果は引き分けと言う形で収束し、2人の放校処分は無かった事にされた。

だが、『俺』というイレギュラーの存在でその確定された結果にどう影響を及ぼしたのか、見当がつかなかった上にリデイさんとの決闘デュエルが加わって——これだけでも十分に原作崩壊を起こしているのだ。2人の放校処分が確実に決定してしまうという事態もあり得たのだ。

二次創作で見られる原作改変——『転生者』と言うイレギュラーが混じれば、原作とは違う結果に繋がってもおかしくはない。俺は『そんな存在』なんだ。だから俺は先程クレアさんに「敗北以外の結果ならば再考の余地あり」と確認と言質まで取ったのだ。

俺と如月、『2人揃って敗北以外の結果を示したら』という目的が達成できなくなった以上、シエルダンと劉の処分は決定されたも同然だ。

かなり悔しいけど、ここは我慢して飲み込むしかない。俺にはもう悪足掻きする事も出来なくなつたのだから。

歓声が沸き上がる中、俺はリデイさんに一礼して踵を返し

「ちよつと待て」

退場しようとしたところでリディイさんに呼び止められる。振り返らないように横顔だけを見せるようにリディイさんに向けた。

「昨日の様子から鑑みるに、貴様はあの2人とは何の接点も無い筈だ。そんな貴様がこの決闘デュエルに赴いた覚悟を問いたい」

あの二人・・・と言うのは、言わずもがなシエルダンと劉の事だろう。確かに俺とあの2人とは何の接点もない。直接話したのは昨日の入学式の後が初めてだった。他人同士の筈なのに、何故そこまで2人の肩を持つのか——そう言いたいのだろう。

そうだな・・・具体的に言えば俺自身の夢を叶える為、まずは「2人を救って見せろ」と言ったクレアさん達にそれを証明する為と言うのが主な理由だが、それとは別にもう一つ理由がある。なに、他愛のない事だ。

「——単純な事ですよ。ただ、同じ学び舎でこれから時間を共にするんですから、入学早々困った状況になった彼女達の助けになってあげたい・・・それだけです」

「まあ・・・それも無駄に終わっちゃいましたけどね」と小さく呟く俺の言葉に、「・・・

「そうか」とだけ返したりデイさんに構わず、俺は如月とエミールが待つ控えに向かう。

「アキラ、残念だったね……で、でも、戦い自体は悪くなかったはずだよ！ 結果が結果だったとはいえ、アキラはよく奮戦したと思うよ、うん！」

「仕方ないって。相手は実戦経験豊富で先輩なんだしさ。そんな人を相手に、お前は頑張ったよ」

エミールと如月が励まそうと声を掛けてくる。そう言ってくれるのはありがたいけどさ、今はとにかく、悔しさが勝って気分を上げられない状態なんだわ。

「ありがとな、2人とも。俺はもう下がるけど……残る会長との戦い、頑張れよ」

「あ、ああ……」

「……アキラ」

傍から見たら相当意気消沈しているのだろう俺の表情を見るや、2人はそれ以上言葉を掛けてこなかった。

控えから去った俺は更衣室で制服に着替えると、如月の試合の中継に耳を傾けることなく闘技場から出て行つた。……目指すは男子寮の自室だ。

★☆☆

PDAで開錠した自室のドアを開き、おもむろに制服の上衣を脱いでデスクに設けられた椅子の背凭れにかけるように投げた。が、完全に乗る事はなく、ズルズルと滑り落ちて床に落ちてしまう。それに目を向けずに壁際のベッドに倒れ込むようにして身を沈める。

思い返すのは、今日の決闘<sup>デュエル</sup>の結果だ。経緯はどうあれ、俺はリデイさんを追い込みつつも（実際はそういう風に見えていただけかもしれないが）冷静に返されて最終的に敗北した。

結果が結果な為、残るクレアさんと如月との決闘<sup>デュエル</sup>がどうなるにしろ、2人の放校処分は決まっているようなもの。これは覆しようがない事実だ。

結局は、今日俺のしてきた事は全て無駄になった。その事実には俺の中にある悔しさが次第に募っていく。何よりも、自分の力の不甲斐無さにどうしようもない憤りが強くなっていく。

「ツ……悔しがったところで、現実は変わらないのにな……クソ」

悪態を付きつつ、俺は窓の外から照り付ける太陽の光を背に浴びながら、ベッドに浮かんだ自らの陰に塞ぎこむようにして縮こまる。そんな状態で何分もいたせい、先程までの激しい運動のせいで次第に眠気が募っていき、俺はいつの間にか、深い眠りについていた。結局その日は、翌朝になるまで俺が目覚ます事はなかった。

その日の夜、床に落ちた上衣の胸ポケットにしまっていたPDAの着信音に気付かなかった。

原作と違う展開に向かったと思ったら、原作撮りの展開  
に進んでいた。な、何を言ってるのかわからねえと思う  
g ( r y

リデイさんとの決闘が前日となっていた翌朝。どうやらあのまま決闘の疲れとかで  
爆睡してしまっていたらしい。気が付けば朝方の8時を過ぎていた。小鳥のチュン  
チュン具合がそれを示している。

だが今の俺は昨日晩飯を食ってないから腹の虫が喧しい。グギユルルとかグボボ  
ボボとか鳴りっぱなしでとにかく喧しい。後者は何か違う意味な気がしなくもないが  
わりとどうでもいい。問題はどうかやってこの腹の虫を鎮めようかと悩むうち、昨日部屋  
に戻った際に落とした上衣を拾って胸ポケットに仕舞っていたPDAを手を取った。

おっと、どうやら俺が爆睡していた間に全校生徒に向けての通知が発信されていたら  
しい。何せここに来て初めての通知なんでどんな内容なのか楽しみだったりする。  
さーて、どんな内容かなー、と♪



『ノア・シエルダンと劉<sup>リュウ・シユエメイ</sup> 雪梅の放校処分の撤回について』

「なん．．．．．だと．．．」

目を疑う文面を見て、俺は思わず目を擦ってもう一度文面に目を通す。

『ノア・シエルダンと劉<sup>リュウ・シユエメイ</sup> 雪梅の放校処分の撤回について』

一度目と変わらない文面に多少の動揺を覚えつつも、俺はその文面に続く字面に目を通す。

どうやら昨日の決闘結果は俺の後に続いたクレア会長と如月の決闘は原作通りに進み、引き分けとなったようだ。

決闘の最中に如月が『全身武装』をしてみせ、対するクレア会長も同じく『全身武装』で対抗。開始前にクレア会長は自身に「全身武装はしない」という追加ルールを設けるもそれを破り、結果は原作通りに進んだようだ。

ここで脚注を加える。『全身武装』と言うのは自らのエナジーを一気に解放し、通常のものよりも武装を強化した状態の事を差す。最初にハンドレットを展開した状態の事を『単純武装』と呼び、たとえ見習いから抜け出せても基本的にここから始まるのは言うまでもない。

全身武装の力は強大だけど、肉体にかかる負担も大きくて長い間使用できないのが難点。端的に言えば「切り札」とも言える。

原作では会長と如月の一騎打ちだったのが俺と言うイレギュラーが加わったせいでリデイさんと戦い、俺は敗北という残念な結果に終わった。が、それがどうして二人の放校処分の撤回となったのだろう。

あの時、クレア会長は言った——「二人」が敗北以外の結果なら、処分を考え直す」

と。だが結果は俺が敗北した事で再考の余地はなくなつた筈だが・・・如月がいたからなのか？ 問題はそこか。やはり原作主人公だからか？

「・・・・・・・・・・・・・・・・クソ、訳が分からん」

俺の存在で原作と多少は違う道筋に進んだ筈なのに、結果は原作と同じ展開に・・・これでは俺の戦い損じやないか。別に俺も巻き込まれに行く必要もなかったんだ。あのまま傍観を決め込んでいたらそのまま・・・いや、俺自身が選んだ道だ。今さらどうこう言うのも筋違いだな。

この件についてはもう考えるのを止そう。もつと根本的な部分が解明できない今、この場で考えてても仕方のない事だ。

とりあえず今は腹ごしらえだな。食堂はもう開いていた筈。昨日から制服着たままで寝ちまったから、シャツがしわくちやだ。替えのシャツはあるから良いとして、さてジャージは何処か・・・お、ベッドの下の収納スペースに仕舞われてる。まるで実家の俺の部屋みたいな配置だ。まあただの偶然だろうな。気にせずこれに着替えよう。

★☆☆

ジャージに着替えた俺はPDAをポケットに仕舞いながら部屋を出る。

よく考えるとルームメイトである筈のフリッツがいない事に今更気付いた。窓際のベッドは多少の皺が残っていたから、多分俺が寝ている間に帰ってきていたのだろう。

あいつめ、どうせ帰ってきてたのなら起こしてくれても良かっただろうに。：：まあ、昨日が初対面だったのだから、遠慮したのは考えなくともわかる事だけどさ。俺の数少ない友人なんかは平日休日祝日に関わらず実家の俺の部屋に向けて「突撃！隣の朝ごはん！」とか言つて凶々しくも朝ごはん要求してくるついでに朝起こしに来るんだぞ。別には家は隣同士じゃないけども。そんな度合いで朝起こしてくれてもいいんだZO☆：：いや、やっぱ無理だわ。あいつのような存在が二人いるとか考えただけでも鬱々としてくる。正直そんな毎日から解放されてスッキリしているのだからこれ以上は勘弁願いたい。わりと切実に。

「アキラー！ こっち来いよー！」

と、そんなどうでもいい事を考えながら食堂に着くと、俺の到着に気付いたルームメイトことフリッツが離れた所から声を掛けてくる。

大声だったせいも、食堂にいた殆どの生徒が一斉に俺に向けて視線を向けてくる。一瞬だけビビったが、別にビビるほどの変な眼差しを向けられた訳じゃないので悟られずフリッツと、同席となっていた如月とエミールに向けて朝の挨拶を交わす。

「おはよう、3人とも」

「おはよう、四宮」

「アキラおはよー」

「おはよーさん、昨日はよく眠れたみたいだな」

3人がそれぞれに挨拶を返してくれる。朝って感じがするね。

「事が事だからな。さすがに気張り過ぎた」

「お疲れ様だね。何はともあれ、元気になつてくれて良かったよ」

エミールが心配してくれたような体で言葉を掛けてくる。そこまで落ち込んでるよ  
うに見えたのか、決闘後の俺デュエルつてば。それはちよいと気恥ずかしいな。

「つうか俺としては処分撤回についてが一番気になつてる所なんだけどな」

「あー、あれな。俺も通知が届いて見た時は驚いたさ……ていうか、多分殆どの生徒が  
同じ反応したと思うぞ?」

だろうな。さつきから他の生徒からの視線をずっと感じているけど、それはきつと昨  
日の決闘デュエルの当事者である俺や如月に向けてのものだと思ふ。ぶつちやけ視界に映るそ  
の他大勢の生徒からのチラツチラしてくる様子がウザったいっただらありやしない。

「ま、何はともあれ無事に済んで良かった。あのままじゃ二人が可哀相だったからな。  
四宮だつてそう思うだろ?」

「ん? そうだな」

如月の言う通りだ。いくら撤回の理由が思い至らないとしても、どんな理由があつた

にしろ2人が無事で済んだなら言う事はない。

俺は同調しつつ遠く離れた位置にある広いテーブルの上にあるサンドイッチに目を向ける。もうお腹が空いて力が出ないから返事のボキャブラリーも欠いている。お、照り焼きサンド発見。

「・・・さつさと取りに行つて来いよ」

「良いのか？ んじゃ遠慮なく」

フリッツからGOサインをもらったので俺はなるべく早足で目的の物を取りに行く。

「へー。これは中々」

そこには色とりどりのサンドイッチが並んでいた。

タマゴにツナ、野菜にカツと、コンビニとかでよく見る代わり映えの無い品々だが、よほど丁寧に作られているのか素人目から見ても中々に綺麗だった。使われているパンもよほど素材の良いものだろうからそれも当然だろうけど。

これを作った人は相当腕の立つ人なんだろうなあ。俺も人並みに料理はできるけど、流星にここまで綺麗なサンドイッチは出来上がらない。これからそれを食そうとしている事に引け目を感じなくもないが、むしろこれらを食さないこと自体が許されない事であつて自然と手が伸びていくのは当然の事なのだ。ただサンドイッチを取るだけなのに何を躊躇しているのかねえ、俺は。

腹を空かせ過ぎているせいかな、自分でも何を考えているのかわからなくなってきた。おのれ、腹の虫めが。すぐに満足させて黙らせてやるからよおゲツヘツヘツヘツへ。

「ねえ君。さつきから突っ立っているだけみたいだけど、取らないのかい？」

ふと声を掛けられ、俺は反射的にそちらに振り向く。

そこには短い金髪のちよいと小太りな少年が立っていた。俺の着ているジャージと同じものを着込み、ふくよかなその体型はあまり武芸者らしくないと感じる。彼の手には一枚のトレイが乗っていて、これからおかわりでもするのだろうかサンドイッチを取る気満々だった。て、俺が邪魔で取れないのか。

「すまん。邪魔をしていたみたいだな」

「平気だよ、サンドイッチは逃げないからね。たしか君は四宮って言ったっけ？ 昨日副会長と決闘デュエルしていた。僕は同じ武芸科の一年で、名前はアルフォンス・ブリュスタット。フランソワ王国出身さ。これからよろしくね」

「ああ、ブリュスタットだな。知っての通り、俺は四宮アキラ。出身は皇国ヤマトだ。こちらこそよろしく」

ブリュスタットから自己紹介交じりの握手を求められ、俺も改めましての意を込めた自己紹介で握手で返す。原作キャラとの邂逅はこれで何人目だろうか？ ぶっちゃけ数えてないけどな。

「昨日はすごかったね。まさか生徒会の副会長とあそこまで張り合える人がこの一年の中  
中にいたなんて思わなかったよ。周りの生徒達も釘付けだったよ。結果は残念だった  
けど、まあ相手が相手だからね。敗北は仕方ないよ」

「そうだな。俺自身もそう思う」

昨日の決闘デュエルを観客席から見ていたプリユスタットがそう感想を述べて、その当事者で  
ある俺は短く端的に返した。そこまで張り合えていたか？ むしろ原作知識があつた  
上であんな戦術を取ろうとしたんだけど・・・結果は散々だったからなあ。結局俺程度  
の実力じゃ熟練者の足元にも及ばない事が身に染みてよくわかったし、これからはあま  
り逆らわない方針でいこうと考えてます。ひと、これを負け犬思想と言う。

「まあ、それよりもあの二人が処分にならなかったのは奇跡だね。やっぱりあの歴代一  
位君のおかげなのかな？」

「如月の事か？」

プリユスタットの呟きに俺は訊ねる。「そうだよ」と頷きが返されつつ彼は言う。

「君と副会長の決闘デュエルの後、あの歴代一位君が我らが会長、クレア様と戦ったじゃないか。  
君は見てなかったの？」

「・・・まあな。リデイさんとの戦いで疲れてて、終わったら部屋に戻ってた」

「そっか。いやあ、見物だったよ。何せ初めての戦闘で彼が全身武装をしちゃうんだも



ん。君と副会長の戦いが霞んで見えちゃうくらいに」

そら当然だわ。何せ俺と副会長はまだ全身武装なんかできないからな。俺の全身武装はいつ開花するのだろうか。ていうかあるのか？

「それに開始直後のあの事故と言ったら……羨ましいいったらないね。開始早々クレア様  
に突っ込んだだけじゃなくてその手で……ハア、ハア」

「あーわかつたわかつた。だいたい察したから」

俺の静止する言葉に「そう？」と首をかしげるブリュスタット。どうやら俺の存在があつてもなくても如月のラツキースケイイベントは滞りなく進むらしい。ブリュスタットの鼻息が荒々しくなつた様子を見てこれから先に起こるあいつのラノベ主人公体質にため息を吐きたい気分だ。てか欲望が丸出しなんですがブリュスタット君。

「それじゃ僕は戻るから。またね」

「おう。またな」

食欲よりも食欲の方が勝つたブリュスタットが目的の物の収穫を終えると自分が座っていたであろう席に戻っていく。さて、俺も目的の照り焼きチキンサンドをと……ん？ あれ、見当たらない。さっきまでここに二つほど残つてたのに。

「……………ハッ！ まさか！」

俺は慌ててブリュスタットの姿を探す。やがてその姿を視認すると、幾つかのテーブ

ルの向こう側に居座っていたブリュスタットが両の手に照り焼きチキンサンドを一つ  
ずつ握っていて、それを交互に味をかみしめるように食していた。

おのれ、ブリュスタット……せめて一個ずつ食えやツ!!

「お、戻ってきたか。て、どうしたんだ。なんだか恨めしそうな顔をしているが」

いくつかのサンドイツチをトレイに乗せて席に戻った俺の様子を見て、フリッツがそ  
う訊ねてくる。そりや一番食べたかったものをいつの間にか盗られてたなんて事にな  
れば、そんな顔にもなるさ。

「ああ……ちよつと仕返ししたい奴ができてな」

「朝食を取ってくるだけなのに仕返ししたい奴が出来たって物騒過ぎない? いったい  
どんな子なのさ?」

そうツツコミを交えて訊ねるエミールだったが、生憎とそれを答えようにもそんな気  
分にならない俺にはどうやっただって答える事は出来ない。うん、大人げない事は重々承  
知している。でもやっぱり見た目も中身も十代なんだもの。そういう気持ちになっ  
たって仕方ないよね。推定精神年齢20代相当の転生者が何を言ってるなんてツツコ  
ミは無視だ無視。

「ちなみに仕返ししてどんなの?」

「生クリームに大量のイクラを投入してそれをサンドイッチにして馳走させてやる。そして中身が悟られないようにカットした苺で誤魔化しつつ「苺サンド作ってみたからこれ食べてみ」と言つて奴に一泡吹かせてやる」

「物騒と思つたけどやつてる事が悪辣な嫌がらせにしか聞こえない件」

食つてる側からしたらただのフルーツサンドかと思つてたらまさかの魚卵サンドで、歯で噛んだ瞬間に破裂すると同時に生クリームの甘さと組み合わさつて何とも形容し難い味になるだろうけど悶絶する姿は実に必見だろう。ヤバイ、今から楽しみになつてきた。ん？ 『器量の小さい男』だつて？ 自分でもそう思うから言わないで。

★★

朝食を終えた俺達は食べている間にそれぞれ今日の予定を口にしあつてから、やはりと言うか別々に行動した。

フリッツはサンテミリオンに誘われて闘技場コロシムへ。そこで上級生が模擬戦闘をしているから見学に行くという。

如月はエミールに誘われて繁華街セントラルを見て回るようだ。エミール曰く「ハヤトとデートが、したいからあゝ」だそうだ。別にどこぞの韓流スターっぽく言つた事に他意はない。しかしその前に如月は昨日から風呂に入つていなかつたそうで、まずはシャワーを浴びてからエミールと合流する予定のようだ。つい先程別れた。

俺も俺で今日はしたいことがあるから皆とは別行動になる。だから今はジャージ姿のままだ。

皆と別れてから、俺は一人、誰もいないであろう訓練場へと来ていた。誰もいないと思っただのは今日が日曜日だからだ。このリトルガーデンにいる時点で普段は学業と訓練の毎日だ。平日の学業を終えてもその後は直帰と言うのが通例だから、今日のような休日には遊ぶ時間は無いだろうからな。

そろそろ繁華街セントラルのお店も本格的に開業をするだろうし、多分訓練場には今の時間帯に人は居ない筈だ。

訓練場に到着してみると予想通り、俺以外に訓練場に來ている人はいなかった。電気も消灯されたままだった事からするに、この感じだと今日は俺以外には誰一人としてここに足を踏み入れてないようだ。

「ま、誰もいないならやりやすいからいいけどな」

誰に言ったでもない独り言を口にしつつ、俺は倉庫に向けて歩を進める。

さて、これから俺は一人で訓練に励むつもりだ。その為に倉庫に施錠されている鍵を手を持ってここに來た。

実は皆と別に分かれた後、俺は教員室へと訓練場の使用許可と施錠された倉庫の鍵を借りてきていた。こんな朝から珍しいみたいな視線を向けられたが、やって來たのが昨

日起きた出来事を中心人物の片割れである俺と知るや、その場に居合わせた教員らは何か妙に納得したような顔で申請を受理してくれた。何を納得したんだか。

そうして訓練場の倉庫を開けた俺は、管理されている良質な素材で作られた木製の武器数種を手訓練場の端に併設されているベンチに持つて行った。

取り出した武器は昨日俺が模造した武器、もしくはそれに限りなく近い形の物だ。

左右一対の双剣、聖剣に見立てた両刃の長剣、先端に短剣の付いた長槍、それから巨大な刃の付いたクラッシュヤー型が使うであろう大剣と普通の木刀。

これらを使って、俺なりの戦術プランを練りつつ型の練習と習熟に取り組む。俺のハンドレットは数種類の武器を模造して戦うのが基本だから、こうやってエナジーを使わないで取り組むのが最も効率的だ。要はにぼしやサプリメントなどの通販商品を好むツンデレ型勇者が浜辺でやっている事を真似しているだけに過ぎないが。にぼしー。それに何よりも、フランソワ王国で俺にエナジーの扱い方を教授してくれた「彼女」からの言いつけという意味もある。尤も、言われなくても元から励むつもりだったけれど。

「まずはこつちからやってみるか」

迷わず双剣を手取る。模造できる中でも双剣が俺にとっての初期装備であるがゆえに、最初にこちらの習熟に励むのも普段の日課だ。

上衣のジャージをベンチに脱ぎ捨て、双剣を手に訓練場の中心に移動する。

まずは肩の力を抜いて脱力する。得物を掴む力はそのままに、体はいつでも動き出せるよう意識を集中させる。

イメージするのは昨日の決闘相手だったリディさん。あくまでイメージの中の存在だから昨日の彼女の動きをトレースさせてその動きに対処できるように体を動かす事で準備運動を兼ねる。

まずはランスで突いてくるイメージを反映。それを両手の双剣で受け流しつつ横にずらし、両手の剣を返しながら斬りかかる。イメージの相手は避けて距離を取る。俺は大股で相手に接近しながら斬り返した左手の剣でもう一度斬りかかる。

前面に出した盾で剣を防がれるも、無理に攻撃せずに相手の懐に潜り込む様に左側に飛び出す。一瞬遅れて相手も地面を蹴り上げて距離を離し、その一瞬を見逃さず、俺は右手の剣を振りかぶる。まだ刃の届く位置だから振るつたが、直前で構え直された盾で二度も追撃を防がれた。惜しい。

距離を離れた彼女は地面を踏みしめるとともに俺に向けて呐喊、勢いを乗せた鋭い刺突を繰り出してくる。俺は身を屈めながら左手の剣を振り上げランスを打ち上げるが、反対の盾を用いて縁で殴り掛かってくる。昨日はこれで腹を思いつき殴打されたから、今回は剣を逆手に持ちながら盾にして殴打を防ぐ。

防いだ剣で盾を弾き、反対に持った剣を弾いた際に動きの遅れた相手の胸元目掛けて突き刺し——そこで止めた。

「……………やっぱり実体でないと実感が湧かないな。こう、質量とかいろいろと」

ヴァリアブルストーンを持ってから一月も続けてやっている事とはいえ、やはり一戦しただけじゃイメージに反映する事は出来ないようだ。今までは「彼女」が何戦も相手をしてくれたこともあってイメージに反映させやすかったけど、他の相手となるとそれなりの回数を重ねなきゃ安定してイメージできないのを改めて痛感した。イメージしろ！（出来ない）

「あれ？ 四宮さん？」

もちつとマシンな動きをイメージできないか頭を捻っているうちに、ふと声を掛けられる。

「こんにちはです！」

「おはようございます！」

訓練場によつて来たのは生徒会の二人と決闘する事になった要因である件の少女達デュエル

——ノア・シエルダンさんと劉リュウ・シュエメイ 雪梅さんだった。その二人の出で立ちは、昨日までの制服姿ではなく、俺が今着ているのと同じジャージだった。

「おはよう、二人とも。朝から元気だな」

「はい！ 昨日の夜に処分撤回の通知が来て二人してもう吃驚しすぎで！」

「ここに残れたのも、如月さんと四宮さんが頑張ってくれたお陰です！ 本当に、ありがとうございましたっ！」

「あつ、わたしからもお礼を言わせてください。ありがとうございます！」

わたしわたしながらも揃ってお礼の言葉を述べてくる二人だったが、ぶっちゃけると俺は何も出来なかったのと同じことなので感謝されるいわれは無い筈だ。むしろここで「あー、昨日あれだけ大口叩いてたくせに結局ボロ負けした人じゃないですかー！ 如月さんにおいしい所を全部持ってかれた可哀相で痛い人じゃないですかー！」とか言われても可笑しくないのに。・・・自分で言つて悲しくなってくるのは気のせいだそうに違いない。

「いや、俺はボロ負けしたから礼を言われる資格はないよ。むしろ礼なら如月に言った方が・・・彼も二人の処分撤回には安心していたし。何より彼のほうが一番頑張ってくれたんだから、ね？」

「いいえ、”お二人”がわたし達を庇ってくれただけでなく、生徒会の方々と戦ってくれ



たから、わたし達は今もこうしてここに残り続けていられるんです。そんな人達に感謝しなくては恩知らずというものです！」

雪梅さんの言葉にうんうんと頷くシエルダンさんが続けるように言葉を紡いでいく。

「四宮さんがあの時、生徒会長に反論してくれなかつたらわたし達はこの学校を去ってしまいました。もし、実際にそうなっていたらと思うと後悔しなくて・・・だから！ これからは自分達の行動は自分達なりの責任をもつて取り組もうと劉さんと誓いました！ ですから、このお礼はわたし達なりのケジメと言いますか・・・」

なるほど・・・要は遅刻とか同じ失敗を踏まないよう、色々と努力しようってわけか。・・・合ってるよね？ まあいいや（自己完結）。

この子達も原作ではちよくちよく出てくるだけで、特にこれと言った活躍もなかつたしな。・・・こういう努力しようって気張ってる子を見るのはいつ以来だろうか。少なくともこの今生ではあまり見なかつた記憶がある。今も恐らくは俺の実家の地元近くから普通科の高校に通っているであろう友人達に思いを馳せる。努力しなくても平均以上の学力は元から備わっていた連中だったからな、努力の努の字も頭からすっかり抜け落ちてしまっていた気が今更ながらしてしまう。

俺はと言うと自分で言うのもあれなのだが、努力はしているつもりでもあまりその実感が湧かなかつたりする。現在進行形の形で。今こうして鍛練を行っているのも自分

なりに努力しているつもりなのだが、やはり複数の武器を使いこなすのは困難を極める。

話が逸れた。兎も角として、これから精進している彼女達を応援していきたいと思うのも俺にとっては滅多にない事だから、偶には良いかもしれぬ。

だから――

「そうか……ありがとう。じゃあさ、お礼ついでに一つ、お願いを聞いてもらってもいいかな?」

「あ、はい!」

「なんででしょう!?!」

「――俺の鍛練に付き合ってくれない?」

――目の前にいる、これから努力をしていこうと意気込む彼女達に、これくらいの事は要求しても罰は当たらないよな。

## 幕間 如月ハヤト編 壺

「助けていただきありがとうございますっ」

「わたし達のせいで大変なことになって、本当に申し訳ございませんっ」

「え？」

入学式を終えた直後。病弱な妹の為、はれてこの学園都市の一生徒となった俺こと『如月ハヤト』は、目の前で頭を下げてくる女子二人に目を丸くするのだった。

その二人とは、先ほど入学式の最中に遅刻してきた女子達だった。この学園の生徒会長であり巨大な都市艦の艦長、クレア・ハーヴェイ会長から「遅刻したから」という理不尽な理由で放校処分を言い渡され、入学式の最中であるにもかかわらず、俺や四宮が生徒会の上級生とハンドレッドを用いた武芸者<sup>スレイヤー</sup>同士による私闘——決闘<sup>デュエル</sup>する事になったが、それ以外では副会長の二人が恐ろしい位に淡々と式を進めて今に至る。

遅刻してきた女子二人の名前は覚えたばかりだ。背中まで伸びた茶髪の女子が『ノア・シエルダン』。髪型をひとつのおさげにした黒髪の女子が『劉雪梅』<sup>リウ・シュエメイ</sup>という名だった。

つい先程自分達から自己紹介されたばかりな上、いきなりそんな風に謝られた。

「と、とりあえず、それを言うのは明日の決闘デュエルが終わってからにしないか？」

俺がそう言うのと、二人は頭を上げて也未だに申し訳なさそうな表情を浮かべていた。「そうだよ。ハヤトが絶対に君達を救ってくれるから安心して。ね？」

コイツ・・・俺の事だからと言ってさらりと平気な事のように宣いやがって。でも妙に愛嬌もあるから憎めないんだよな。なんでだろうか？

「ですけど・・・や、やっぱりわたし達、会長の所に行つて、如月さん達の決闘デュエルを撤回してもらえようお願いします！」

「そ、そうです！ わたし達がこのまま放校処分になれば、如月さん達にこれ以上迷惑をかける事もないですし！」

いや、それだとさつきまでの俺の決意諸々がだな・・・。

「止めといた方がいいと思うな、俺は」

と、後ろの方でもう一人、俺と同じ”当事者”の声が上がる。

『四宮アキラ』——今朝知り合つたばかりの新入生で、俺と同じ皇国ヤマトの出身だという男子生徒。

頭一つ分は俺よりも背が低いが、幼さが残る童顔からは何を考えているのか解らない

ほどに無表情を貫いていた。

「そもそもの要因である君達二人が行ったところで、何かが変わる訳でもないでしょ。それよりもまずは明日の決闘デュエルでどう戦うかを考える方が、俺としては何よりも大事だと思うけどな」

そういう彼の表情は今も変わらず、頭の後ろに手を組んで頭上の天井を仰ぎ見ながらそう言った。

確かにその通りではあるんだろうけど、お前のその言い方はどうにかした方がいいと思うぞ？ それに激昂する奴が少なくとも一人は……。

「アキラ！ 何もそんな言い方しないでいいじゃないか！」

言わずもがな、エミールだ。怒った様子で四宮に反論する。

「君も会長の暴挙が許せなかったから反論したんでしょ！ それなら最期まで彼女達を守り通さなきゃ！」

「無論俺だつてさっきの行動の責任はしっかりとるつもりさ。けどな、彼女らが行ったって何も変わらないのは分かりきった事だろ。それにあの会長の事だ、きつと、何かを言ったところで曲げる事は無いと思うぞ？ 加えて副会長もいれば尚更、ね」

「それは、その通りだろうけど……」

本当にその通りだと思う。さっきのやり取りで解った事とさえいば、あの生徒会長と副

会長は、俺達がどれほど言葉を向けても自分達の意味を曲げる事はないという確信だ。

決闘<sup>デュエル</sup>が決まった時の俺達を見るあの目は、間違いなく本気の目だった。何よりそんな目をした相手に「やっぱり決闘<sup>デュエル</sup>は無かった事で」なんて言おうものなら、なにがあるか分かったもんじやない。それならいつそのこと、四宮の言う通りに決闘<sup>デュエル</sup>をしてしまえばいいだけのことだ。

「エミール、確かに四宮の言い方が問題なのはわかるぞ。けれど、同時に四宮の言う通りだと俺は思う」

「ハヤトまで・・・」

「それにこれは決まった事なんだ。今さらどうこう言ったって取り返しがつかないのは、お前も分かっている事だろ？」

俺の言葉に「んくく」と頭を捻り始めるエミールを余所に、四宮は「アレ？ 俺軽く扱われなかった？」と首をかしげている。気のせいだと思うぞ？

「・・・解ったよ。ハヤトがそういうならこれ以上は言わないでおくよ。けどアキラ！ 君の言い方は無性に腹が立つから改善したほうが良いとボクは思うな！」

それは俺も思う。なんかこう、発言にイラツと来る何かがある分余計に。

「わかったわかった、なるべく言葉を選ぶようにするよ。・・・ところでさ」

大仰に両手を上げて降参とでも言いたそうな姿勢を見せる四宮だったが、適当に言っ

てる感があつて納得しづらかった。が、そんな様子で俺達に向き直った四宮が、特に俺に向けて言葉を発する。

「決闘<sup>デュエル</sup>するにはハンドレッドが必要な訳だけど。肝心のヴァリアブルストーンはどこで仕入れるんだ？」

「……………はっ！」

そういえばそうだった！ 流れ的に決闘<sup>デュエル</sup>を受ける事になったけど、俺肝心の物を持っていないんだった！ どうしよう。あれつて結構高価な物の筈だから、どこで手に入れるのか知らないぞ、俺は。後ろの女子二人に向けるものの、二人は首を左右に激しく振つて知らないと言張する。逆に四宮に振り向いても、両手を肩の高さにまで上げて肩を竦める。多分知らないって意味だろう。クソツ、一体どうすれば!?

「あ、ヴァリアブルストーンの事なら心配いらないよ」

と、頭を抱えだした俺に向かつて言葉が飛んできたのは、意外にもエミールからだつた。

「というか、ヴァリアブルストーンって基本支給される物だから、すぐに手に入る場所ならボク知ってるしさ」

「本当か!? なら早速受け取りに行こう!」

「う、うん…なんか必死だね。ヴァリアブルストーンが手に入る場所はこのミリタリー区間の地下にあるんだけどね…? アクira、どうかした?」

必死な様子の俺を、両手を開いて落ち着かせるように「どうどう」と言いつつ抑えるよう促してくる。俺は馬か何かか。

そんな俺を尻目に、エミールは突然しかめっ面を見せる様子の四宮に向いて訊ねた。その手にはメールでも来ていたのか、いつの間にかPDAが握られていた。四宮はその画面を見てしかめっ面を浮かべているようだ。

「なあエミール。そのヴァリアブルストーンが手に入る場所つてももしかしてさ、地下にある研究所<sup>ラボ</sup>つて所で間違いないよな?」

「え? うん。そうだよ。ていうか、何でアクiraがそれを知って…」

「俺も付いてく。ちよつと研究所<sup>ラボ</sup>つて所に野暮用が出来た」

そう言つて、四宮は先に行くようにその場を離れた。俺とエミールも、なにがなんだかと言つた感じで互いに見合わせながらも先を歩く四宮の後に付いていく。

★☆☆



四宮を先頭に歩く俺達が向かった先は、武芸科校舎の地下にある大規模研究施設、通称「研究所<sup>ラボ</sup>」と呼ばれる場所だった。エミール曰く知り合いはこの地下の一角の部屋に籠っているらしい。地下のせいかな廊下は薄暗く、端から灯る蛍光灯が唯一の明かりで廊下の道を照らしてくれている。こんな陰気臭い所に籠る人って・・・一体どんな人なんだ。

「それにしても、アキラもこっちに用事だなんてね。誰かと待ち合わせでもしてるの？」  
「まあな。待ち合わせと言うか、向こうからこっちに来いって連絡がついさつき届いてな。まさか二人と方向が同じとは思ってなかったけど」

俺の隣に並んで歩いてきたエミールが先頭のアキラに言葉を掛ける。当の本人は前を向いたままそう答えた。

連絡とは、先ほど地上にいた時にPDAに届いたメールの事を差しているのだろう。こんなところに呼び出したって事は、連絡をした人は技術者か何かなんだろうか。

「その連絡を寄こした人って、この施設と関係のある人なのか？」

「んん・・・まあ、関係あるっちゃある・・・のかな？」

「何その曖昧な答え。どっちなのさ」

「いや、確かにこれから会うのはこういう施設とは切っても切れない縁と呼べなくもないんだけどな。そもそも職場がここじゃない筈だし、はつきり言っただけで俺自身も何で呼び

出されたのか解らん」

つまりは呼び出されただけで事の詳細はメールでも書かれていない、て事か。詳細を省くなんて、技術者にはありがちな例だな。漫画とかで得た知識だから偏見もい所だけど。

「ま、会えば解るだろうしな・・・と、着いたぞ」

四宮がある扉の前で立ち止まり、俺達も揃って止まる。扉はこの地下にあるどの扉とも違わない共通の物みたいで、そのすぐ横にある壁のパネルの上には簡潔に「個人用研究室」と書かれた立て札が固定されている。

個人用て事は・・・ここに、四宮の言う知り合いがいるのか。

「ちよつと待つて。この部屋・・・僕の知り合いがいるところだよ」

「マジで?」

「マジで」

少なからず驚きの声を上げるエミールの言葉に、思いがけない偶然に四宮も驚いているようだ。という事は二人の知り合いが同時にこの部屋にいるって事か。偶然に偶然が重なって驚きだな。

「それじゃあ僕から先に入るね。」シャロ「ー、いるかい?」

そう言いながら扉のすぐ横に設けられていたパネルにPDAをかざし、開錠音が鳴つ

て開いた扉を通ったエミールが目的の人物の名前を呼ぶ。エミールに続いて俺も部屋に入室すると、すぐに返事は返ってきた。

「——生憎だが、この部屋の主は奥の部屋で作業中だ。要件なら私が聞こう」  
「……………えと、どちら様ですか？」

返された返事に対して疑問で返したのは当然エミールだ。知り合いじゃないのか？

エミールに返事を返したのは、推定190cm近くの長身で鋭利なナイフのような鋭い目付きに眼鏡を掛けた、白衣を着込んだ成人男性だった。体格と目付きのおかげでかなりの威圧感を放つその人物は、とてもではないがカタギの人には見えなかった。正直に言つて目を合わせたくなくらいには恐怖心を煽られる。

「私は暫くの間、ここで働く事になったワルスラーン社所属の者だ。名前は「その声は……やっぱり。何やってんのさ」む？」

長身の男性が言葉を言い切る前に、俺の後に続いて部屋に入ってきた四宮が言う。彼の登場に男性も言葉を区切り、声がした方向に意識を向ける。

「おお、アキラか！ 遅いぞ、何処で道草を食っていたんだ」

「食つてないよ。つうかメールが届いてから10分も経つてない上に案内図を頼りに直行でここに来たから。むしろ早い方でしょ」

「そうか？ 私はてつきり30分は経つていると思つたんだが……」

「単に年老いただけでしょ」

「ハツハツハ、この減らず口め！」

「……………」

そんな二人の慣れ親しんだような会話に言葉を挟めずにいる俺とエミール。え、なにこの会話。どういう関係なんだ、この2人は？

「あ、あのさ四宮。そちらの人とはどういう関係なんだ？ 随分と親しそうに見えるが……………」

「そ、そうだよ！ なんだか如何にも強面な人だし、僕の知り合いの代わりにいるしで…………そろそろ説明してくれないかな」

おい、初対面に強面は失礼だろ。俺もそう思ったけど。

「ん？ ああ、悪い悪い。この人は俺の実の父親だ。ワルスラーン社所属の科学者として働いてる」

「改めまして、私はアキラの父——『四宮タケヒト』だ。先ほども申し上げた通り、ここで暫くの間働く事になった。見知りおきを頼む」

「えっ!？」

俺達の訴えによろやく気付いた四宮は何でもないようにそう答えつつ、四宮の”父親”と呼ばれた男性も自己紹介してくる。あまりにも似ない二人の雰囲気驚きの声を

上げるのは当然、俺とエミールだ。

「アキラの会う人って、自分の父親だったんだ……あまりにも似ていないから吃驚したよ」

「よく言われる」

雰囲気が違い過ぎる二人の親子に目を丸くするエミールの言葉には、俺も同意してしまふ。

それにしても、まさか親子が揃うとは思ってもみなかったな。基本的にこの学園都市艦に通うのは未成年ばかりで、俺を含めて大半は各国から集められた武芸者スレイヤーの卵達だ。親元から離れた生徒はかなりの人数の筈で、そんな中でも四宮のように親子が入学式初日に顔を会わせるのは滅多に無い筈。

四宮の親父さんの言う職業柄当然なんだろうけど、まさか職場が自分の息子が通う学園の研究施設だとは夢にも思わなかったんではないだろうか……俺がそんな風に考えていると、

「にしても今朝空港前で別れたのに、まさか行き先がここだったとはね」

「まあな……一月前のあの出来事で、お前がここに通う事が決まってから、”私達”の上司から延々と愚痴を聞かされてな。やれ『書類作成が面倒』だの、やれ『君達の子供なのだから責任を取れ』だの。おまけに”彼女”とは同じ職場だから、責任逃れもでき

なくてな。私達も出向扱いで、こちらの研究やら諸々の手伝いをする事になったのだ……どこかの馬鹿息子のせいだな」

「その節は本当にご迷惑をおかけいたしましたして、誠に申し訳ありませんでした」

「うむ。私達は許そう。たぶん母さんもそう言うだろうしな——だが我々の上司が許すかな!？」

「平身低頭波で周りの書類を吹き飛ばしながら謝罪できますがそれでもよろしければ」

「その地味な嫌がらせは上司が本当に怒るからやめろ」

「俺もやらない」

「ハッハッハッハッハッハッ!」

……いや、特に気にも留めていないようだ。会話の内容から察するに、どうやら今朝の時点で親子共々ここに着いたようだし。それなら驚く事でもないか。会話の内容からしてどうやら夫婦で同じ職場と思うが、楽しそうにしている二人の間に割って入る事も出来なかった。ていうか傍目から見てもこっちが疲れそうなんでも入りたくない。エミールも引き攣った顔で俺の様に話し掛けようとしていないのが何よりの証拠だ。

「ところで……後ろの彼らはどういった用件でここに?」

「ああ、そういえば。悪いな二人とも、邪魔してしまつて。後ろの二人は俺と同じ新入生で、明日生徒会長と副会長と決闘する事になつてね。彼用のヴァリアブルストーンを先

に受け取りに来たんだよ。俺は半分ついでかな」

「なるほど。あの会長とな・・・それならば彼女に話を通さねばな。解った、ついて来なさい」

お、なんだか自然な流れで話を通してくれたぞ。よかった、あのまま二人で談笑を続けるんじゃないかと不安でそろそろ割って入るべきか迷っていた所だ。

・・・と言うか、よく考えれば俺達まだ自己紹介していないな。大丈夫なのか？

四宮の親父さんに促され、俺達は揃って奥の部屋に続く扉を通り抜ける。親父さんを先頭に四宮、エミール、俺の順で扉を抜けると、その奥は先ほどいた部屋よりもさらに室内の電気が薄く、より一層陰気臭い印象を受けた。

その部屋には入室した俺達以外に、三人の人影があつた。その中でも特に目を引いたのが、研究所に在るには不釣り合いな格好をした人物だ。

黒白を基調とした所謂ゴスロリ風の”メイド服”。丈の短いミニスカートの下から伸びた猫の尻尾と思しき物が揺れ動いている所を見て俺は一瞬ギョっとした。メイド服に尻尾って時点で可笑しいからな。室内の様子とはとてもではないがそぐわないのは一目瞭然だ。

「うおっ・・・ああ、そういえば・・・」

前に行く四宮が小声で何かを呟いていたようだったが、俺にはよく聞こえなかった。

間にいるエミールなら聞こえているかも知だが、大して気にしている様子もなかったので俺も気にしないでおく。多分重要な事でもないだろうし。

すると、奥の椅子に腰かけているであろう人物がこちらに振り向きもせず語り掛ける。椅子に目でもついているのだろうか？

「どうしたんだい、タケヒト。君に頼んでいた書類の整理は済んだのかい？ 見ての通り、僕は今忙しいのでそういう報告は後にしてくれると助かるのだけだ」

「忙しいのは承知していますよ、”シャーロット博士”。あなたにお客んだ」  
「ん？ 僕にかい？」

訊ねた人物に親父さんが答えると、”博士”と呼ばれたその人物が椅子ごとこちらに振り返った。

「やあ、”シャロ”。ちよつと用事があつて来たよー」

「おや、エミールじゃないか。それに君は”期待の新入生”君だね」

そう言つて”シャロ”と呼ばれた、かなり幼い子供みたいな外見をした人物が椅子から立ち上がる（正確には降りた？）。

四宮の親父さんが着ているような身の丈に合わない白衣の裾をズリズリと床に引きずりながら俺達の前に歩み寄ってきた彼女から手を差し出される。

「ようこそ、リトルガーデンへ。僕はシャーロット・デイマン・デウス。このリトルガー



デンでは主に技術主任を務めている者だ。こんな見た目でも、君達よりかは年上なのでなるべく敬うようにしてくれると嬉しいな」

年上!? 小学校低学年みたいないな外見でか!? 俺がエミールに顔を向けると「アハハ」と苦笑気味に笑っていた。どうやら本当の事のようにうだ。四宮の親父さんも肩を竦めて肯定の意を示している。幼女みたいないな外見の年上なんて漫画とかでよく見る設定だが、リアルで見るとは夢にも思わなかった。

「は、初めまして! 如月ハヤトです! よろしくお願いします!」

「ハハハ、そんなに緊張しないでくれたまえ。敬うようには言ったけど、エミールみたいななるべくはフランクにしてくれても構わないよ。それでそっちが・・・」

と、俺が緊張気味に挨拶と握手を交わすときにこやかに笑い流してくれた彼女・・・シャーロット博士は視線を変えて、今度は四宮に向かう。

「?・・・どうも。四宮アキラです」

「知ってるよ。君が二人の・・・はーん・・・ほーん・・・ほーん・・・」

しかし、その眼はまるで物珍しいものを見定めるかのように観察していて、ついでに彼の腕やら脚やらの筋肉を触れてはグニグニと摘んで確認している。どうしたんだ?

「いやなに、君が本当にタケヒト君と”ミヒロ君”の一人息子なのかと思ってるね・・・」

ふむ、肉体の鍛え具合はまずまず、か」

「あの、俺の体に何かあるんですか？」

「ちよつと失礼だが君。ヴァリアブルストーンについての知識はいかほどなのかな？」

「?」  
「今日入ったばかりの新入生よりかは少しだけならある方・・・だと思えます。多分」

「・・・ふむ。では、ハンドレッドを展開できてからの実践訓練は? 君のご両親に聞いた限りだと、少なくとも一月は経過している筈だが」

「まあ、それなりに。訓練相手には恵まれていた方ですから。少なくとも、相手が」  
スレイヤー  
武芸者 ならちよつとは戦える・・・と、思います」

驚いたことに、どうやら四宮は一カ月間をハンドレッドの訓練に費やしていたらしい。訓練を施してくれる人材もいたらしく、一月も時間があつたのだから相応に経験も積んでいるに違いない。

「なるほど、ね。それでは君が持っているヴァリアブルストーンを見せてくれないかい?」

「何故ですか?」

「なに、ちよつとした知的好奇心と言うやつだよ」

「・・・わかりました」

シャーロット博士に促されて懐から正方形のケースを取り出した四宮。その蓋を開けると、そこには確かにヴァリアブルストーンらしき物が収められていた。色は濃紺で、鉱石の内部は淀みがかっている。

「ほー……これが君の……少しだけ借りてもいいかい？ ちよつとばかりでいいんだ」  
「それは、まあ構いませんけど」

四宮からの了承を得ると、シャーロット博士はそのままヴァリアブルストーンを手に、近くに設置されている機材に差し込むと、今度は先程まで座っていた椅子に座り直してキーボードに向かって何かを打ち込んでいく。

「——アキラ、今朝ぶりね。入学式はどうだった？」

と、今度は別の女性が話し掛けてきた。シャーロット博士と同じ白衣を着用し、茶色い長髪を腰まで伸ばした、柔らかな笑みを浮かべるその女性はアキラと談笑を始める。

「——母さん”。式はちよつと……たついたけど、まあ無事に終わった……のかな？」  
「ふふ、なにそれ」

「まあ、詳しいことは後で話すよ。それよりも大丈夫なの？ 俺のヴァリアブルストーンは特殊だけど」

「大丈夫よ。博士なら大抵の事になら対処できるし、あれくらいの調整なら朝飯前の筈だから」

アキラが母さんと呼んだその女性は一段と柔らかく微笑むと、そんなやり取りを見ていた俺とエミールに気付いて歩み寄ってくる。

「こんばんわ。わたしはアキラの母です。名前は四宮ミヒロ。夫のタケヒトさんと同じでワルスラーン社で働いています。暫くはタケヒトさんと一緒にこちらの研究室でシャーロット博士のお手伝いをしているから、博士の代わりもある程度なら出来るわ。息子共々、これから宜しくね」

更に驚く事に、ちよつと無愛想な四宮と比べて母親のほうは随分と社交的だった。物腰が柔らかくてマイペースを極限にまで極めたようなその姿勢に、ついこちらのペースも崩されそうになる。

そんな俺だったが、呆けているとミヒロさんが小首を傾げて頭に「？」とマークを浮かべているように見えた。しまった、自己紹介されたのに返してないのは失礼だな。

「し、失礼しました！俺は如月ハヤトです！四宮……君とは、同じ武芸科として入学しました！こちらこそ宜しく願います！」

「僕はエミール・クロスフォードです。同じく武芸科の新生です。僕からも、宜しくお願います」

「はい、宜しくね。それにしても二人とも武芸科なのね。良かったわねアキラ。お友達が増えそうで」

「いや、別に友達作りたくてここに入学した訳じゃないから」

エミールと揃ってミヒロさんに自己紹介を返すと、アキラに「喜ばしいことね〜」みたいなニュアンスのこもった言葉が向けられるが、四宮は響めつ面を浮かべると否定的な言葉で返す。ていうか四宮、それだと俺達とは別に友達じゃないって事になるんだが。俺は既に友達のもりで接していたんだけど。

「えっ・・・アキラ、僕らって友達じゃなかったの？」

「え、違うだろ普通。俺にとつては『知り合い』とかその辺りの認識なんだが？」

「えっ？」

「え？」

「え？」

え？ 違うのか？

「なんでだろう・・・名前呼びあつてるのに友達じゃないって直接言われたのちよつとシヨックなんだけど」

「俺は名字で呼んでるけどな」

「友達にランクアップしたいなら俺との好感度を上げてきな。具体的に言えば俺と遊○王カードで対戦して勝ち続けるかモンスターファイギュアをくれたりしたら好感度はグングン上がるから」

「カードショップの店員か。そんなタツグ○オース感覚で君との好感度が上がる事に驚きを隠せないんだけど」

さながら「カードゲームもできる乙女ゲー」だな。誰得だよ、そんなカードゲーム。

「それならエミ→ールウ←！文句があるなら俺とデュ→エルだあ！」

「満足先生みたいな呼び方止めてくれない？それとその呼び方は思い出すだけでお腹が振れるから止めてくれないかな、わりと本気で！」

「だったら振ればいいだろ?!」

「フフツ・・・だから、笑わせないでよ、本当にもうっ！」

「アツハツハツハツハ！」

そんな感じで二人が腹を壊す勢いで笑っているのを眺めていると、四宮の親父さんとお袋さんが肩を並べて話し掛けてくる。

「アレの言った事を真に受ける必要はないぞ。ああ言ってはいるが、内心では友人を持つ事に抵抗がある訳ではないからな。少なくとも、ああやって気兼ねなくふざけている間は君達の事を友人だと思っている証拠だ」

「あの子、お友達は少ないけれど基本的には無下には扱わないから、もし悩みとかがあればあの子に何かしら相談してみるのもアリよ。加えて一度決めたら最後までやり通す主義だからね。意地悪いけれど、結構面倒見が良いのよ、アキラは」

「いや、あれはふざけてると言うよりも遊ばれてると言ったほうが正しいんじゃないか……」  
笑いを堪えながらもリアルファイトも辞さない勢いの二人を眺めながら、ふと四宮の両親が立っている方とは反対方向に視線を横に移してみる。そこには先ほどから部屋にいたネコミミ尻尾付きのメイド服を着込んだ人物が立っていた。

「うわっ!!」

「わわっ！ 驚かせてしまいましたか？」

この場にいる誰よりも異彩を放つ人物の言葉が初めて紡がれる。おまけにいつの間にか、俺のすぐ真横に立っていたのだから驚かない筈も無く、俺は半歩ほど後ろに引いてしまっていた。

「驚かせてしまって申し訳ありませんのです。わたしは“メイメイ”と申します。ここではシャーロット博士の助手を務めさせて頂いておりますので、今後ともよろしくお願いたしますです！」

「ど、どうも……如月、ハヤトです」

戸惑いながらもどうか自己紹介を返せたが、そのメイドさん——メイメイはデスクに向かい合っていたシャーロット博士と呼ばれる。

「メイメイ、コーヒーを淹れてくれたまえ。うんと砂糖が入った甘いのを頼むよ。あと売店でドーナツが売っていただろう。それを購入してきてくれないか。勿論みんなの

分もね」

「りよーかいしましたなのです！」

そう元気よく挨拶して、メイメイは研究所ラボを飛び出していった。

「——さて。如月、少しいいか」

「ん、なんだ？」

メイメイがいなくなると、今度は四宮が話しかけてくる。その表情はいたって真剣なもので、これから何を話すのかとつい無意識に体が強張ってしまう。

「——明日の決闘デュエルに備えての情報収集だ」

そう言つて、四宮は後ろにある大量の資料を指差した。・・・すっかり本題の事を忘れていたことは黙っておこう。

★★★☆☆

メイメイが戻ってくる頃には、俺とエミール、四宮の三人は研究室のモニターを通して大体の情報収集を終えていた。俺達が情報収集をしている間、四宮の両親はシャーロット博士の何らかの作業を手伝っている。メイメイもまたシャーロット博士の助手という事もあり、戻ってくると購入してきたドーナツと人数分のコーヒーをそれぞれに



配つて、今は彼女の傍に付いている。それはそうと今は集めた情報の確認だ。

『無敗の女王』と『薔薇の守護者』——二つとも、このリトルガーデンの艦長にして生徒会会長でもあるクレア・ハーヴェイを差している。

前者はリトルガーデンが二年前に就航してから一度となく、生徒会長が決闘で負けた事が無い事から。後者はこの二年で十二回もサベージとの抗戦を経験。その中でも八体ものサベージを屠っている事から付けられたという。実力は折り紙付きと言うやつである。

「こんな異名を持った奴に勝てるのかよ・・・」

「でも、ハヤトの方が圧倒的にハンドレッドの反応数値は高いんだし、きつと何とかなるよ」

エミールはそう言うが、それはあくまでも適性が高いという事であって、俺自身の実力には反映されない事を差している。実戦経験の有無で言えば、天と地ほどの差があるからいくら反応数値が上回っているとは言っても場慣れしてないんじゃないや宝の持ち腐れにも等しい筈だ。流石にそんな相手に勝てと言う方が夢のまた夢と言うやつだ。

「生徒会長のハンドレッドは遠距離からの攻撃に適した『ドラグーン型』の『気高き戦姫』。あの人の砲撃の威力は凄まじくてな。全力のものとなればサベージの核を容易く破壊してしまうほどだ。おまけに浮遊砲台は盾にも使える。近接型にとつ

ては相性的に不利すぎるな」

モニターに映し出される生徒会長の戦闘記録を見ながら、四宮が短くそう説明してくれる。とても分かりやすいが、なんだか彼女の戦闘を見た事があるような言い方だな。

「ねえアキラ。その言い方だと、まるであの会長の戦いを見た事があるような言い方だね。何で？」

と、俺が思った事をエミールが代わりに聞いてくれた。なんだろ、この妙な連帯感はあるに合いすぎててちよつとばかり怖くなってきたな……。

「実際に見たからな。一月前のリベリア南部で起きたサベージ上陸の時に」

「ああ、そういうええあったね……って、君あそこに居たの!？」

「ああ。中学の卒業前にな。父さんと母さんも一緒だった」

四宮からのまさかの言葉に、俺とエミールは驚いた。一月前のサベージ上陸と言えばニュースにも流されたほどだ。まさかその現場に四宮とご両親が居合わせていたとは。

「まあその話は置いてだ。今如月に必要なのは、生徒会長に対してどう対抗するかだ」

脱線しかかっていたのを四宮がそう修正する。それはそうなんだが、そもそも俺のハンドレッドはどんな型なんだろうか。そこが肝心だ。もし武器が剣とかだったなら、多少の融通は利く。けれどそれ以外だと……正直に言っただけがまともに動ける気がしな

い。ヤバイ、詰んだか？

「如月、半年前のイベントでハンドレッドに触れた時、刀の形状が形作られたんだったな？」

「あ、ああ。歪で不完全だったけど、あれは刀で間違いないと思う」

「だったら如月のハンドレッドは恐らくシユバリ工型だろうな。刀剣の形で形成されるのはそれ以外に無い筈だ。そこはほぼ確定として・・・」

「後はどう立ち回るか、が問題だね」

確認をする四宮の言葉を引き継ぐように、エミールが紡いでいく。

「最初はやっぱり突撃してから斬りかかるべきかな？ 相手は射撃を得意としてるから、まずは討たれる前に懐に入るべきだと思うんだよね」

「だけどそれは相手も分かっている事だろうな。態々相手してくれるとは思えんけど」

「でも、アクセラレート加速なら一気に間合いを詰められる筈だよ！ 試合開始の合図と同時に駆けば」

「そうは簡単に言うけどな。もし失敗したらどうする？ 最悪事故で怪我を負いかねないし、正面衝突して互いに気絶なんてしたら笑い話にもなりやしないぞ」

「あの会長が気絶か・・・それはそれでちよつと見てみたい気がしないでもないけど、ハヤトが倒れるのは見たくないかなー。んんんんん・・・まあ特訓次第でどうとでも

なるよねー！」

「まあ、そうなるな」

なんかすごい樂觀的な事を言ってる気がする。気のせいではない。四宮の野郎、自分も含まれてる事を忘れてるんじゃないのか？

「それに肝心の決闘は明日だ。期限は実質今日の夕刻まで。残り数時間しかないのを考えると、できる事は限りなく制限されてくるな」

「もつとも単純な手で・・・『接近して斬る』——これがベストだけど、相手が相手なだけに、一撃必殺とは言い難いのが苦しいところだね」

そりやそうだろ。寧ろ接近すること自体難しいだろうに。

「何は兎も角！ 特訓するしかないって事だよね！ シャロー！ そろそろ終わったー？」

「もう間もなくだとも。そんなに急かさなくてくれたまえ」

突然立ち上がったエミールはシャロー博士の元まで向かい、ハンドレッドの調整がいつ終わるのかを訊ねる。そんな年相応な様子に四宮の母——ミヒロさんが片手でキーボードを打ちながら温かい目を向けている。器用な人だな。

「如月。実際の所どうするんだ？ この後ヴァリアブルストーンが手に入っても、残り数時間しか残ってない。自分でどう立ち回るかを一応考えておいた方がいいと俺は思

うけど」

「あ、ああ・・・とは言ってもな、どう立ち回るかなんて、勝手が利かないんじゃないやどうしようもないしな」

「まあな。とりあえず今は感覚だけでも掴むよう努めるしかないからな。あとは如月の努力次第だ。頑張れよ」

「まるで他人事だな。一応聞くけど、四宮はどうするつもりなんだ？ お前だって当事者なんだから、当然対策を考えてない訳じゃないよな？」

俺の言葉に、四宮は「一応な」とだけ答えた。え。マジで考えてたのか？ 俺やエミールと違って、さっきまでのやり取りで特に何も考えてないと思ってたけど。

「今朝の入学式の時にも会長が言ってたけど、俺は既にヴァリアブルストーンを持ってる。その展開と武器の形成も難なく行えるくらいにはな。武器の扱いに関しても大体のコツを掴めてきたから、後は実践で実演するだけさ。つまり俺の事に関しては心配ご無用、自分の心配だけをしてろって事さ」

「そういえばお前のハンドレッドの型はどんな物なんだ？ ハンドレッドにはいろんな種類があるんだよな。例えば会長のドラグーン型とか、俺の・・・シュヴァリエ？型とかさ」

「まあな。『ハンドレッド』っていう名称の由来は、その型の種類に由来するのは当然

知ってるよな？」

それは当然だ。何せ軍用兵器として扱われながらも、ある程度の情報開示をされている位だからな。一般人の俺でもちよつとなら知っている位だ。えーと・・・確か、『形成できる型の種類が百種類以上にも上る』から・・・だったよな？

「ハンドレッドとして展開されるそれはゆうに百種類以上にも及ぶけど、一人の武芸者<sup>スレイヤー</sup>が展開できる型は基本的に一種類のみだ。生徒会長にはドラグーン型として展開、みたいにな。一人の武芸者<sup>スレイヤー</sup>が常に用いているヴァリアブルストーンが他の武芸者<sup>スレイヤー</sup>の手に渡つたとしても、それで展開できるのは本人に合った型のみだ。だから例え如月が生徒会長が常に用いているヴァリアブルストーンを用いてもドラグーン型が展開されることはない。ハンドレッドが開発されてから数十年。研究と開発が進んだと言っても、まだまだ解明できていない所は多くある。何で俺達のような『第二次成長期を迎えていない子供からしか展開できない』のかも、な」

そこは俺も気になっていたところだ。何故中高生に上がる年齢で展開できるのか、その辺りの具体的な情報は全くと言っていい程開示されていない。『解明されていないから』と言うのならそこまでだけど。・・・というか。

「おい、俺の質問に答えてないぞ。お前のハンドレッドの型はどんな物なんだよ」

「ああ、脱線してたな。すまない。まあともかくとして、如月はまだハンドレッドに関し

ての知識は素人レベルだからな。ちよつとした復習さ。それで、俺のハンドレッドの型に關しては……いや、これはまだ言わないでおこう」

「はあ？ おい、俺のを予想しておいて肝心のお前の分を教えないってのは理に適ってないだろ。ちよつと反則じゃないのか？」

「良いんだよ。どうせ明日になれば解る事なんだし。それに今一番肝心なのは如月自身なんだ。俺のハンドレッドの事を知っても仕方ないだろ」

「それは……まあ、そうだけど」

實際の所その通りだからそれ以上の言葉に詰まる。半分納得もできるが、できない所もあるが今は飲み込むしかないのか。不完全燃焼だけれど。

「——話している所を済まないね。たつた今出来たよ。如月ハヤト君の専用ハンドレッドが」

自分でも自覚できるほどに不服そうな顔を浮かべていると、シャーロット博士がそう言葉を掛けてきた。俺の前まで歩み寄ってきて、右手に持った蓋の開いたケースを差し出してくる。

ケースの上には、血のように赤いダイヤのような結晶体が置かれていた。角に紐のような物が付いていて、それが首からペンダントのように吊り下げるようになってるのが解る。

「これが、俺専用のハンドレッドか・・・」

実際に手に取って宙に翳して、天井から灯る電灯に向けてみる。中身は透明で向こう側にある電灯の灯りが薄くなつて見える。これが軍用兵器として開発されたもののだとは、実物を目の前にしても信じられない。

「見た目はカスタマイズをしていないのと変わらないが、その中身と言えば、君と適合するように原子の配列を調べてある。きつと、気に入ってもらえると思うよ」

「ねえハヤト、早速展開してみてよ」

付け加えるように言うシャーロット博士の言葉に続き、エミールが急かすように言う。けど・・・。

「・・・展開ってどうやるんだ？」

「ちよつと待つてくれたまえ。初心者がこのようなところで展開をしたら、何が起こるかかわつたものじゃないからね。ここでは、勘弁してくれたまえ」

と・・・そういうえばここは室内だった。狭いし、展開するには不適切だ。となればもつと広いところでやるべきなんだろうが・・・。

「展開をするのなら広い空間の方がいい。丁度訓練場が空いていたから、つい先程予約させてもらったよ。今行けばすぐにでも使える筈だから、行ってみるといい」

「ありがとうシャロ！ 行こう、ハヤト！」



「わかったから、引つ張るなって！」

「それでしたらメイメイが訓練場までご案内するです！」

訓練場が使えるとわかると腕を引つ張ってくるエミールを宥める。俺達の後に追従しながらメイメイもついてきて、前を進みながら尚も引つ張ってくるエミールだったが、そこで俺は不意に気が付いた。

「ん？ 四宮は行かないのか？」

「ああ。今ヴアリアブルストーンは調整中だからな。それも少し時間がかかるし、それを考慮すると今日は諦めるしかない。さっきも言ったろ、『自分自身の心配をしろ』ってな」

「あ、ああ。それじゃあな」

「バイバイ、アキラ。また明日ね」

「おう」と適当な感じで手を振り返した四宮を尻目に、俺とエミールは特訓をするために訓練場へと向かう。



「四宮の奴・・・本当に訓練しなくて大丈夫なのか？」

「本人が心配するなつて言つてるんだからそんなに気にする必要ないんじゃないかな。それにアキラだつて『自分の心配だけしてろ』つて言つてたし」

廊下を歩く俺とエミール。メイメイが先頭を歩いて俺達を訓練場まで導いてくれる。その道中で不意に呟いた俺の言葉に答えたのはエミールだ。そうは言うがな。明日の対戦では上級生で実力のある二人が相手なんだぞ？ 俺だけ特訓しても、肝心のあいつが碌に戦えなきや意味がないだろうに。・・・いや、それだと俺にも返つてくる事は分かつてるんだけどな。

「アキラもアキラで、きつと考えてる筈だよ。そうでなきや、僕達に行つて来いなんて言わないでしょ。それに、彼だつて一月も特訓に励んでたようだし、少なくとも初心者のハヤトが心配する必要はないと思うよ」

「それは・・・」

確かに、展開も訓練も経験のある四宮と比べると俺のほうがまだまだ初心者だ。そんな俺に心配される謂れはないのは分かつてる事だし、多分、逆に俺の事を心配して優先してくれたんだろうからな。

「そういえば先ほどシャーロット博士が仰つてましたねー」

「ん、シャロが？ 何て？」

そこで俺達の話聞いていたのだろうメイメイが前を向きながら話しかけてくる。

顎に指先を添えながら言葉を紡いでいく。

「なんでも、アキラ様のヴァリアブルストーンは特殊な原子配列をしているそうで、普通のヴァリアブルストーンと比べると調整に一手間が掛かるらしいです」

「特殊な原子配列？ それって一体どれほどのなの？」

答えるメイメイの言葉の中にあつたワードを指して訊ねるエミールだが、答えた本人は「いやー」と申し訳なさそうな顔を浮かべながらこちらに振り返り、

「すみません。わたしも一応データに目を通したのですが、色々ところんがらがつてしまつて言葉にできないのです・・・」

「なにそれ。つまりそれつてメチャクチャな原子配列つて事じゃないの？」

「いえ、それほどアンバランスなものではないのです。ただ・・・こう、色んなものが混ざりながらも、絶妙なバランス感覚で成り立ってる、と言えがいいのでしょうか？」と  
にかく、そんな感じだとシャーロット博士が仰つてました」

「どういう意味だ？ それで展開なんて出来るのかよ。」

「ですが、そんな状態で展開出来ているのは事実みたいですし、調整で調えられるのなら戦闘にも支障はない筈だとも博士が言つてましたよ」

「ふーん・・・まあ、シャロがそう言うなら信じるけど、本当にそれで大丈夫なのかな・・・駄目だ、僕もなんだか不安になつてきた」

おいおい、俺にあれだけ心配ないとか言ってた奴が不安に駆られてどうするんだよ。まあ気持ちは分からなくもないが。

「ま、アキラが心配ないって言ってたんだし、僕達はその言葉を信じるしかないよね」  
「・・・そうだな」

結局のところ、会ったばかりであれこれ言えるほど四宮の事を知らないのだ。それでもあいつが「心配ない」と断言したんだ。知り合って間もないけれど、今はその言葉を信じるでしょう。

「・・・不安材料しかないけどね」  
・・・言うなよ。せつかく今纏めかけたのに台無しだ。

「あはは・・・あ、到着しましたです！」

と、先頭を歩いていたメイメイの案内で俺達は訓練場前にやってきた。・・・いよいよか。

「ハヤト」

「ん？ なんだ？」

「・・・頑張ろうね」

「・・・おう」

笑顔でそう言ってくれたエミールに、俺は短く答え、訓練場の扉をくぐった。

その日の放課後、俺はアキラと同じくヴァリアブルストーンをすでに持っていたエミールの手伝いもあつて、何とかEエナジーバリアと加アクセラレート速スピードが使えるようにはなつた。

あとは明日の決闘デュエルで”事前に用意していた秘策”を併せてどこまで通用するかが………本当にこれで戦えるのか？ やっぱり不安しかない。

人は面白い人間を見つけると、すぐにでもちよっかいを掛けたくなる。

「——はあっ！」

「っ！」

リトルガーデン地下の訓練場——昨日の決闘騒動から一夜明けた翌朝の11時半過ぎ。最初、俺は一人訓練場へと赴いたが、そこで決闘デュエルをすることになった原因である女生徒——ノア・シエルダンと劉シュエメイ雪梅と遭遇した。

彼女達曰く、これからは自分達の行いは自分達なりの責任感を持つという意志の下、俺は昨日の騒動による見返りとして彼女達に鍛練の相手をしてもらえるよう要求した。自分達で責任を持つと言ったのだから、これくらいの事をして罰は当たらない筈だ。………当たらないよね？

二人は快く承諾してくれて、今は槍の特訓をしていると言う。ノアさん”に相手をしてもらっている。放たれる突きを双剣の片割れで弾きながら、反対の剣を振りかぶる。直前で躲され、身を翻したノアさんは一旦距離を離して木製の槍を構え直す。

「存外動くんだな、ノアさんて」

「そ、そうかな？ 昨日の”アキラ君”や如月さんと比べたら全然だけどね」

双剣を下ろした俺の言葉を、照れくさそうに笑うノアさん。実戦でもない特訓なので、無理に緊張していなくて当然だけど。

さて。この時点で気付いた人もいるだろう。俺は今”ノア”とさん付けだがそう呼んだ。彼女自身も、俺の事を名前で呼んだ。そう呼び合うようになった理由は一つ――鍛練を始める前に発した彼女達の言葉が事の発端だった。

『あ、あのっ！ これからは一緒の学科で学ぶわけですし・・・な、名前で呼んでもいいですか!? 是非に!!』

と、彼女に頼まれたからだ。これからは同じ学び舎で時間を共有する事も多くなるだろうからと言うのが理由らしい。そうなったらほぼ『友達』という関係に変わらない。だったら友達らしく名前で呼び合おうという極論に至ったのだという。敬語も無しでというのは後で追加された。

ちよいと無理があり過ぎませんか？ いや、それがこの世界での友達の作り方なのかもしれない。某魔砲少女も言ってたしな。友達になるの、すごく簡単。名前を呼んで？とか名言残しててくるくらいだし。

それに何よりだ。身長差があるだけに上目遣いのおまけつきで見詰められたら、それら断ろうにも断り辛くなってしまうというものだ。結局そのついでとして俺は彼女の事も名前で呼ぶことに決まってしまうていた。

そこに劉 雪梅シュエメイ——雪梅シュエメイさんもこの期に乗じて便乗して加われれば、尚更断れなくなる。……まあ、(肉体的な意味で) 同い年くらいの女の子に名前前で呼んでもらうのはある意味憧れでもあったし? 別に断る理由も特に思い至らなかつたわけだから許可するしかないでしょ。決して二人とも女性として悪くない部類に入るからとかそんなやましい理由ではないのだ。前世の親に誓ってそうだと断言する。前世の親に誓ってどうするんだよ俺。

「そういえばもう昼前か。俺は昼飯食べにここで一旦終わるけど、二人はどうする?」  
気が付けば、彼女と鍛練を始めてから1時間が経過していることになる。外は昼も良い頃合いなのでそろそろ食堂に人が集まり始める頃の筈だ。正直に言って今朝のサンドイツチだけじゃ腹は膨れん。昨日晩飯を食わずに朝まで眠ってたから文句を言えなけれど。今から行こうかと、俺は鍛練の中断を提案する。

「あ、それじゃわたしも終わろうかな。雪梅はどうするの?」  
「わたしも賛成。アキラ君の動き、もうちよつとだけ見ていたかっただけでそろそろお昼だから、今から行かないと混んじやうかもしれないし……そうだ。折角だから、わた



し達もお供しようよ！」

「いいね！ アキラ君、いいかな？」

「別にかまわないよ」

「よつしや！」

そんなハイタッチしなくても。それなら早速と言いたいところだが・・・このままジャージで行くというのはいただけなのか。せめてシャワー浴びてから行くとするか。

「その前にシャワーだな。さっと自室に戻ってささっと体を洗い流してくるか。俺の制服自室だし」

「そうだね。わたしも汗でびしょびしょだよー」

「わたしはやってないし、制服に着替えたら二人が来るまで食堂で席でも取っておこうかな」

お、それは助かる。シャワー浴びていざ食堂へと行って着いたら座る席が無いなんてことは避けたかったからそれはありがたいな。ここは俺も便乗しておこう。

「ついでで悪いんだけど、俺が座る席も確保しといてくれないかな？」

「ついでと言われなくても最初からそうするつもりだから平気だよ」

「そうなの？　ありがとう」

俺は短く礼を言いつつ、そのまま二人と一緒に寮へと戻る。

男女の寮は分けられているが隣接しているので離れてはいないため、汗を洗い流すのは10分ほどで済ませられるだろう。

予定通り10分ほどでシャワーを済ませ、今朝着ていたのとは別の新品のシャツと制服に袖を通した俺は即行で寮の外へ。するとほぼ同じタイミングでノアさんが女子寮から出てきて合流。雪梅さんは既にジャージから制服に着替えて食堂へ向かったのだという。なら俺達も急がねば。

今日は休日。いくら多くの生徒達が繁華街にいるからって、全員が全員出先で夕食という事はないだろう。外食にせよ食堂にせよ、良い場所を取って食事を楽しむというのは風情があつて良い物だ。去年まで春は数少ない友人達と一緒に花見に行つてた口なので、どうしても外で食べたい時は意地になつてもそうしたい体になつてしまつていゝ俺だ。だから俺的には外のテラス席なんかが良いんだけどな。テラス取つておいてくれないかなー、雪梅さん。

さて。食堂に着いたのは良いものの、思いのほか、中に人は少なかった。時計の針は12時を少し回つた程度で、早く来すぎたというものもあるのだろうが、多分ほとんど外食で済ませてるというのが妥当だろうか。

それは当然と言えばいいのか、まあ何よりも人が少なくってテラス席が空いているのは喜ばしい事だ。朝から汗を掻いた上に折角の良い天気なのだし、外で食わないのは勿体ない。きつといいひと時になる筈だ。

「ノアー、アキラ君！ こつちこつちー！」

食堂に入ると、室内の奥——ではなくて、窓ガラスの向こう側から呼びかける声が聞こえた。言わずもがな、武芸科の制服に袖を通した雪梅さんだ。外にいるという事は、どうやらテラス席を取っておいてくれたらしい。ナイスウツ！

俺達は受付よりまずそちらへ向かう。

「ありがとね、雪梅。先に席を取っておいてくれて」

「いいわよ、礼なんて。元からテラス席を狙ってたし、何より人が少なくって助かったわ。おかげでこうしてのんびり席を確保できたんだから」

どうやら彼女も外で食事をとる事を考えていたらしい。意思疎通とは言えないけれど一緒に考えで嬉しいです。それにしても椅子が三つって事は……。

「あれ、これもしかして俺も相席する系？」

「する系だよ。いいでしょ、別に」

まあ別にかまへんけど。

「さて。それじゃ俺がここに残ってるから、君達二人は先に料理を取ってきなよ」

「いいの?」

俺が頷くと、二人は短く礼を言つて早足に受付に向かった。ノアさんが俺の分も注文してこようかと訊ねてきたが、自分の分は自分で注文するので遠慮しておいた。ここはほら、”レディファースト”つてやつです。使い方はだいたい間違つてるだろうけど気にしない気にしない。

10分もしないうちに彼女達はそれぞれに注文した物をトレイに乗せて戻ってきた。早いなオイ。

「お帰り。随分早かつたね。そんなに空いてたのか?」

「うん。と言つても、多分まだお昼を過ぎる手前だからじゃないかな」

ノアさんの言葉に「なるほど」と俺は頷きながら席を立つ。自分の分を注文しに行くためにだ。

注文を取る為の受付に来た俺はまずメニューを見る。ふむふむ・・・どうやら和・洋・中と種類別に分けられているようだ。数えてみるだけでもそれぞれ十種類以上ものレパートリーがある。これつてそこら辺のレストランより充実してない?

「注文にあんまり時間を取るのもあれだしな。今日は定食にしとくか」

即決で決めて俺は注文を受付のおばちゃんに口頭で伝えていく。ちなみに注文したのは『鰯の照り焼き定食』だ。わあいぶり。アキラぶり大好き。

俺が戻ると、二人はまだ料理に手を付けず、談笑していた。

「ただいまぞい」

「あ、お帰りー。アキラ君は・・・なるほど、定食なんだね」

「見事にバラバラになったのね」

ノアさんはパスタを中心としたサラダ付きの洋食、雪梅さんは出身柄か中華系で春雨サラダと回鍋肉か・・・ちよつと待つて。それ10分も掛からないで出てくるような料理じゃないよね？ どういうこと？

「アキラ君は・・・へえ。お魚なんだね。男の子にしては珍しいよね」

「だよね。普通はお肉中心とか頼んでそうなのに」

「肉も魚も好きさ。その中でも鰯は特別つてだけ。さ、早くただごうか」

回鍋肉が何故短時間で出てきたのかは謎だけど、今はとにかく目の前の昼飯に集中すべきだな。気になりすぎてても埒が明かないし、まあ言うほど重要ではない筈だからスルーでいこう。

俺の一言で二人は「はい」と短く返事を返しながら目の前の料理に意識を向ける。俺も箸を取る前に「いただきます」と言葉にしてから箸を持つ。

その後はつつがなく昼食は進み、特に何事もなく食事を終えると二人とは別行動に

なった。食べている間、二人とは雑談などで過ごしていた。主に話題となったのはこの後の事だ。二人は最初繁華街セントラルに出ようかとも言っていたが、ふと一昨日の入学式での出来事を思い出し、どんよりとした雰囲気になりながら繁華街に出るのを諦めていた。そりや入学式に遅刻した理由が繁華街で買い物してたからっていうんだから、その反応も当然だ。

俺と言えば、そんな二人に代わって「じやあ俺は繁華街に出るかなー？」と意地の悪いドヤ顔を浮かべながら呟いてみるもんだから、二人からはそりやもうジト目で睨まれるのなんの。ハハハ、効かぬな。故郷で数少ない友人の親父さんに睨まれるのと比べたら、天と地ほどの差がある。随分と睨みに耐性が付いたからな。その程度の睨みで俺の素早さは下がらんよ。

そんなこんなで、俺は二人と別れて一人繁華街へと向かう。別に訓練場へ行つて鍛練しても良かったのだが、それは夕方にも出来る事なので今はゆっくり時間を潰したい。その代り、ノアさんと雪梅さんの二人が今訓練場へと向かっているそう。やはり一昨日と昨日の事が堪えたのだろうか、別行動になる直前の二人は努力せねばという気概にあふれていた様子だった。

鍛練に集中するのは良い事だけれど、根を詰めすぎないようにと伝えているから恐ら

くは大丈夫な筈だ。多分。

さて・・・俺とは言え、特にあてもなく繁華街を悠々と歩いている。行き交う人の群れを掻い潜りながら、店の外側に展示されている様々な商品を立ち止まっては流し見していく。

繁華街というもんだから、やはりと言うか衣服を取り扱う店が多い。俺は如何せん服に対する拘りなんて無いので無頓着だ。寒ければ暖かそうな物を、暑ければ涼しそうな衣服を着ればいい性質だから、見ても対して面白くもない。

前世含めて見せる相手なんて一人もいなかったしな。一応今生の友人には女の子もいるが、知り合い以上友人未満だからそんな風に意識した事はない。俺ってば転生しても浮いた話が一つもないってのはどうなんだろうな。自虐ネタにもなんねえな、こりや。

「それにしても・・・やっぱり男女の比率が激しいな」

周りに目を向けてみると、一般人の中にはリトルガーデンの生徒が多数いる。俺と同じ新入生もそうだけど、上級生もちらほらと見える。その中でもやはり、男女の頭数が揃っていない。

そもそもだ。ハンドレッドが反応するのは第二次性徴を迎えていない未成年ともう一つ、『女性に反応する事が多い』という事だ。だから年々、男子の数も増えているとは

いえ、それでもまだ女性の方が比率が高い。これいつか女性にしか反応しなくなるんじゃないかと思わなくもないが、さすがにそこまではいかないだろうな。別のラノベ作品じゃないんだし。

「もしかしてハンドレッドって中身若い女の子が大好きなおっさんじゃないのか？」

それで男に反応する事も有るって事は、「ああ、偶には男にも反応してやらねえとなあ。まあ適当な奴に反応しとくかwww」みたいな軽いノリで・・・ヤベ、そんな事を考えたら急にヴァリアブルストーンに触りたくなくなってきた。

駄目だ。変な事を考えたせいで頭の中がメタバポ体型で汚い油ぎっしゆなおっさんで占められていく。吐きたくなってきた・・・。何か頭の中をすつきりさせるような清涼剤的な何かがあれば何とかかなりそうなんだけど・・・そんなものが都合よくあるわけないんだよな。

「ん？」

ふと視界の隅に映った立て看板に意識が向いた。板状で青を基調とした色合いで彩られた縦長のそれには、『アニ○イト・リトルガーデン店』と書かれていた。

「え・・・マジ？　メ○トとかあんのここ？」

二度三度目を擦って確認してみる。が、やはりアニ○イトと書かれていて、それが目の錯覚じゃない事を認識する。ここなら清涼剤どころかおっさんなんか忘れてゆつく



りできるんじゃない？

「メ〇トがあるなら行くつきやねえよな！」

そうと決まれば即メ〇トへ走る。周りに迷惑が掛からないよう早足且つ人込みを回避しながらだけど。

メ〇トに直行した俺は気が付けば一時間もそこで時間を費やしていたて

店内は思いの外綺麗で掃除も行き届いており、そして規模も大きくて広かった。地元の店舗どころか、都会のものよりももしかしたら広いのかもしれない。行ったことないからわからんけども。

ていうか何でメ〇トがあるんだろうな？ まあこれで繁華街に出向く目的も出来たわけだし、良しとするか。かくいう俺の手元にはリトルガーデンで初めて購入した雑誌の入った青い袋が下げられている。

「あ、アキラだ」

「ん？」

ふと名前を呼ぶ声が聞こえ、そちらへ振り向く。

そこには同じ武芸科の制服を着たエミール、如月がうつすらと驚くような表情を見せ

ながら立っていた。さらに如月の横には、前世で見慣れたような今生では見慣れない幼い女の子がいた。丸みを帯びた白い独特な形をした車椅子らしき物に乗って。

「如月とエミールか。今朝ぶりぞい」

「ぞ、ぞい？ 変わった挨拶だね」

お、やつと反応してもらえた。さつきもノアさんと雪梅さんにも言ったんだけど、軽くスルーされて悲しかったんだよね。顔には出さなかつたけども。

「んで。そちらの車椅子少女は？ 誘拐か？ 誘拐なのか？ もしそうだったら俺は二人を然るべき場所へ突き出さなきゃならんのだが」

「違う。断じてそんなのじゃないから。俺の妹だから。だからその手に持った端末を仕舞ってくれ！ 真顔でやられると冗談に聞こえないから！」

「そうだよ、ハヤトはそんなことしないよ！ 彼女は本当にハヤトの妹さんだから！」

と、真顔でそんな事を言い放ちながらリアリティを出す為にPDAを片手に見せつけたら二人の焦る顔が面白いのなんの。エミールまで焦る必要のないになwwwとはいえ、さすがにこれ以上は件の車椅子少女が置いてけぼりを食らうのでこれくらいにしておこう。もうちよつと続けていたかつたけど。

「冗談さ。ちよつとからかってみただけだ。そんなに焦るなよ。ほら、妹さんとやらが困っているぞ？」

「誰のせいだと思ってる（のき）……」

おお、ハモった。面白いな、この二人。

「えっと、兄さん……この人とはいったいどんな関係なんですか？」

置いてけぼりだった少女が隣の兄に訊ねる。その表情は訝しむ様に疑いのこもった表情だ。

「あ……どんな関係も何も、こいつは俺達と同じ新入生だ。四宮、こっちは俺の妹の『カレン』だ。一応挨拶をしたらどうだ？」

一応ってなんだ、一応って。まあ自己紹介は自分からすべきだよな。

「はじめまして。俺は四宮アキラです。如月君と同じ武芸科の新入生です。よろしく」

「あ、はい……カレ、”わたし”は『如月カレン』と言います。よろしく……です」  
慌てて一人称を装った少女の自己紹介が終わる。うん、率直に言って可愛いわ。恐る恐るといった様子で兄の服の裾を掴みながらちゃんと言いつつ切るところは偉いな。中学生の年齢でもそれは変わらないな。さすが二次元。やっぱり黒髪ロング妹は至高だよね。

少女——如月カレンは幼い頃から病弱で車椅子生活を余儀なくされている。そもそも如月ハヤトがこのリトルガーデンへの入学を決意したのも、ワルスラーン社が妹さんの治療と治療費を全て負担してくれるという破格の条件があったからに他ならない。

無論、本人にもそれ以外の理由があるのだが、今は語らないでおこう。

リトルガーデンには世界最先端の医療技術が完備されている。ナノマシン治療というのもあるくらいだ。そんなところで治療を受けられるのなら、入学もやぶさかではないのだろう。・・・その入学式当日には面倒事が起きたけれども。

「あの・・・一つお伺いしても、いいですか？」

「ん。なんだい？」

対面する形で車椅子の前に屈んだ俺に、妹さんは訝し気な様子を隠しもせず、さきの自己紹介の時よりもさらに疑いのこもった眼差しで俺を睨み付ける。幼女にガン見：それがジト目ならばある種の病気を患った大人ならご褒美なんだろうが、俺からしたら蚊に刺された程度で痛くも痒くもない。つまり俺にそんな性癖は無いわけです。はい。

つまり何が言いたいかと言うと、俺はロリコンじゃありません。(キリッ

「あなたは——

男の人が好きだったりしますか？」

「」

ジト目で目元に影の掛かった顔つきで真面目にそんな事を聞いてきた。当然、俺はその質問に即答する事は出来ず、一瞬だけ硬直した。何を聞いてんだ、この子。

「カレン！ 何変な事を聞いてるんだよ!? 四宮にそんな趣味は無いつて！」

「だって！ とてもじゃないけどエミールさんが男の人に見えないんです！ さつきからカレンの前でも構わず兄さんになれなれしいですし！ 本当に男の人だったら、その・・・そういう趣味の人だって疑うじゃないですか！ それにもしかしたら一人や二人、そういう趣味の人がいるかもしれないし！」

「いや、あれはコイツが勝手にそうしているだけで・・・とにかく、四宮もエミールもそういう趣味は持っていない筈だから！」

「僕は好きでくつついてるけど？」

「エミールは頼むからちよっくと黙っててくれ！」

うーん。仲睦まじい様子を見ているのは楽しいんだが、そろそろ移動した方がいいのではないだろうか。ここは往来の中で、しかも繁華街のど真ん中。そりや騒げば人は寄ってくるわけで周りはガヤで囲まれるようになる。

ま、これでも知り合いなんだから、そろそろ助け船寄こしてやるか。

「あー、妹さん。例えお兄さんにそんな趣味があつたとしても、俺にはさすがに無いからね」

「おい、さりげなく俺にはその趣味があるような言い方をするなよ」

「それにエミールもあ言つてることだし、単なるスキンシップとして捉えればある程度は緩和されるんじゃないかな？　いくら中性的な顔立ちをしても、あくまでもお兄さんとは友達同士なんだしさ。そう思えば必要以上に気にならなくとも思うよ」

「うーん……まあ、そういう捉え方なら……まだ、大丈夫だと思えます……多分」

随分と葛藤があつたのか、唸りながらも納得しづらい様子でとりあえず頷いてみせる妹さん。案外物分かりが良いな。原作では兄に関連する事なら結構手厳しい印象だったけど、やはりそこは優しく論じてあげるように言つたからだろうか。抜群とまではいかなかつたけど、多少の効果はあつたようだ。

顎に手を置いたまま考え込む様にしきりに首を傾げる様子は見ていて飽きないな。そんな妹さんの様子に驚いたような表情を浮かべるのはほかでもない如月兄だ。

「凄いな。あのカレンをうなずかせるとは」

「要は捉え方の問題だからな。自分の目と考え方に指向性を持たせれば、ある程度の柔軟性は持てるから。少なくとも面倒な事態は避けられるはずだ」

横に付いて妹さんには聞こえない小声で呟かれた言葉に答えると、如月は「なるほど」と感心するように頷いた。顎に手を当てながらの仕草が妹さんとそっくりだ。

まあ尤もな話。エミールの正体にも関係してくるからな。この時点で変に勘繰られて正体がバレたりでもしたら、今後の展開にどう影響を及ぼすか。昨日の件も含めて解らないから、慎重を期するほかない。

原作の展開を保てないと何が起こるか分かったもんじやないというのが俺自身の主な理由だ。まだ物語は始まったばかりで、今の時点でエミールの正体がバレるのは駄目だ。確か原作だと、昨日の夜中にエミールが自らの正体を如月に語った筈だ。それと二人の過去の関係性についても。だからここは一応注意を払って、俺自身も正体に関して知らない体で話を繋げていく。

「ところで、アキラはここで何をしていたの？」

そこで当の本人が話しかけてくる。しきりに俺の手にある青い袋に目を向ける。

「ああ、メ〇トがあったから寄ったんだ。これはそこで買った戦利品」

「メ〇ト?」

「アニ〇イト。アニメ専門店の略称だ」

エミールがなるほどと眩きながら袋の中身を隙間から覗き見る。あ、ちよつとー!

「……………ねえ、アキラ」

「……………なんだよ」

中身を確認したエミールから絞り出したような声で呼ばれる。その声色は何処か暗く、俺から見たそいつは何かを訊ねるのを躊躇っている様子だ。

なんだよ、言えよ。

「えと……君が買った物なんだけどね。その……暗くて見えづらかったんだけど、僕の目が正常なら……」女の子同士が寄り添ってお互いの顔を必要以上に近づけているような構図の表紙が見えたんだ。これって……」

「百合漫画ですが何か?」

「ハッキリ言った!! えっ?! 君ってそういう趣味持ってるの!! こわ!!」

おいおい、こわ!!とはまた随分な言い草だな。百合って尊いんだぞ? 少なくとも腐った女子が妄想を膨らませている男同士の絡み合いなんぞよりまだマシだ。

「別にいいだろ。好きで買ってるんだ。俺がどんな趣味持っていようが二人には関係な



いだろ」

「うっ……まあ、そうなんだけどね……アキラって案外、隠そうとしないんだね」

「趣味に関してはオーブンな方だ。変に隠しているよりかは気が楽だからな」

俺がそう言うと、エミールは一瞬だけ目を見開いたと思ったら、今度は苦笑いを浮かべながら呟いた。

「そっか……”楽だから”、か」

暗い様子で俺の言葉に反応を示したエミールが呟いた言葉を聞き逃す程、俺の聴覚は壊れていない。難聴系ラノベ主人公とは違うのだよ、難聴系ラノベ主人公とは！

「……」

ついでに言えば、そんな様子のエミールの隣で様子を窺う如月の難しそうな表情を見逃す俺ではなかった。違うからね。文面的に変な意味に聞こえなくもないけど俺にそんな趣味は無いからね？ ほ、本当なんだからね！

「え、えつと．．．．．そ、そうだ！ 兄さん！ 早く食堂に行きましょう！ カレン  
お腹が空いて倒れそうです！」

様子の可笑しい二人に気を遣ってか、さつきまで首を傾げていた妹さんがその場の空  
気を取っ払うようにそう言い放った。締まらないなあ．．．。

### 3時のおやつのはアイスは別格也。

繁華街を移動して本日二度目の食堂。受付を通る時、さつき俺の注文を聞いてくれたおばちゃん「またあんたかい」みたいな目で俺を見てきた。うん、ごめんなさいね。お詫びと言つてはあれだけど、売り上げに貢献しますんで許してつかあさい。

「——と言つて俺はスイーツを注文するのであった。まる」  
「誰に向かつて言つてるんだ？」

気にするな。ただの独り言だ。

場所は食堂。昨日の決闘騒動もあつて俺と如月、特に後者に注目が集まる事もあつて外のテラス席で食事をする如月兄妹とエミール。席は丸型のテーブルを囲むように如月兄、エミール、俺、如月妹さんと言つて配置で座つてゐる。さりげなく二人を原作主人公の両隣に座らせる俺有能。

そんなちよつとした有頂天になりかけてゐる俺は注文したスイーツを突く。ちなみにそのスイーツとやらは雪〇大福と温かい緑茶である。何であるんだろうかと思ひながら、気が付いたら注文を終えていたのはここだけの秘密。

「それにしても、四宮までついて来る必要なかつたんじゃないか？　すでに昼ご飯は済

んでいたようだし」

「いいじゃん、別に。大人しくしてるからさ」

適当にごまかす俺の言葉を訝し気な表情で見やる如月の顔が面白い。

ぶつちやけると、この後の展開を”知っている”ので俺はその顛末と、如月とエミールをからかって面白おかしく遊び倒したい一心で付いてきたただけだ。下心丸出しである。

「アキラが言うのと裏があるんじゃないかと妙に疑つちやうんだよね・・・」

「ほう。俺のどこにそんな企てがあるというのかね？」

「その顔だよ。いかにも下衆を極めたようなあくどい顔。ワザとらしく浮かべないでよ」

エミールが言うもんだから、つい反射的に隣のエミールに向けて顔の左斜め下を向けながらドヤってみせる俺にそんな言葉が返される。

ここに故郷にいる友人達がいたら両サイドから顎左側面と後頭部右側面に向けてストリートパンチのサンドイッチが入るんだが、残念ながらここにその友人達はいない。今年も故郷に帰れるかな。

「それにしてもこの時間にそれはどうなの？ アイスだよ、それ」

「いいじゃんか。食いたくなっただから」

俺は気にせず雪○大福を口に運ぶ。あー、それにしてもこの冷たい食感がたまんない。温かいお茶で口直ししながら何度もこの食感を楽しむのが好きなんだよなー。

「……………」(じいっ)

「ん？」

ふと視線を感じ、目線を横に向けてみる——如月妹さんが半目で口を栗みたいな形にしなげら、目の前に置いている雪○大福を凝視していた。彼女の右手のフォークはエビフライを突き刺したまま、今まさに口に運ばんとしている状態で静止しており、目線だけを俺の手元の雪○大福に向けていた。しかしあれだな。口を半開きになっているままだと、そのまま口からよだれを垂れ流しそうで傍から見たら行儀が良くない。ここは年上として注意するべきだな。

「妹さん。口を開けたままにするのは行儀が悪いよ」

「ハッ！ っ、ごめんなさい……」

我に返った妹さんは謝りながらエビフライを齧る。シユンとしながら食事を再開した彼女から目を離し、俺は二口目を口にする。

ふと目線を横に映してみると、やはりというか妹さんがゆっくりモゴモゴと口の中でエビフライを咀嚼しながらも目線だけをアイスに向けていた。そんなに欲しいのかこれ。

「そんなに欲しいなら後でお兄さんに買ってもらえばいいんじゃないかな？」

「えっ?! い、いえ! 別にほしいなんてことは……ことは……」

俺に指摘されて狼狽えた様子を見せる妹さん。否定しながらも目線が俺とアイスを交互に行ったり来たりしているので説得力が皆無だ。眺めていて面白いが、そろそろ人の妹で遊んでんじやねえオーラを曝け出している如月兄の睨みがアレなので程々にしようと思う。そういうえばコイツシスコンの気があつたんだよな。

「如月もそんな睨むなよ。別に妹さんにどうこうしようなんて事は考えてないんだから」

実際俺は如月達に付いてきただけで、偶々アイスを買った。それだけの事だ。

「い、いや……別に睨んでるわけじゃないけど、グッ! ゲホツ、ケホツ!」

そう言つて俺から視線を外した如月は睨みを利かせていたのを誤魔化すように視線を右往左往させつつ、自身が注文したワンプレートランチ——ペンネアラビータを口に運んでいく。

如月は無理矢理口に運んだ一口がそのまま器官に入ったのかむせ返る。唐辛子を使ったソースがそのまま喉に入ったみたいだな。あれはきつそうだ。

「ハヤト大丈夫!?! ホラ、お水!」

「ムグッ……ハアツ! わ、悪い。助かった」

咽る如月に目の前に置かれていた水の入ったコップを渡したエミールが、水を一息に飲み干した如月の安心させるように掛けた言葉でホッと安堵するように息を吐く。そんな兄の様子を心配そうに見つめていた如月妹もまた、同じように安堵した様子を見せる。

「すまん、如月。俺が余計なこと言ったばかりに」

「い、いや。今のはよく嘯まなかった俺が悪いから。気にするな」

俺の言葉にそう返す如月だけど、まだ若干咽ているご様子。こりや詫びとして代わりに水を注いであげなきやいかんね。

飲み水は基本的に受付前のカウンターに併設されたテーブルの上に常時置かれているので、コップを持ってそちらに向かわなければいけない。まあ当然の配置だよな。

「如月、コップ貸して。水を注いでくる」

「え、いや、そこまでしなくても・・・」

如月が何かを言おうとしていたが、有無を言わずにコップを奪い取り、俺はさっさと水を汲みに行く。

テラス席を離れ、如月の飲み水を汲みにウォーターサーバーにグラスをセットして、ポタンを一つ押す。セットされたグラスの中身に水が注がれていく。

トポポポと小気味良い音が流れ、三秒もすると縁下一c m 辺りまでグラスに飲み水

が注がれた。俺はそれを手に持つて如月達の居座るテラス席に戻ろうとする、その時だった。

「——ん。アキラじゃないか」

「あら、奇遇ね。あなたもお昼なの？」

昨日の放課後、シャーロット博士の研究室にいた時と同じ格好、白衣姿の父さんと母さんが現れた。

「父さんに母さん。昨日ぶり。俺はもうとつくに済ませてるけど・・・二人とも、今から昼飯？」

「ああ。昨日から博士の研究の手伝いでな。睡眠時間も大分削った上、体が凝り固まったから休憩がてら、博士の許可を貰って先に昼食を頂きに来たんだ」

「研究以外にも、昨日のあなた達の決闘デュエルの様子を吟味したりね。それから・・・昨日は残念だったわね、アキラ」

母さんや、そこには触れないでほしいんですががが。

「確かに、昨日のお前の決闘デュエルの経過はいい線を行っていたと思うが、やはり相手が相手だからな。あの結果は当然と言えるだろう」

「・・・まあね」

「だが、お前のハンドレッドの戦闘データを取るにはいい機会だったとも言える。お前



の力を高める為には、データは多ければ多い方がいいからな」

父さんのその言葉が遠回しな励ましをしてくれるのはいつもの事だ。昔から父さんは俺が落ち込んだ時は必ずと言っていい程、そうやって励ましてくれていた。

俺がまだ幼かった頃こそ仕事の関係で家を空ける事の多かった両親だけど、週に二〜三回は必ず連絡を入れてきてくれて、落ち込んでいた時に連絡が来るといつもそうしてくれていた。

離れていても、二人は一人息子である俺の事を案じていて、その都度俺自身も二人から愛されている事を実感していた——だからこそ、俺は今度こそ、この世界で俺を生んでくれた両親に報いる為に、武芸者スレイヤーとなる道を選んだ。勿論、もっと別の理由もあるけれど、ヴァリアブルストーン関係で研究している両親の仕事の手伝いもできればとも思っているのが現状だ。親孝行の一環として、ね。

「俺は平気だよ。寧ろ如月のおかげで、放校処分の対象だった二人の処分が無くなったんだから無問題ってやつさ」

「お前ならそう言うだろうと思っていた。しかしな、アキラ。お前もその状況の一部だったんだ。これから先もそうなる事は多くあるだろうから、関わった事は自分の出来る事を見つけて出して、それを必ず完遂させる。それだけは決して忘れるな」

釘を刺してくる父さんの言葉に俺は頷く。すると、二つのトレイ（日替わりランチ定

食かな?)を左右の片手で一つずつ持った母さんが、父さんに片方を手渡す。

「はい、タケヒトさんの分です」

「ん? ああ、すまない。買ってきてくれたのか。後で返すよ」

母さんから手渡された昼飯を受け取りながらそういうと、「気にしないでください」と返しながら母さんはにこやかに笑う。母さんのマイペースっぷりは相変わらざるよう  
で。

「さて。どこで済ませようか……アキラ、昼食を摂る場所にめぼしいところはないか? どうせなら日当りの良い所で食事がしたい」

「そうだね。暫くはリトルガーデンにお世話になるんだもの。またお仕事で離れ離れになるのなら、せめて今日くらいは一緒にしましょう、そうしましょう!」

恐らくはテラス席を希望している父さんと、昼食の同伴に誘う母さんだけれど、生憎と俺は如月達と席を同じにしている身だ。席を離れるのなら、まずは如月の分の飲み水を届けてからでないか。

「それなら、ちよつと如月達に一言断りをいれてからにするよ。外のテラス席にいるんだけどさ」

「ほう、あの如月君もいるのか。ならば、わたし達も一言挨拶をしなければな」

「そうですね。昨日の決闘は彼も頑張っていたもの。わたしもお話を聞きたいわ」

こりや付いてくる気満々だな。．．．仕方ないか。これを届けたら、別の場所で父さん達と卓を囲むか。

俺が先導して進むと、二人は後に追従してきた。

席が近づくにつれ、如月達のいた地点が何やら騒がしくなっている気がする。

「あれは．．．．．エミールか？ 何を騒いで．．．．．って、生徒会長達がいる」

「何？ クレア様もいるのか？」

「あら、本当。でも何かしら。揉めてるみたいだけど．．．」

父さんと母さんが口々に言うも、俺は急ぎ足で騒動の中心点へ向かうのだった。

原作改変が激しいと地味に面倒くさくなる。(byアキラ)

「昨日の決闘は引き分けだっただろ……。それなのに、どうしてハヤトが生徒会の手伝いをしなきゃいけないんだよっ」

「エミール・クロスフォード、わたくし達は如月ハヤトに付き人になれと言っている訳でも、生徒会の掃除をしると言っている訳でもありません」

エミールの向ける鋭い視線に対し、その場に現れた生徒会会長のクレア・ハーヴェイは向かい合ってそう答える。

俺は近づいて如月に状況を訊ねてみる。

「如月、どうしたんだよ、一体。いつの間にか生徒会長達がいるみたいだけど」

「ああ、四宮。俺達もたった今会ったばかりなんだけど……」

汲んできた飲み水を渡しつつ訊ねるも、如月もどうしてこうなったのか分かりかねてる様子だった。いや、そこは当事者なんだからわかってるよ。

「……だったら、ハヤトをどうしようって言うのさ」

「クレア様は正式に生徒会直属の選抜隊——セレクションズのメンバーとして、如月ハ

ヤトをスカウトしたいと言ってるのです」

あー、なるほどね。ちようどクレア会長達が偶然居合わせた如月を勧誘する所だったか。さっきの父さんと母さんとのやり取りですっかり忘れてた。

今だに敵意を滲ませたエミールの雰囲気には答えるのは、クレア会長の横で沈黙していたであろうエリカさんだった。眼鏡を持ち上げつつ、彼女の言葉に続くように会長が繋げる。

「どうです、興味はありましたか？」

「いや、興味って言われても……。そもそも、生徒会直属の選抜隊ってやつが何をやるのかもわからないし……」

まあ、如月の言いたいことも尤もだな。如月本人もまさか自分が武芸者スレイヤーになるなんて夢にも思わなかっただろうしな。原作知識から鑑みれば、如月がここに入學する事が決まったのも一月ほど前だ。武芸者や学園に関する事を知らないのも無理はない。

「武芸者の仕事とほぼ同じです。ワルスラーン社からの要請に応じて、ハンドレッドの操作能力を用い、任務をこなす事になります。加えて、任務内容には重要施設や各国首脳、及びV・I・Pの警護など、多岐にわたります。その中でも一番重要は、サベージとの戦闘たたかですわ」

選抜隊についての任職内容を知らない如月の言葉に応えるクレア会長は、続けてさも

当然のように付け加える。

「もちろん、武芸科に入学した時点でワルスラーン社に所属する一人の武芸者スレイヤーとはいえ、あくまで学生——セレクションズに入って本格的な任務に当たるかどうかは強制ではなく、あなたの自主性に任せる事になります。ただ、わたくしはこう思いますの」  
小さく息を吸い、クレア会長ははつきりとした声で言葉を紡ぐ。

「ノブレス・オブリージユ。力を持つ者は、力が無き人々の為にその力を振るう。それは、当然の事である——と」

それ故に、クレア会長はセレクションズ入りをした者にはそれ相応の待遇を用意していると言う。

彼女の言う事も一理はある。俺や如月だって、その『力』とやらを手にしてしまっているのだから、既にその責任やらが生じてしまっている筈だ。

俺は一月前のリベリアで、サベージの攻撃からエリカさんを身を挺して庇った際に、「誰かの笑顔を守りたい」という、特撮のヒーローに憧れる小学生レベルの『夢』を叶える為に。

如月は、イベントのハンドレッド適正体験で触れてしまった為に。車椅子生活で日常

生活も満足に行えない妹の治療をしてもらう為に。

経緯や目的は違えど、俺も如月もこの学園に通う者は皆自分の意思でこのリトルガーデンに来た。確実性は無いけれど、少なくとも今の現状からわずかでも前に進められるからこの地に降り立ったのだ。

ならば、昨日の一件でその力を多大に示してしまった如月が入学序盤で勧誘されるのも当然と言える。

それに関していえば、俺にだって同じことは言えるのだろうけど、昨日の決闘デュエルで俺は負けてしまっている。それもあつて、俺に勧誘の話なんて無いだろう。どうでもいいが。

「あら、そちらに居られるのは………四宮アキラと、ご夫妻ではないですか」

「はい。一昨日ぶりです、クレア様」

「本日も見目麗しいですわ、クレア様」

ん？　なんでかナチュラルに挨拶交わしてるみたいだけど。父さん母さん、もしかしなくても俺より先に会ってる感じですか？

「お前と空港で別れた後、シャーロット博士の研究室より先にクレア様達のいる生徒会室へ赴き、挨拶を済ませていたんだ」

「アキラは入学式の準備があつたから、保護者の私達から先にご挨拶に伺つたのよ。こ

こに入学できたのも、全てはクレア様達やシャーロット博士が働きかけてくれたお陰でもあるし、お礼を述べにね」

父さんと母さん曰く、そう言うことらしい。確かにここに入れたのは、誘ってくれたクレア会長達の働きによるものが大きい。俺は試験と面接を受けただけで、特にこれと言つて大きな事をしていなかったのを思い出す。

やべえよ・・・これじゃ、まるで昨日の決闘騒ぎは恩を仇で返す行為じゃん・・・！  
打ち首獄門レベルじゃん・・・今更それに気付かされるなんて謝罪じゃすまねえぞ・・・！

「・・・生徒会長」

「何ですの、四宮アキ・・・何故地面に膝を付いていますの？」

「いえ、誠心誠意の謝罪を込めた土下座の準備をと思ひまして・・・」

「前触れもなくそのようなことをされると困惑するだけなのですが・・・」

まあそうなりますよね。

一応、何故俺がそんな行動をしようとしたのかという説明をした上で会長には理解してもらつた。

「ーそれでしたら、特に気にする必要はありませんわ。土下座するのはお止めなさい」  
エー（？！）と、俺がそんな顔をしているとリデイさんからの睨み付ける攻撃！



アキラは真顔になった！

そんなやりとりを知ってか知らずか、俺が真顔になると会長は言葉が続けた。

「昨日の決闘は本来日程を取り付けてから行うつもりでした。ですが、ノア・シエルダンと劉雪梅の遅刻を利用して、わたくしはあなた方を釣ったのです。お二人の力量を測るために、ですわ。あのような経緯でそうになりましたが、結果的に、わたくしとしては概ね満足したものと言えます。反応数値は歴代トップクラスの如月ハヤト。ハンドレツドを手にして一月余りでリデイにあそこまで食らいついた実力を示した四宮アキラ。改めて、わたくしはあなた方の入学を歓迎致しますわ」

「は、はあ……どうも」

「さいですか……」

俺としてはあんまり満足してないんですけどね。結局負けたし。こんなじゃ……満足できねえぜ。(輝いてた頃の満足先生感)

微妙な表情を浮かべる俺と如月に対して、会長は「ですので」と続く言葉を口にする。「如月ハヤト。加えて四宮アキラ。わたくしは、あなた方を選抜隊——通称、セレクションズにスカウトしたいと思っておりますの。先程は如月ハヤトのみでしたが、わたくしは四宮アキラもスカウトすべきだと考えております」

「俺にも、ですか……それは何故ですか？」

「わたくしの私見もありますが、敢えて言うならリデイがそう進言したからですわ」

「は？ マジで？ あの副会長が？ なんて？」

俺が疑問符を浮かべる中、一步前に出たリデイ副会長は真剣な表情で俺に言葉を掛けてくる。

「四宮アキラ。昨日の試合は見事だった。最初こそは実戦経験もない素人かと思っていたが、蓋を開けてみれば貴様の戦いぶりは中々のものだ。結果こそ残念なものではあったが、処分対象だったノア・シエルダンと劉雪梅に対する貴様の心遣いは本物だ。故に、わたしは貴様のその『思いやり』に報いるべきだと判断し、不躰ながらもクレア様に進言したのだ」

「それがスカウトの話に繋がると？」

「その通りですわ」会長が引き継ぐように前に出て、リデイ副会長は一步後ろに下がる。「あなたも如月ハヤトもまだまだ武芸者の卵になったばかり——武芸科に入った者なら誰にでも言えることですが、これから次第であった方は更なる飛躍が望めますわ。まだ発展途上ですが、わたくしとしてはその力を是非とも世界の為、守るべき人々の為に振るってほしいと願っております」

それこそが、『力ある者の使命』です——そう締めた会長が、今度は手を差し伸べてくる。その気があるのならこの手を取れ、と。

言外にそう物語る表情と行動を読み取れない俺と如月ではなかった。互いに顔を見合せつつも、”力を持ったが故に入学を決意した”俺が、如月よりも先にその手を取ろうとした——その時だ。

「ちよつと待った!!」

後ろからストップの声が掛かった。その高い声帯と前世から聞き覚えのある、大久〇留美な声の主のいる方向に振り向いた。

「君達がハヤトやアキラを誘う理由はよくわかったよ。だったら僕もそのセレクションズとやらに入れてもらおうじゃないか!」

言わずもがな、先程から蚊帳の外状態だったエミール・クロスフォードが、無いようである筈の胸に手を当てて「自分も隊に加える」と強要してくる。ん? 待てよ。この場合『ある筈の無い胸に』と言った方が正しいのか? それとも『あつた筈の無い胸に』と言えばいいのか? あれ、どうすればいいんだ?

「突然何かと思えば……残念ですが、それは出来ない相談ですわ。エミール・クロスフォード」

「なんでさ。実力を示したハヤトやアキラは良くて、僕は駄目って不公平じゃないかい

「？」

「公平不公平の問題ではありません。セレクションズへの加入には、サベージと対等に戦える者、もしくはそのサポート役を十全にこなせる者でなければ」

自分も入れろと抗議するエミールに対し、会長がそれは出来ない事と理由を述べるものの、エミールは諦めきれずに食って掛かる。

「それなら当然二人にも当てはまる事じゃないか！ 結局は君達の都合で二人を側に置いておきたいだけだろう！」

「お二人は昨日の決闘<sup>デュエル</sup>で力を示しましたわ。結果は芳しくありませんでしたが、わたかし達は彼らをセレクションズに加えても問題ないと判断したからこうしてスカウトしているのです。昨日は控え室において、二度の決闘を見守っていたあなたならば、それくらい理解しているのではなくて？」

「ぐっ……それは……け、けど！ それなら僕だってハヤトに次いでハインドレッドの反応数値は高いよ！ アキラよりかは高いし、実力だって、少なくとも僕のほうに分がある！ それだけでも僕も入れたほうがそっちの利になる筈だよ！」

「利になるかどうかでもありません。確かな実力も必要ですが、一番重要なのは志のほうですわ。如月ハヤトはまだよく存じておりませんが、四宮アキラは一月前に力を持つたが故に、それを正しく振るおうと決意してこのリトルガーデンに入学してくれたので

す。そして、それは昨日の決闘で証明していただきましたわ。故に、わたくし達は彼を加入させるに足ると判断したのです。今のあなたに、それほどの志がおりですか？」

「ああ、あるさ！ サベージの討伐が大事だって事は十分に理解してる。けど、僕は僕自身の気持ちでこのリトルガーデンに来たんだ！ それでハヤトがセレクションズとかいう部隊に入れられると言うのなら、僕も入って共に戦うよ。それなら一緒の時間を削られずに済みそうだし、何より戦力は大いに越した事はないだろうからね！」

「呆れましたわ。ほぼ個人的な理由からではないですか。そんな理由でセレクションズ入りを志願されても、たとえ武芸大会で他の方より優秀な成績を示したとして、加入を認める訳にはまいりませんわね」

まあ確かにエミールは個人的な理由でここに入学した訳だしな。体内に流れる”アレ”絡みな意味もあり、如月に対しての気持ちなりも合わさって、ね。

「でも、要は僕がその実力を示せばいいってことだよな」

「あなたは何を仰りたいのかしら？」

「それなら僕は会長に決闘を申請するよって話さ。僕が勝てばセレクションズに入れる事。けれど僕が負けたら、潔く諦めるよ。この条件ならいいでしょ？」

まあた決闘展開かあああ。(呆れ)

原作の展開からして大方そうなるだろうとは思ってはいたけども、ここまで予想通り

だと一周回って笑えてくるな。笑いは笑いでも苦笑いだけど。

「残念ですが、あなたからの決闘デュエルを承諾することは出来ませんわ」

「なんでさ?」

「決闘デュエルをした者は例外なく、一週間の間は決闘デュエルを行う事を禁じているからです」

さてここで捕捉——基本的に人のエナジーには限りがある。それを全快させるには最低でも一週間もの長い時間を要するのが通例となっており、その間はどんな理由があるにせよ、在校生及び新入生に関係なく、決闘デュエル行為を禁止する校則がこのリトルガーデンにはあるのだ。

もしそんな校則が無かったと仮定して、連日決闘騒ぎなんか起きてみる。エナジーなんて幾らあっても足りやしないし体力も回復すらしないだろう。そんな万全じゃない状態で出撃なんかしたら、全滅は目に見えている。

おまけにリトルガーデンは武芸者を育てる教育校ではあるが、基本的に要請があれば出撃する事もあるのだ。現時点でこのリトルガーデンの主戦力である会長達生徒会の面々においてそれと勝負を申し込めないのが実情だ。

だから、校則としてそういう制度が設立当初からあるのだと、会長が言う。

「それなら会長以外の人と戦えばいいだけの話じゃないか。昨日は会長と副会長の二人がやったんだし、もう一人の副会長が相手してよ。そっちはいつでも万全の状態みたい

だしさ。その方がフェアでしょ」

と、そこで良い案浮かんだと言わんばかりに輝かせた表情を浮かべながら、エミールがそう提案した。

いやいや、流石に強行にも程があるだろうがそれは。原作ではここでエミールの矛先はリディ副会長に向いていたのに、昨日の決闘騒ぎで彼女は俺と戦う羽目になったせいだ、唯一決闘を行っていないエリカ副会長に向いた。この後の展開を考えたら戦力が著しく低下するのは避けたい事態だ。昨日の原作改変のツケが回ってきた感じかな？

仕方ない、ここは出張るか。

「いや。少し待ってって、エミール。昨日の騒ぎの当事者な俺が言うのもなんだが、さすがに連日で決闘騒ぎはいけないと思うんだよ。それも昨日は参加していなかった副会長を巻き込むのはちよつと・・・考え直さないか？」

「いやッ！ 「限界」だッ！ 僕は副会長に決闘を申請するねッ！」

「おい誰も振ってねえだろ！ 唐突に吉良化すんじゃないやねえよッ！」

ネタ挟むくらいならもう少し冷静になれよ。いきなり過ぎてついツッコンじまったじゃねえか。

「ともかくとして！ 副会長は僕と決闘してもらおうよ！ その証拠に・・・」

そう前置きするや、エミールは胸元から赤い鉱石・・・彼専用のハンドレッドを取り

出した。

「百武装、展開！」  
ハンドレッド・オン

展開の起動コードを口にすると上に放り投げられた鉱石が青い光を放ちながら分解、微粒子状のエナジーが彼の体を包むようにして収束していく。光が収まると、彼の両手足に白の手甲や具足が備わり、周囲に同じ色をした六つの浮遊物体が展開された。

「こんな風に、今すぐにも始められるよ」

「あなた、どうしてハンドレッドを所持して……」

突然すぎて事態を数瞬遅く理解した生徒会一同が驚きを露わにする。それを見ていた如月も「何でこんな事に……」と頭を抱え、その唯一の肉親である妹さんは事態をうまく飲み込めきれずに生徒会の面々とエミールを交互に見ていた。

ついでに言うのと、俺の両親はいたって冷静だ。父さんなんかは興味深げにエミールのハンドレッドを凝視しているし、母さんは「あらあら、綺麗ねー」と呑気に感想を述べている。こんな二人を見てみると、俺自身本当にこの二人の子供なのかと疑問に思えてくる。正直に言つてここまで原作改変が起こるなんて夢にも思わなかったからか、如月ほどではないにしろ今すぐにも頭を抱えたい気分だった。

「その話はまた後でね」

「おい、まだ俺もセレクションズってやつに入るって決めたわけじゃないんだし、やめ



ろって！」

「……ごめん、確かにちよつと熱くなり過ぎたかも……」

如月の宥めるような言葉に漸く冷静さを取り戻し始めたエミール。ナイスフォローだ、如月。これ以後は交渉にでも……。

「……いいでしょう。その申請、承諾します」

「ハアツ?!」

おいおいおい、これはちよつと予想外だぞ。まさかクレア会長に崇拜に近い感情を持ち合わせるエリカ副会長がまさかそんなあつさりど。

「エリカ。不用意に申請を承諾するのはよくありませんわよ」

「クレア様……申し訳ありません。ですが、エミール・クロスフォードのハンドレッド、わたしとしてはどうしても気になります。それに……」

「それに？」とオウム返しで訊ねるクレア会長にエリカ副会長が答える。

「ここまでされて今更引き下がられるなんて、生徒会副会長の一人として見過ごせません。クレア様、どうか決闘デュエルのご許可を」

「……仕方ありませんわね。いいでしょう。リトルガーデンの生徒会長として、この決闘デュエルを許可します！」

長い思案の末、現時点で二人の決闘デュエルが可決された。マジかよ……。

「なあ、四宮。あれ、このままにしといて良いのか？ さすがにカレンやお前の両親がいる傍でなんて・・・」

二人の対決が開始される中、如月は小声で俺に耳打ちをしてくる。のだが・・・。

「サア、モウイインジャネ・・・」

「し・・・四宮？　なんか、何かを悟ったような目になってる気がするんだけど・・・」

「キノセイジャネ・・・モウ、ナンカ、コウ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「メンドクサクナッタ」

もうどうにでもなれや。連日で起きる原作改変なんぞどうやったって処理しきれないことを悟った俺は、半ば投げやり気味に如月にそう返した。

もう起きてしまったことは仕方のないことだ。ここは穏便に済ませてもらうしかない。幸いにも、まだクレア会長とリディ副会長は冷静そのものだ。もしやばくなくなったら、二人のうちどちらかが止めに入るに違いない。・・・決して面倒くさくなくてもう

割り込みたくなかったと思つてなんかいない。ほ、本当なんだからね!?

俺は先ほどまでいた席に腰かけ、まだ食っている途中だったモノに目を向ける。

あ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・アイヌ溶けてらあ。

シヨツク。

やだ、俺ってば空気すぎ。 byアキラ

食堂のテラススペースに面した広場。

クレアからの了承を得て、エミールとエリカは対峙していた。

「手加減してあげるから、早く掛かってきなよ。副会長さん？」

挑発を掛けるエミールの周囲に漂う六つの浮遊砲台がエリカに向けられる。

「そんな挑発紛いに乗る気はありませんが、今は敢えて乗ってあげましょう。無論、ハンドとしてですが——百武装・展開!!」

対峙するエリカは冷静にそう返すが、持ち直した眼鏡の奥に見える彼女の瞳からは明確な敵対心が見て取れた。そして懐から取り出したヴァリアブルストーンを頭上に放り投げると、淡い光を放ちながら微粒子が彼女の手足を包み込む。

淡い紫色のプロテクターが彼女の両手足に作り出されていき、次いで右手にさらに粒子が集中して集まりだしていく。それらが一つの形として作り上げたのは、プロテクターよりも大型の籠手のような物体だった。

「それが副会長のハンドレッドなんだね」

「その通り。これが私のハンドレッド——」  
エヴァーラスティング  
 《絶対運命の鎖》です」

作り出されたそれを一瞥してエミールが問うと、エリカは自身のハンドレッドを名乗り上げる。

「——なあ、四宮。止めなくて本当に良かったのか？」

「こうなっちゃ仕方ないと思う。何より一昨日の決闘を承諾した俺達に止める権利なんて無いしな。それに副会長は上級生で実戦経験者だ。何があっても状況を鑑みて切りのいい所で終わるだろうよ」

「当然ですわね」

まるでさも当然のようの言つてのけるアキラにハヤトは顰めつ面を浮かべつつ、隣にいるクレアが言葉を紡いでいく。

「二昨日の件に関してはおたくしから申し込みましたが、それを承諾したのは紛れもないあなた方ですわ。その時点で、二人の決闘を止める権利は既に失われております」

「新入生であるエミール・クロスフォードはともかくとして、エリカならば納め時もわかっている筈だから問題はないはずだ。そうですね？ クレア様」

引き継いだように言うリデイの言葉に、クレアは「そうですね」と短く肯定するのみに留めた。視線は相対する二人の様子をじっと観察しているようで、リデイとアキラ

達も、話を止めて二人の勝負を見届ける事にした。

「エミール・クロスフォード。どうやらあなたのハンドレットはドラグーン型のようですね」

「さあ。どうだろうね。砲台かもしれないし、そうじゃないかもしれないよ?」

「・・・何を言ってるのですか? あなたの武装はどう見ても遠距離攻撃系のドラグーンではないですか。只でさえクレア様と同系統の武装を作り出す癖して、そうではないかもしれないなどと戯言をのたまうとはっ・・・!」

どうやらエリカにとって、新入生であるエミールの武装が自身が崇拜するクレアと同列の武装を形成することに我慢ならないようだ。空いている左手で拳を握り締めている。

しかし、それも一瞬だけで、次の瞬間にはエリカは冷静な眼差しでエミールを観察しながら言葉を紡ぐ。

「ふ・・・しかし、あなたの武装では砲撃などで周囲に被害が出てしまいますね。どうしたものか・・・」

挑まれ、それを承諾した手前、今更止めるといふ選択肢が取れない以上、相手側に何

らかの制限を設ける他ない——そんな考えが頭を過ぎるが、それを当の本人であるエミールが否定する。

「なら、周りに被害が出ないようにすればいいんだよね？」

「は？ 何を言つて……ッ!!」

何を言うかと思えばと、思案していた思考から意識をエミールに向け直す——そこでエリカは自身の目を疑つた。

エミールの周りに浮遊する砲台の一つが”粒子状に散る”。

それらが砲台とは別の、より具体的に言えばランスのような真つ直ぐ伸びた武器へと形を変えていく。

「武装が……変わった……!?!」

文字通り、彼の武装が形を変えたのだ。先程は遠距離砲撃を行える”砲台だったもの”が、突くことを前提とした”刺突武器”を形成した。普通ならばあり得ない筈の光景を前にしたエリカの胸中で、懐疑的な疑問が浮かび上がる。

(彼のハンドレッドは【ドラグーン型】としてデータベースにも記載されていた筈……それが、リデイと同じフアランク型のランスに形を変えるなんてあり得ない!)

つい先程、自身の使う眼鏡型のモニターでエミールのハンドレッドを直前に調べたので間違いなかった筈だ。

本来、クレアのようなドラグーン型は遠距離での射砲撃を得意とする物だ。それがいつもの浮遊する砲台であれ、手に持って砲撃を行う“銃”のような形を形成しても何ら可笑しくはない。

しかしである。彼のハンドレッドはリトルガーデンのデータベースでも記載されている限りでは、そのクレアと同型だった筈。しかし、現実では遠距離系から近接系へと変えられ、自身が考えうる限りの行動予測が遥かに上回る形で崩されてしまった。

だが、それで彼と対峙する意欲が失われた訳ではない。これまで幾度となくサベージや他の武芸者との戦いで研鑽を続けてきたのだ。この程度で激しく動揺してしまうほど、エリカの精神は柔ではなかった。

（いいえー。エミール・クロスフォードのハンドレッドの正体はともかくとして、あれは明らかにリディイと同じフアラランクス型と見て間違いないでしょう。ならば、まずはその対抗策を練らなくてはなりません！）

意識を切り替えて、まずは相手からの出方を窺う事にする。

「そろそろ行っても良いよ——ねッ！」

エリカの動向を窺っていたであろうエミールが答えを待たずして先手を仕掛ける。僅かに腰を降ろして形成したランスを正面に構え、一迫を置いて突撃する。

エリカとの距離は僅かに数メートル程しかない。その距離を目測で測ったのか、両足



にエナジーを集中させて蹴りの衝撃を加えた加速で彼女との距離を一瞬に詰め、手のランスを突き付ける。

「・・・ッ！ その程度ッ！」

辛うじてエナジーによる不可視の防壁——Eバリアを張って突きを受け流したエリカは右手のハンドレッド、《絶対運命の鎖》からフック状の物体を、目の前のエミール目掛けて飛ばす。

それを見切ったエミールが仰け反りで回避し、自身の顔を狙っていた筈のフックを宙返りの勢いを乗せた足蹴で上に弾く。

距離を離すエミールと同じように、バックステップで後方に下がるエリカ。二人の足は同時に地に付き、一瞬の互いの動きを分析する。

（咄嗟に身を翻して初撃を避けましたか・・・フックを飛ばした際に鎖を彼の身体に絡め、動きを封じる算段でしたが、弾かれるとは予想外・・・流星は新入生第二位と言った所ですか）

（今のを避けてカウンターを狙ってくるとはね。武器を再構築した際の動揺を引き摺らせたまま勝負を決めたかったけれど・・・流星に実践経験豊富は伊達じゃないみたいだね）

互いに先程の初撃を鑑みて、二人は次の手段を構築していく。今のように搦め手や油

断を誘った姑息な手段を取る選択肢を摘まれた以上、別の手を模索するしかない。一瞬の攻防だけで、二人の脳内には既に次なる一手が紡がれつつあった。

「ふっ！」

次に攻撃を仕掛けたのはエリカだった。右腕を大きく振りかぶり、先端のフックをチエーンごとエミール目掛けて投げ飛ばす。

「そんな攻撃！」

しかし、エミールは落ち着いてそれに対処する。わずかに前に体重をかけて前進。走り出したことでチエーンの追突から逃れつつ、ランスの穂先を前面に向けながら呐喊。

「——ッ!!」

「見え見えなんだよね！」

地を踏み込む足にエナジーの付与で一気に加速、距離を詰め、そのままランスを眼前のエリカに刺突する。エリカは寸での所で突きを防ぎ——彼の右腕を“掴んだ”。

「へっ?」

「それはあなたもです!!」

叫びながら、エミールの着用する制服の襟元を左手で掴みつつ彼の足を地面から蹴り離し、突撃の勢いを殺さずにそのまま投げ飛ばした。

「うわわっ、ったあっ?!」

奇妙な声を上げながら地面に叩き付けられるエミール。地面が土だったお陰か、アキラ達が遠目から見ても、たいした怪我也見当たらないようである。

「いてて……ハンドレッド使ってるのに、武術使うとか卑怯じゃないの？」

「エナジーバリアと同様で、護身術も立派な身を守る術の一つです——尤も、サベージ相手には意味のない技術ですが」

所謂“背負い投げ”で地面に伏せられたエミールが呻き、ずれた眼鏡を元の位置に持ち上げ直したエリカが当然とばかりに返した。

「僕の挑発に乗るとか言いながら、その実は全然乗ってなんかいないでしょ？」

「いいえ。わたしは確かに”ハンドテとして”あなたの挑発に乗ると宣言しました。そう感じるの、単純にあなたがわたしの力量を測り損ねてるだけではないのですか？」

「言ってくれるね……！」

エリカからの煽るような言動に小さな苛立ちを顕にするエミール。立ち上がりながらランスを粒子に還元しつつ、新たに巨大なくの字型の武器に作り替える。

「また武器が変わった……」

再び目の前で新たに武器を形成したのを目撃して、観察するような眼差しを向けながら眩きを溢す。エミールはジャンプして形を変えた武器、ブーメラン状のそれをエリカ目掛けて投擲する。弧を描きながら飛来するそれを、エリカは苦も無く回避する。

「また武器が変わりましたわね……。如月ハヤト」

「は、はい！」

エミールの動きを観察していたクレアは横に立つハヤトに声を掛ける。突然呼び掛けられたからか、当の本人はすつとんきような声を上げて振り向く。

「彼、エミール・クロスフォードのハンドレッドは一体なんですか？ あなたなら何か知っているのではなくて？」

「え、いや。俺も何も知らなくて……」

エミールの使うハンドレッドの特性について説明を求めると、ハヤトは一昨日の放課後でエミールが自身のハンドレッドを展開した所を初めて見ただけの為、詳しい事情を知らない。

焦って首を左右に振る様子を鑑みるに、彼は本当によく知らないのだろう——そう踏んだクレアは、ハヤトの横で同じように観察している様子のアキラに問いかける。

「四宮アキラ。あなたは何か知っていらして？」

「いいえ、何も。というか、自分もエミールのハンドレッドを見るのは今回が初めてです」

クレアは、もしアキラが何かを知っているのなら、質問責めでもして探ってみるつもりだった。しかし、思案する仕草も見せずに即答したのを、クレアは訝し気になってアキラを睨む。

「四宮アキラ。貴様、エミール・クロスフォードの形状を変えるハンドレッドを見てもたいて驚いていないようだな。何故だ？」

リディのその問いこそ、今のクレアを疑問に思わせていたものだった。

「俺のハンドレッドも似たような事はできますよ。模造している点で彼のとは微妙に異なりますけど、運用的な意味で言えば、彼のハンドレッドと俺のハンドレッドは共通していますね。だからたいして驚く程でもないんですよ」

「フム………確かに昨日の試合を鑑みるに、貴様のその反応も頷ける、か……」  
リディはそう納得するも、クレアの表情は未だ晴れず。今のアキラの説明だけでは納得しきれていないようだ。

（確かに、四宮アキラのハンドレッドも複数の武器を生成するタイプのようでした………しかし、それだけで大きなりアクションもないなんて有り得ませんわ。恐らくですが………彼の、エミール・クロスフォードのハンドレッドについて、四宮アキラは『彼の何か』を知っていますわね）

アキラの変わりようのない表情を見て訝しんだクレアはもう一度訊ねようと思った、

そんな時だ。

「——エミールのハンドレッドについてなら、ボクが答えようじゃないか」

観戦するクレアとアキラ達がいる位置から反対の方向から声が響き、戦いあうエリカとエミールを除いた一同は一齐にそちらへ振り返る。

「あなた、どうしてここに・・・」

振り返った先にいたのは、リトルガーデンに研究所ラボを構える技術主任メインテクノロジスト、シャーロット・デイマン・デウスだった。

「食事に来たからだよ。その後に、君達の耳に入れておきたい話もあったから、会えたことは丁度いいのだけだね——とはいえ、その話の前にエミールのハンドレッドについての話をしたほうが、君の問いには答えられるかな」

「まどろっこしいですわよ。彼は、いったい何者なんですの?」

回りくどい話し方で語るシャーロットに嘆息交じりに先を促すクレア。そんな彼女に肩をすくめながらもシャーロットは彼女の問いに答え始める。

「エミールとボクの出会いは五年前に遡るんだ。仕事でグーテンブルグの病院に訪れた際に、ぜひ診て欲しいと言われた患者がいてね」

「それが、エミール・クロスフォードだったと?」

「そうだ、とシャーロットが頷く。」

「そこでボクは、エミールに武芸者としての類稀な才能があることに気付いたんだ。それで研究中だったハンドレッドをエミールに与え、実験に付き合わせた。その結果、彼は、ハンドレッドを上手く操作できるようになったし、制御コントロールすることもできるようになった。その反応数値を誤魔化すこともできるくらいにね」

「それって、まさか……」

「彼のヴァリアブルストーンの反応数値は、如月ハヤトと同等——いや、現時点でそれ以上なんだ。それでいて、その操作能力は高く、その形態かたちを持たない。だから、エミール・クロスフォードのハンドレッドに型はない」

「……………」

クレアの顔には、そんな聞いたことがないと書いていた。そんな表情をしているのかと知ってか知らずか、シャーロットは溜息を付きながら続ける。

「ボクだって、そんなハンドレッドを扱うのは初めてだったさ。それだけに苦労したよ。あの、型を持たない『イノセンス』——そして可変型の武器である、『アームズ・シミュレーション全てを覆い隠す霧』をつくりだすのにはね」

「つまり、あなたは自分の研究の為に、エミール・クロスフォードをこのリトルガーデンにスカウトしたということですかね」

「キミに彼のことを伝えていなかったのが不服かい？ エミールには自分の特殊な能力チカラ

のことは誰にも言わないでくれと頼まれていてね」

「……あなたや彼の意図がなんであれ、このリトルガーデンに優秀な武芸者スレイヤーが増えるのであれば、わたくしは構いませんわ」

グツと両手に拳を握りしめながら、クレアデュエル決闘を続けている二人に再び視線を戻す。

（——まあ、だからといって、四宮アキラのあの様子を裏付ける理由にはならないのですが）

戦いを尻目にアキラに向けて細めた目線を向けながら、今はエミールのハンドレットの正体が分かっただけで十分としよう」と理由をつけながら意識を二人に向け直した。

「はあああああーっ!」

手元に戻ったブーメラン状から再び先程のランスに形状を変えた武器を突き出し、回避直後の硬直の間隙を狙われたエリカは右手のハンドレットを盾にしながら突きを防ぐ。が、咄嗟に防いだ為はその威力を完全に凌げる筈もなく、エリカは「くうっ!」と小さく呻き声を上げながら後ろに押し退けられる。

「さっきは『周囲に被害が及ばないように』って言ったけどさ——」



エミールがそう眩きが聞こえた直後、目の前に突き出されたランスの穂先が、左右に分割し、割れた。その中央部に見えるのは銃口らしきモノ——それにエナジーが集まっていく事にエリカはすぐに気付いた。

「この至近距離で撃てば、周りに被害は及ばないよね。どうする？」

端的に言った言葉の中に、『勝敗は付いた』と意味が含まれている事にも気付き、エリカは悔しげに歯を食いしぼる。現状、彼女のエナジーはまだ余裕があるが、眼前に収束していくエナジーの量から考えて残るエナジーを削りきる魂胆は丸見えだった。反撃をしようにも、そんなことをすれば自身の腕よりもエミールの指先が最初に動くの目に見えていた。

（わたしの、敗北……か）

悔しいが、自身の敗北が濃厚なこの戦いに潔く降参の宣言をしようとした——その時だ。

——ブーツ、ブーツ

クレアやリディ、そしてエリカのPDAから低いブザー音のような音が鳴り響いた。

「なに、それ……？」

目の前のエミールが疑問の声を漏らす。それに伴い銃口を下ろし、続けてシャーロットがそれに答えた。

「思ったより早く招集がかかったようだね」

「招集って、なんなんですか？」

疑問の声を上げたハヤトに答えたのは、やはりシャーロットだった。彼女は「なに、簡単なことさ」と前置きしながら、

「——近隣の島にサベージが出現した、つてだけさ。そして、ボクから話したかつたもう一つの事が、その招集についてなのさ」

さも当然のように、加えてしたり顔でシャーロットはそう言つてのけた。

その直後、大きなサイレンの音がリトルガーデン全体に響き渡った。